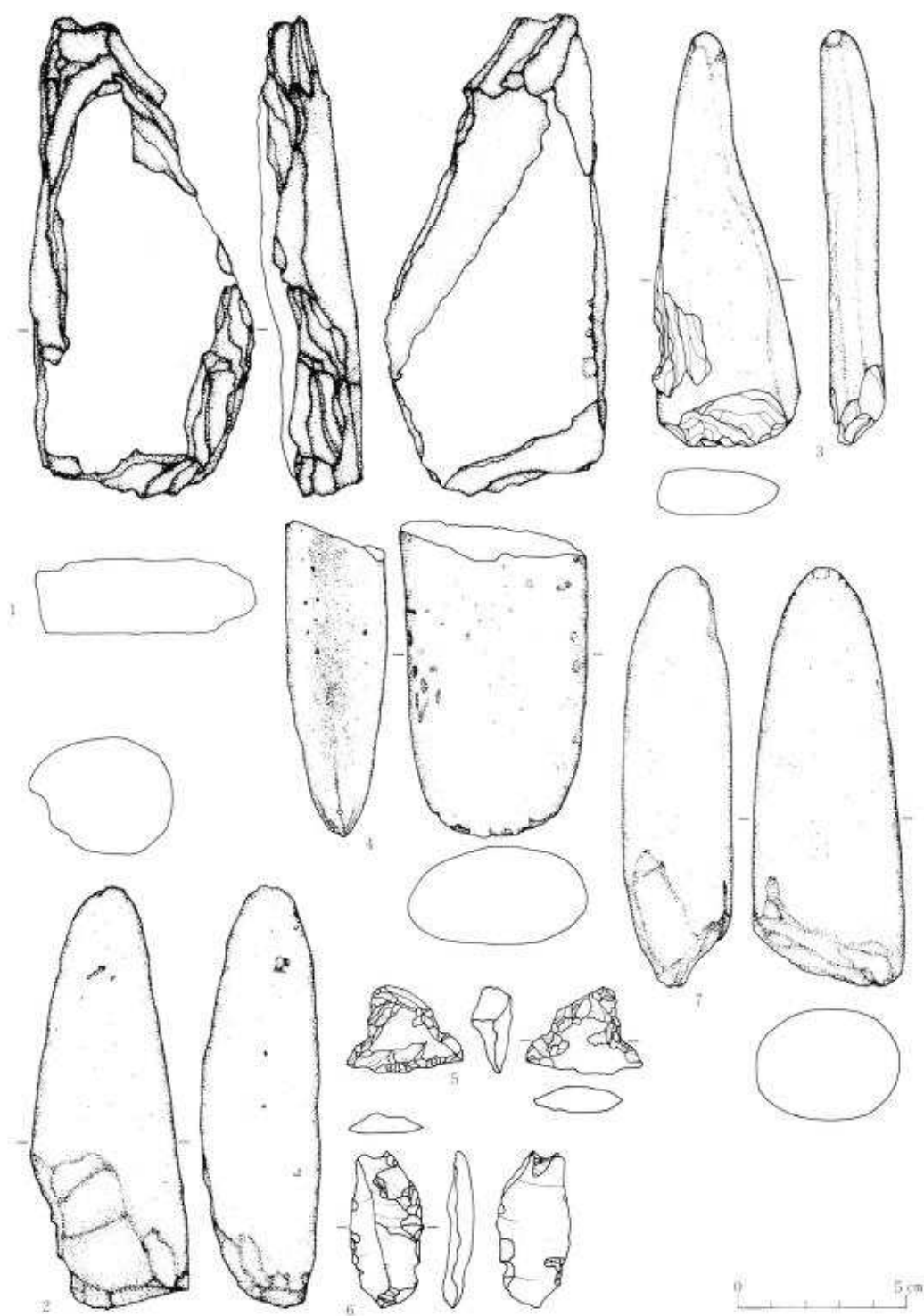
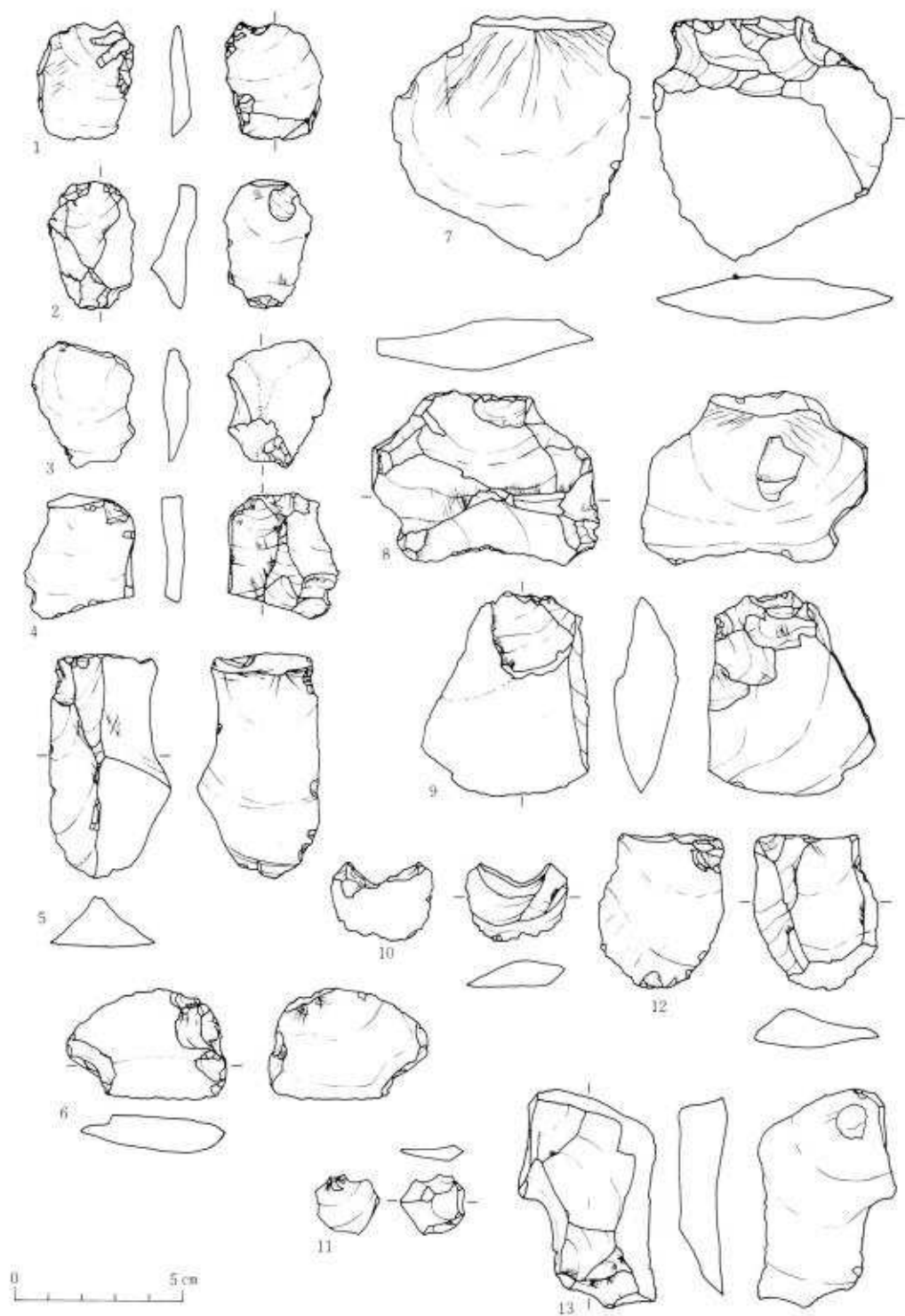


(第2-2表) 縄文時代及び弥生時代の土器類の観察表(その2)

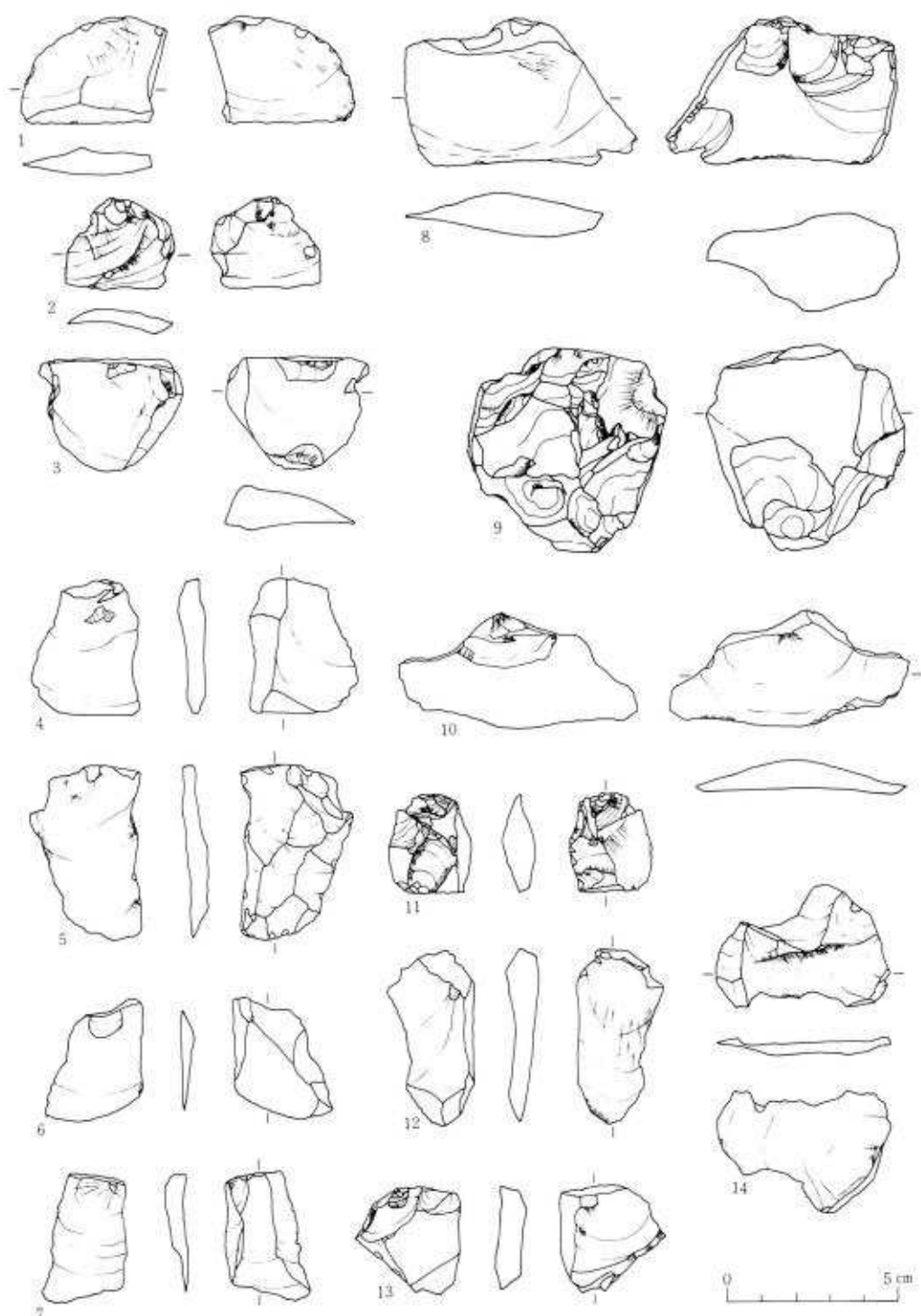
図版 番号	写真 番号	出土区域	器 種	破片部位	色 調	胎 土	口 辺 形 状	文 様 構 成
5-1	6-5	DA03	小型浅鉢	全体長	橙	粗 雲 母	平縁、外傾	やや右上がり単節縄文、S字原体
2	6-6	CJ50	"	全体長	"	やや粗 雲 母	内寄、外傾	口辺沈線一条、口辺～低辺、右下 り単節縄文、内面横ナテ痕
3	"	C103	小型壺	口辺部	"	やや密	平縁、外傾	口辺部無文、同上部右上がり単節 縄文、内面ヘラミガキ痕
4	6-8	DC06	台付土器	全	にぶい 褐色	やや密 雲 母	"	坏部内面、脚部内面ヘラミガキ痕 口辺部内外面沈線各一条、脚付着 部一条、口辺～脚部右上がり横単 節縄文
5	7-2	CA03 2番	円盤状 土製品	土器柄部	にぶい 褐色	粗		網目縄文、内外中央部エグリ穴有 り
6	6-7	DA03	小型浅鉢	口辺～胴	赤褐色	やや粗 雲 母	平縁、外傾	頸部沈線一条横位縄文か、S字原 体、内外面とも炭化物多量に付着 口辺部無文
7	7-3	"	台付土器	脚 部	にぶい 橙 色	やや密 雲 母		沈線区画、縦位右上がり単節縄文 帯+無文帯
8	7-2	"	台付土器	脚 部	灰褐色	やや密		沈線区画、横位単節縄文、S字原 体+無文帯
9	"	DC06	台付土器	脚 部	にぶい 橙 色	やや密		沈線区画、横位単節縄文、S字原 体+無文帯
10	"	CJ03	台付土器	脚 部	極 暗 褐色	やや密		底辺部沈線三条、沈線区画文?
11	7-1	DA03	"	"	にぶい 褐色	"		右上がり単節縄文+平行沈線
12	7-2	CJ03	"	"	褐色 の 灰	やや粗		沈線二条、沈線区画、右上がり縄 文
13	7-8	DB06	"	体部下半	にぶい 橙 色	緻 密	外傾	沈線文+右上がり単節縄文
14	7-1	CJ03	小型壺	底 部	褐色 の 灰	粗 砂多し		外面木葉し、内面横ヘラケズリ
15	"	DG03	壺 ?	"	にぶい 橙 色	やや粗 砂多し		外面網代痕
16	"	C150	壺 ?	"	浅黄橙	やや粗 砂若干		外面網代痕
17	"	DA03	深 鉢	底 部	にぶい 褐色	粗		外面、網代痕
18	7-4	CJ06	"	"	"	"		底辺部右上がり単節縄文、外面網 代痕
19	7-2	不 明	不 明	脚 部	にぶい 橙	密 砂多し		網目縄文
20	"	"	"	"	"	"		"
21	7-8	C103 2番	壺	底 部	"	密		底部無文、側下部細い平行縄文、 右上がり縄文



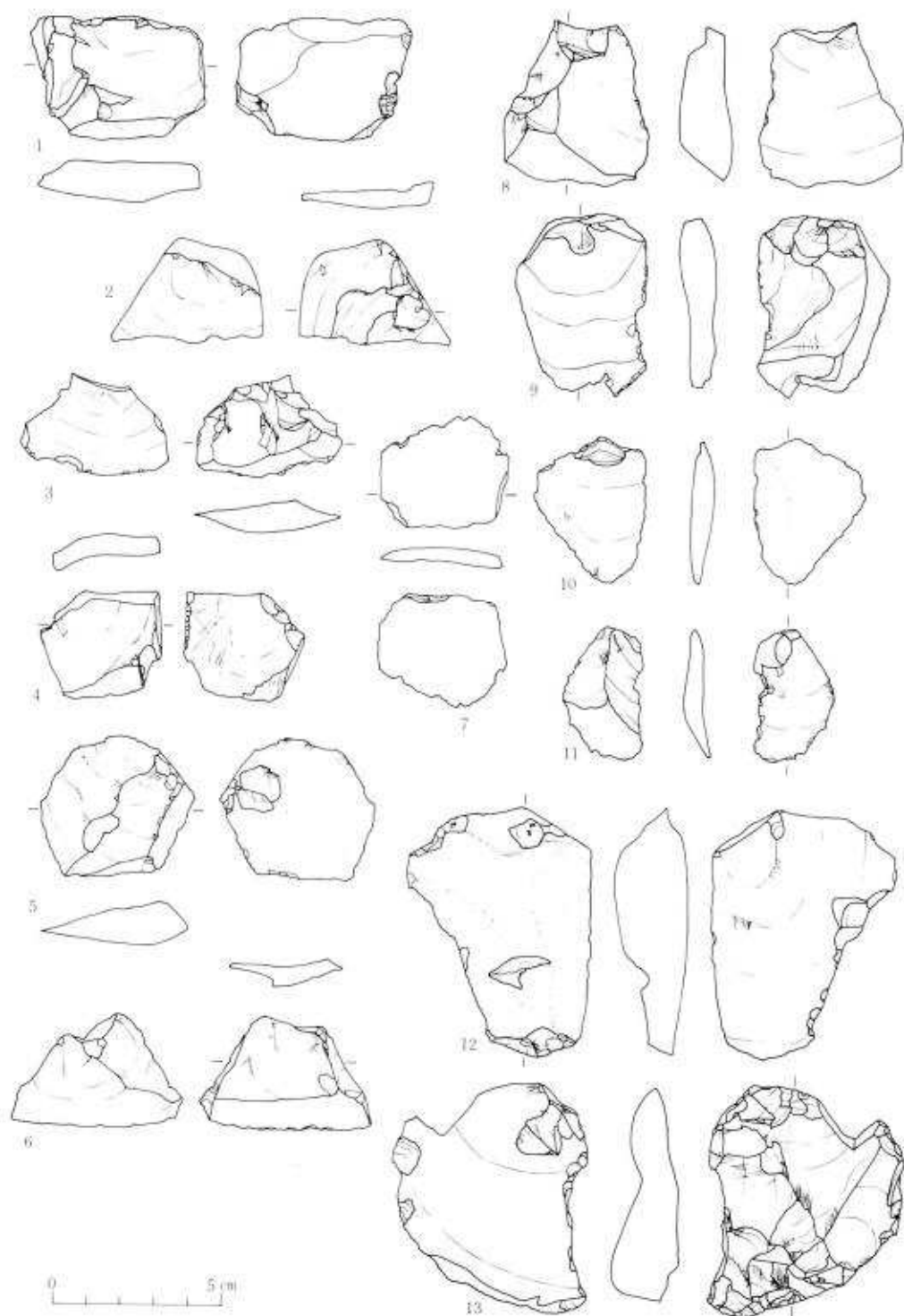
(第6图) 弥生時代遺物包含区域出土石器実測図



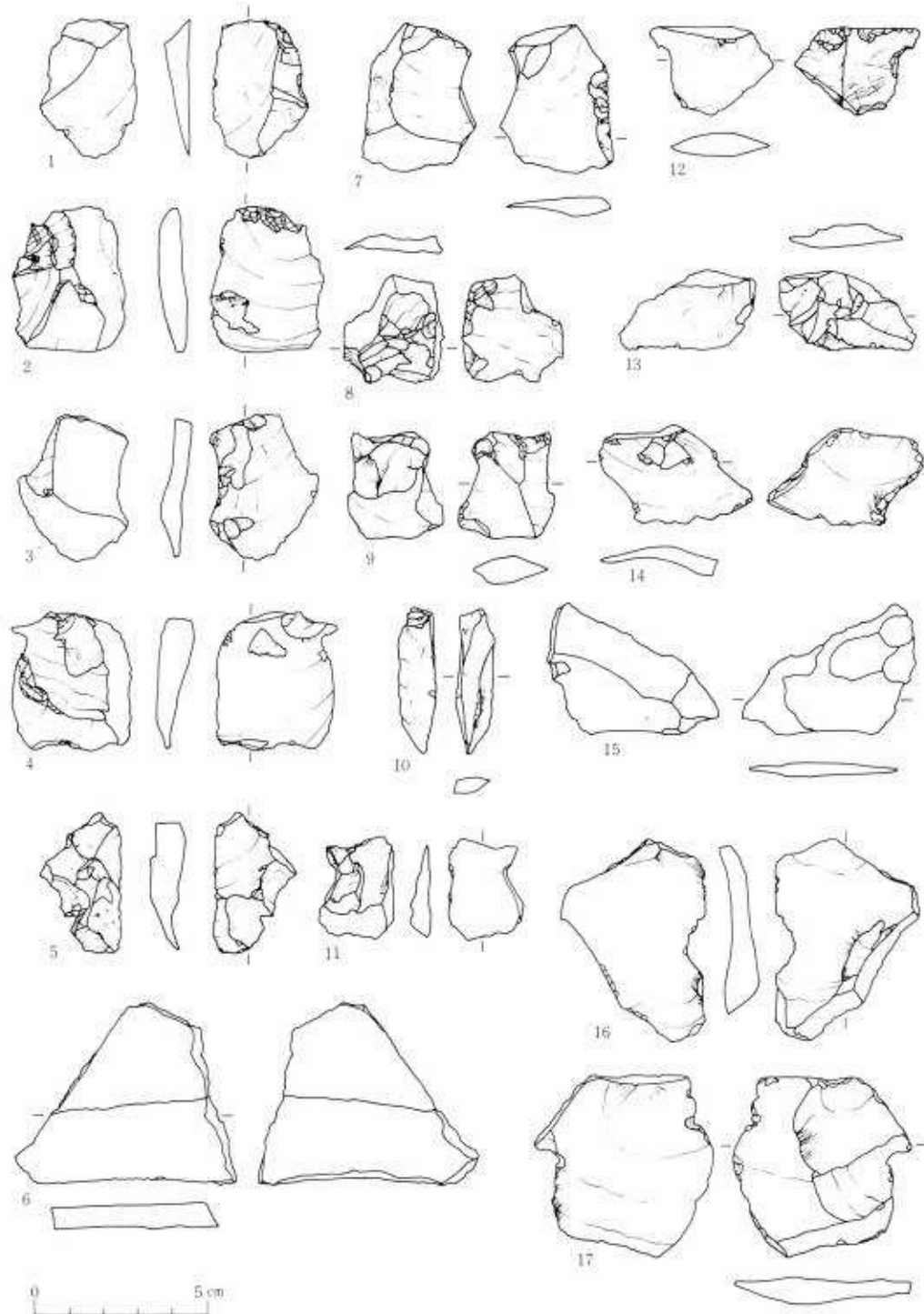
(第7図) 弥生時代遺物包含区域出土石材実測図(1)



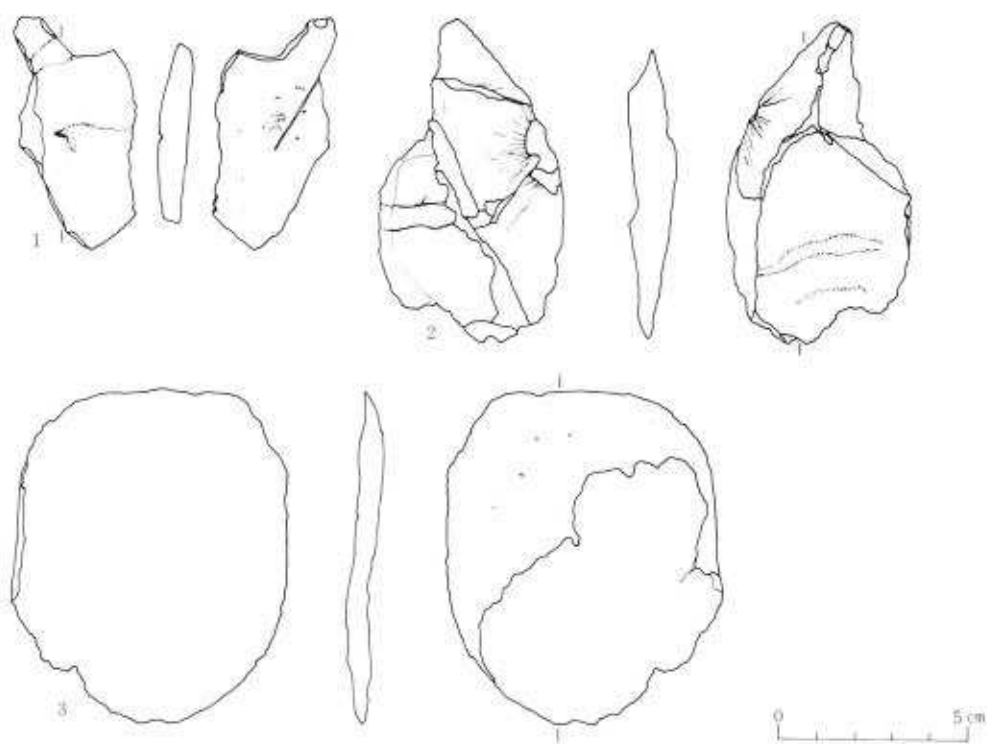
(第 8 图) 弥生时代遗物包含区域出土石材实测图(2)



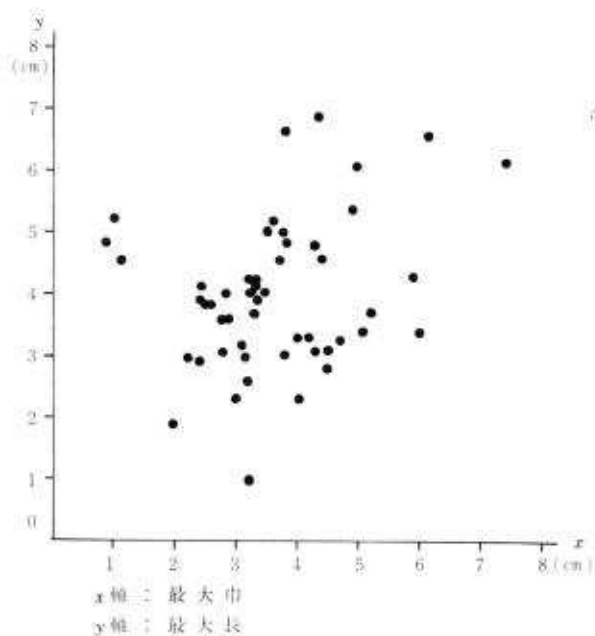
(第9圖) 弥生時代遺物包含区域出土石材実測図(3)



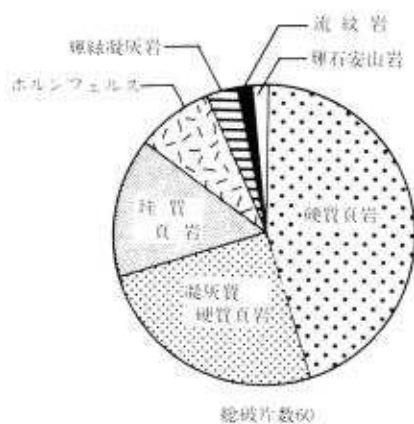
(第10图) 弥生时代遺物包含区域出土石材実測图(4)



(第11図) 弥生時代遺物包含区域出土石材実測図(5)



(第3-1表) 頁岩類のフレイクの長巾関係



(第3-2表) 出土石材にみられる石質の割合

B、石器類（第6図1～7、第3表、写真8-1～2）

石器は土器片の数量に比べて遙かに少なく、全部で7点出土しているに過ぎない。その中には第6図1のような打製器具の未製品と思われるものや、3のような扁平細長の礫の一端を打ち欠いた打製の石斧状石製品、あるいは2、7のような刃部の欠けた乳棒状磨製石斧、4のように体部上半が失われた蛤刃の磨製石斧、5、6のようなチッピングの施されたナイフ類と思われる剥片石器などがある。

石器類の特徴を見ると、1は素割りされたホルンフェルス化した粘板岩の素材の側面に成形のため調整痕が若干残っている。2は横断面が円筒状を呈し、その器面は風化が集みザラザラしている。4は刃部を除き、器面の荒れが目立ち、一見、敲打された器面のように見える。5では凸字形を呈するフレークの三方の側面にチッピングが施されている。そのうち、左右の側面に当たる部分は表裏両面にチッピングが見られ、残りの1つの側面のみにチッピングが残っている。6はフレークの縦長の楕円形状のフレークの片面のみにチッピングの痕跡が見られる例である。このような例はフレークとして分類されたものの中にも2～3見られるが、石器とみなし得るものか検討の余地のある個体である。

（第4表）弥生時代遺物包含区域出土石器一覧表

図版番号	写真番号	出土区域	器種	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質
6-1	8-1左	C103	石斧状 打製石器	14.3	6.7	2.4	321.5	ホルンフェルス
2	8-2左	D区	石斧状 磨製石器	12.6	5.7	3.6	272.0	石英安山岩質 礫 風 化 岩
3	8-1中	C103	石斧状 打製石器	12.3	4.4	1.5	103.5	粘 板 岩
4	8-1右	DB03	石斧状 磨製石器	9.4	5.55	3.2	232.0	安 山 岩
5	8-2右上	DB06	不定形刃器	3.4	2.55	1.15	7.6	チャート質 輝緑凝灰岩
6	8-2右下	C1-D C	不定形刃器	4.7	2.1	0.7	7.7	珪 質 頁 岩
7	8-2中	D区	石斧状 磨製石器	12.5	4.5	3.4	280.5	粘 板 岩

C、石材類（第7図1～II、第8、9、10、II図、第3、4-1、2表、写真8-3,9,10）

石材は第7図12、13を除いて、全部で58点出土している。この中には出土地のほっきりしない個体もあるが、これは粗掘時の出土資料である。石材は第9図9のコア、第11図1、3を除いて全て硬質頁岩類のフレーク類である。第10図6、第11図1はホルンフェルスの板状素材である。第11図3は風化剝離したと思われる扁平な礫片である。

硬質頁岩類のフレークやコアの形状や大きさは、第12-1図に示すようにさまざまあるが、最小のものは長さ1.9cm、巾2.0cm、最大のものは長さ7.2cm内外、巾7.0cm内外をそれぞれ測る。その中には第8図13や第10図7、12のように一次剝離面の他に側面に、チッピング調整を思わせる小剝離面が見られる例もある。

フレークを主とした石材類に見られる各石質の占める割合は、第12-2図に示す通りである。

この図でも解る様に石材の大部分は、硬質頁岩、凝灰質硬質頁岩、珪質頁岩などの頁岩類で占められている。これらの頁岩類は主として、奥羽山脈方面の新生代第三紀中新統の堆積層中に多産するものである。また輝緑凝灰岩やホルンフェルス類は、主として北上山地の古生層に多く見られる岩種である。流紋岩類は頁岩類と同様、奥羽山脈起源のものと考えられる。

(第5表) 弥生時代遺物包含区域出土石材一覧表

図版番号	写真番号	出土区域	器種	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材質
7-1	9-4	C150	ワレク	3.6	2.8	0.65	6.5	硬質頁岩
2	9-4	DA06	ワレク	3.8	2.6	1.0	8.4	凝灰質硬質頁岩
3	9-4	C103	ワレク	3.0	3.8	0.8	8.0	凝灰質硬質頁岩
4	9-4	DA06	ワレク	3.7	3.3	0.7	8.4	硬質頁岩
5	8-3	DA03	ワレク	6.7	3.8	1.55	36.8	硬質頁岩
6	9-4	CJ03	ワレク	3.3	4.7	1.15	18.6	硬質頁岩
7	8-3	C103	ワレク	7.2	7.0	1.6	52.5	ホルンフェルス
8	8-3	C103	ワレク	5.0	3.8	1.5	54.9	硬質頁岩
9	8-3	C103	ワレク	6.1	4.9	1.9	57.5	硬質頁岩
10	9-4	CJ03	ワレク	2.3	3.0	0.9	4.6	輝緑凝灰岩
11	9-4	DA03	ワレク	1.9	2.0	0.3	1.2	輝緑凝灰岩
12	8-3	BA50	ワレク	4.6	3.7	1.1	19.3	珪質頁岩
13	8-3	BA50	ワレク	6.9	4.3	1.1	33.2	珪質頁岩
8-1	9-1	DC03	ワレク	3.1	4.3	0.7	10.8	硬質頁岩
2	9-1	C1~DC	ワレク	2.6	3.2	0.8	5.7	珪質頁岩
3	9-1	C1~DC	ワレク	3.3	4.2	1.2	17.4	凝灰質硬質頁岩
4	9-1	C1~DC	ワレク	4.0	3.2	0.9	8.3	凝灰質硬質頁岩
5	9-1	C1~DC	ワレク	5.2	3.6	0.8	10.4	硬質頁岩
6	9-1	C1~DC	ワレク	3.6	2.9	0.7	5.4	凝灰質硬質頁岩
7	9-1	C1~DC	フシク	3.8	2.5	0.4	4.0	硬質頁岩
8	9-1	C1~DC	ワレク	4.3	5.9	1.6	36.0	硬質頁岩
9	9-2	C1~DC	ワレク	6.0	5.8	2.4	71.5	硬質頁岩
10	9-2	C1~DC	ワレク	3.4	6.0	1.3	24.6	珪質頁岩
11	9-2	C1~DC	ワレク	2.9	2.4	1.1	7.6	珪質頁岩
12	9-2	C1~DC	ワレク	5.1	3.5	0.8	10.1	硬質頁岩
13	9-2	C1~DC	ワレク	3.2	3.1	0.9	9.6	硬質頁岩
14	9-2	C1~DC	ワレク	4.9	3.8	0.75	24.0	硬質頁岩
9-1	9-3	DA03	ワレク	3.7	5.2	1.4	34.1	硬質頁岩
2	9-3	DB06	ワレク	3.1	4.5	1.1	12.4	硬質頁岩
3	9-3	DA03	ワレク	4.6	4.4	0.9	11.2	凝灰質硬質頁岩
4	9-3	DB06	ワレク	3.3	4.0	0.8	10.75	硬質頁岩
5	9-3	DA50	ワレク	4.6	4.4	1.0	19.7	硬質頁岩
6	9-3	DA06	ワレク	3.4	5.1	0.6	10.8	珪質頁岩
7	9-3	DB06	ワレク	3.3	3.8	0.5	7.6	ホルンフェルス

図版番号	写真番号	出土区域	器 種	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	材 質
9-8	10-1	DA03	フレーク	4.8	4.3	1.5	24.7	凝灰質硬質頁岩
9	10-1	DA06~50	フレーク	5.4	4.9	1.1	21.3	硬質頁岩
10	10-1	DA50	フレーク	4.2	3.3	0.7	9.0	硬質頁岩
11	10-1	DB06	フレーク	3.9	2.4	0.6	4.7	凝灰質硬質頁岩
12	10-1	DB06	フレーク	6.6	6.1	2.0	69.6	硬質頁岩
13	10-1	DA50	フレーク	6.2	7.4	1.5	55.0	珪質頁岩
10-1	10-2	不明	フレーク	4.0	2.8	1.0	7.8	凝灰質硬質頁岩
2	10-2	不明	フレーク	4.2	3.3	0.9	7.2	珪質頁岩
3	10-2	不明	フレーク	4.25	3.2	0.6	7.9	硬質頁岩
4	10-2	不明	フレーク	4.0	3.5	1.0	12.9	凝灰質硬質頁岩
5	10-2	不明	フレーク	4.1	2.4	0.9	7.2	硬質頁岩
6	10-3	CC03	フレーク?	5.1	6.4	0.7	33.1	ホルンフェルス
7	10-3	不明	フレーク	3.9	3.4	0.6	9.6	凝灰質硬質頁岩
8	10-2	DB06	フレーク	3.0	3.2	0.8	6.9	凝灰質硬質頁岩
9	10-2	不明	フレーク	3.1	2.8	0.8	6.8	硬質頁岩
10	10-3	不明	フレーク	4.55	1.1	0.6	2.85	硬質頁岩
11	10-2	不明	フレーク	2.95	2.2	0.9	5.1	凝灰質硬質頁岩
12	10-3	不明	フレーク	1.0	3.25	0.9	6.3	硬質頁岩
13	10-3	不明	フレーク	2.3	4.0	0.75	6.45	凝灰質硬質頁岩
14	10-3	不明	フレーク	2.8	4.5	0.6	6.0	珪質頁岩
15	10-3	不明	フレーク	5.0	3.8	0.5	7.3	流紋岩
16	10-3	C1~DC	フレーク	4.2	4.9	0.9	15.6	硬質頁岩
17	10-3	C1~DC	フレーク	5.3	5.2	1.0	9.9	凝灰質硬質頁岩
11-1	-	C150	フレーク?	6.1	3.2	0.8	15.5	ホルンフェルス
2	-	C1~DC	フレーク	8.5	4.85	1.5	44.5	ホルンフェルス
3	-	C103	礎石	8.8	7.3	0.85	27.1	硬質安山岩

〈平安時代の住居跡〉

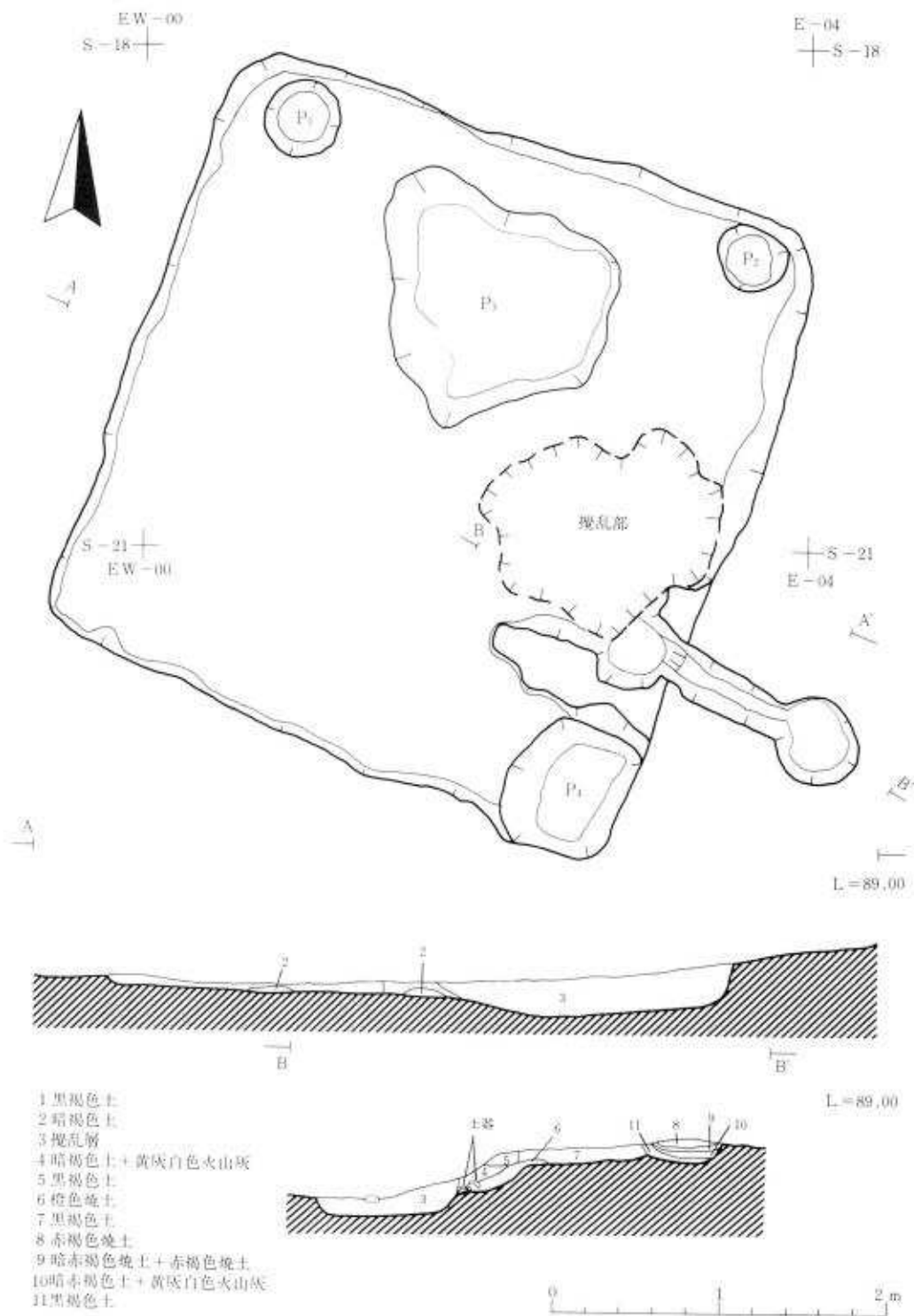
平安時代住居跡1棟が調査区北側のB G50グリッド付近で発見されている。B G50住居跡と呼称しているこの住居跡は、一部がリンゴの木の植付けの際に破壊されているものの、全体の形状は比較的良く保存されていた。以下にその説明を加える。

・B G50住居跡 (第12、13、14図、第5表、写真2、3、4、5、6-1~4)

〔遺構検出面〕 遺構は地下0.3~0.4m内外の黒褐色土層と暗褐色土層の境界部付近で検出された。前者は先の土層の説明の項で述べた2a層に相当し、後者は2a層に相当する。この付近では2c層の発達は貧弱で、すぐ砂礫層に移行している。

〔形状、規模〕 この住居跡は東西約3.8m、南北3.9mの隅丸方形の竪穴式住居跡である。その床面は検出面より最大0.2m、最小で0.05mをそれぞれ測り、その南北辺は北の正方位に対して約

大明神遺跡



(第12图) B G 50住居跡平断面实测图

22°30′ 東に振れている。竪穴の床面は第1図の4層に相当する砂礫層の上面が利用されている。

上屋の住居跡の上部構造を支える支柱は4本と考えられるが、それに対応する柱穴は竪穴の北西隅にP₁、北東隅にP₂が検出されている。いずれも深さ0.05cm内外の浅いピットである。他の部分ではその存在を確認できなかった。ただ竪穴の南西隅で柱穴の痕跡と思われる、床面のへこみが認められた。また、竪穴の南東部分ではP₄との重複があると思われるが、その所在は確認できなかった。

その他、壁際をめぐる溝とか、入口施設の有無についても調べたが、その存在は確認できなかった。

〔埋土状況〕 検出後の遺構の埋土は一部の攪乱層を除いて、ほとんど壤土質の黒褐色土の単層よりなる。この黒褐色土層は基本層序の項で述べた2a層とほぼ同質の成分からなっている。そのため2a層中に於ける遺構の切り込み状況の把握は、肉眼ではほとんどできない。

〔付属遺構〕 柱穴以外に住居跡に伴って発見された遺構としては、かまど、貯蔵穴状ピット、性格不明のピット各1がある。

A、かまど

〔位置、方向〕 かまどは、住居跡の東壁の南寄りの部分に設けられた東向き（正確には東南東向き）のかまどである。

〔形状、規模〕 このかまどには、長さ1.3mの煙道の煙出し部が伴っている。かまど本体は北半部がリングの植穴によって破壊されているが、残存部で巾約1.0m、長さ約1.1m、高さ0.07～0.2mを測る。その外に延びる煙道部は検出面上で巾0.2～0.3m、残存深0.1mを測る。その先端部には、直径0.5m内外の平面円形の煙出し部がついている。その存在深は最大0.15m内外を測り、底部は皿状を呈している。

〔構築法〕 かまどの構築法を見ると、かまどの火床部は砂礫層の上に乗る暗褐色～褐色のシルト質埴土層が一部削られて、利用されている。壁部は、上記土層の上に礫や黄白色火山灰および前記の褐色土を混えた、暗褐色～黒褐色の埴土を主体にして築かれている。さらに火床部の中央には環や小型の甕（第14図3）が倒立した状態で重ねられ、支脚として利用されている。

その他、火床部から煙道部につながる部分には、長径10～30cm、厚さ10～15cm大の礫からなる石組みの痕跡が見られる。この様な礫は、かまどの他の部分にも用いられたらしく、長径10～20cm、厚さ10～15cm大の各種の礫が、かまどの南裾や破壊された北裾周辺に、10個ほど散らばっている。

〔埋土〕 また、かまど火床部および煙道部、煙出し部の埋土についてみると前者では先に述べたシルト質の埴土層の上部が火を受けて、厚さ8cm内外の範囲で赤褐色～橙色に変色してい

る。そして、その一部を焼土の混った前記の壁部分の土が覆っている。

煙道部の埋土は少量の焼土を含んだ、ややしまりのある黒褐色土の単層よりなる。煙出し部の埋土は4層よりなり、最上層には赤褐色の焼土、次に焼土と暗褐色土の混合層、その下に暗褐色土と黄白色火山灰の混合層、そして最下層に壤土質の黒褐色の柔らかな層という順で、レンズ状に重なっている。

B、貯蔵穴状ピット

P₄と仮称するこのピットは、かまどの南端部分に位置し、竪穴の南東隅を占める。その規模は南北約0.45m、東西約0.3m、床面からの深さ約0.1mをそれぞれ測る。

ピット中の埋土は、竪穴床面を覆う埋土と同質の黒褐色土層である。ピットの底部にはこの埋土に覆われて、多数の土器片が埋もれていた。土器片の大部分は土師器の内黒環の破片であるが、その中には復元可能な個体も幾つか見られた。その他、このピットと、かまどの南側の境する部分からも、内黒の環2個体分の破片が出土している。

このピット内の遺物は、土器片以外特記すべきものは見られないが、位置的な関係からその性格としては、貯蔵穴状施設と考えられる。

C、性格不明のピット

P₅と仮称されるこのピットは、竪穴床面の北半部の中央に位置する平面不整五角形状の浅い皿状ピットである。このピットは南北約1.6m、東西約1.4m、床面からの深さ0.1m内外を測る。ピット内の埋土はP₄と同様、床面埋土と同じ黒褐色の地壌土の単層である。このピットには伴出遺物が見られず、その性格もよく解らない。

〔遺物出土状況〕 住居跡内の出土遺物は、全部で121点ある。そのうち遺構の各所の埋土中に含まれる18点の弥生時代の遺物を除いた103点の遺物は、全て平安時代の遺物である。平安時代の遺物は、大部分、かまど部付近かP₄から出土したものである。その他、平安時代の遺物は、床面や竪穴の埋土中からも出土しているが、その数は極くわずかである。

遺物の出土状況を見ると、床面や竪穴の埋土中の遺物は各所に点在した形で出土しているが、その他の遺物は集中的な出土状況を示している。

〔遺物〕 出土遺物の多くは平安時代の土器片であるが、その中でも土師器の内黒環の破片が圧倒的に多い。その中には、ほぼ完全に復元できる個体もいくつか含まれている。平安時代の土器としては、その他に、内外黒の土師器の環、鉢、小型甕、須恵器の壺甕などが見られる。しかし、これらの土器片はいずれも極く少数である。いずれ、この住居跡では主要部分が一部破壊された事にもよるが、内外環類が多く、土師器の甕類や須恵器が極端に少ない。この事は、この住居跡の遺物にみられる一つの特徴になっている。(第7-3表)

土器以外の遺物として、フレーク1点がP₅の埋土中から出土し、砥石1点が竪穴の南壁際に

ら出土している。

A、平安時代の土器類

坏類 (第13図1～8、11～15、第6表、写真5-1～8)

坏類は堅穴の各所から出土しているが、大部分がロクロ成形され、底部に糸切痕を有する土師器の内黒坏である。これらの坏のうち実測可能な個体を第14図1～8、11～15に図示したがこれらの坏は大部分、器高が低く、底径が口径の殆前後の大きさになるものである。坏の器壁は内湾気味にやや緩く外傾し、器の外面には横方向のロクロ調整痕が見られる。また器の内面には、底辺部から体部にかけて放射状ヘラミガキが施され、口辺部には、横方向の平行ヘラミガキが施されている。この図からも解るように、個々の坏のプロポーシオンは非常に良く似ている。1～8の全形復元可能な個体で見ただけの場合、特にはっきりする。おそらく、これらの坏は同一工房内で一定の規格に従って作られた製品であろう。

これらの坏のうちで5は、やや大型の内黒坏であるが、その外面には底部から体部にかけて回転ヘラケズリ調整が施されている。

また、この住居跡からは15の様に内外両面がヘラミガキされ、黒色処理された坏の破片が2～3個体分出土している。

大型鉢類 (第13図16、17、第6表)

大型の鉢類はロクロ成形された土師器で、第14図16、17に図示する様なものが見られる。いずれも口辺部から体部にかけての破片で、底部は欠けている。器壁の立ち上がりはやや急で、内湾気味に外傾し、口辺部の上端が外側に幾分外反している。16は、器の内外両面がヘラミガキされ、黒色処理されている。17は、器の内面のみヘラミガキされている。

小型鉢類 (第13図18、19、第6表、写真5-9～10)

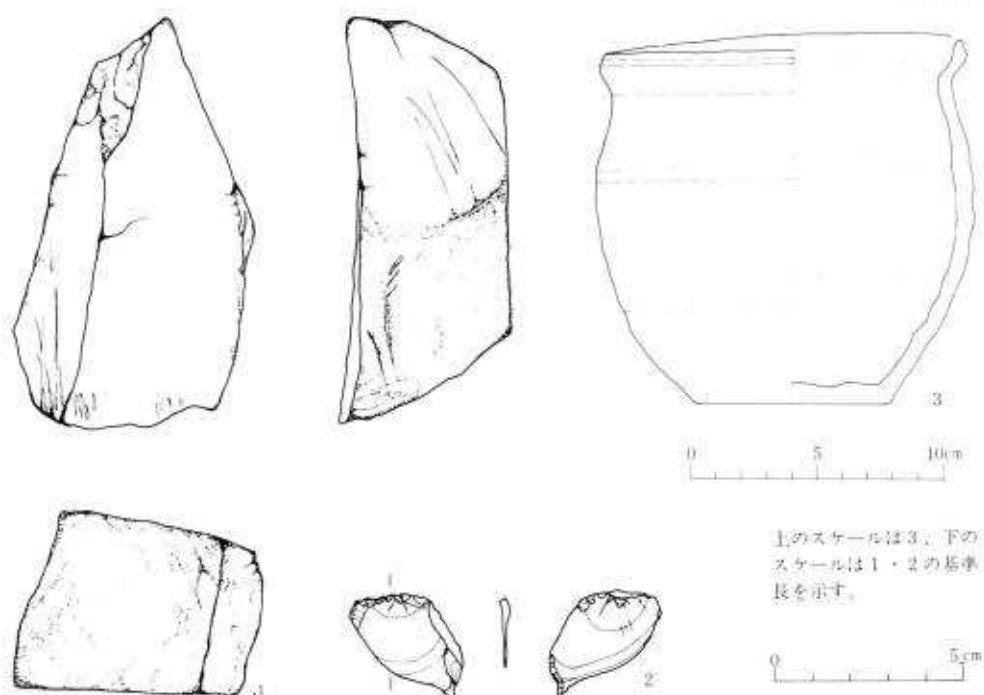
小型鉢類に分類される器形は、第14図18、19に図示した形状のものが知られる。いずれもロクロ成形されており、18では器面の摩滅が著しくて不明であるが、19では底部に回転糸切痕が見られる。全体のプロポーシオンを見ると、両者とも、坏などより器高が高く、口径がかなり小さくなっている。そのため、器壁の立ち上がりは幾分急になっている。そして、内湾する体部の上端には、内湾気味に大きく外反する口辺部が取りついている。なお、この住居跡からは19に非常に良く似た完形の小型鉢がもう1点出土しているが、調査時に紛失し、行方不明になっている。

小型甕類 (第13図10、第14図3、第6表、写真6-1～2)

小型の甕類は7点出土しているが、いずれもロクロ成形された土師器で、底部に回転糸切痕を残している。第13図10は、この種のカメの下半部を残す個体であるが、その上端部は平らにされ、縁が丸味を帯びるように削られている。おそらく、坏に転用したものであろう。



(第13圖) B-G 50住居跡出土遺物実測図(1)



(第14図) B・G 50住居跡出土遺物実測図(2)

(第6表) 大明神遺跡 B・G 50住居跡出土遺物一覧表

土器類

図版番号	写真番号	形状・大きさ	口	底	高さ	重量	材質	出土地層(地層)	形状	用途	備考
13-1	5-2	1. 胴一部	14.3	6.1	5.0		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	和子の瓶(胴部)		
2	5-2	*	14.7	5.5	4.5		灰・黄色砂質土・粘質	"	"		
3	5-2	*	14.9	4.8-5.5	4.8		灰・黄色砂質土・粘質	"	"	片持	
4	5-4	*	14.7	4.8-5.0	5.3		灰・黄色砂質土・粘質	"	"	"	
5	5-2	*	17.8	6.4	5.9		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	"	"	
6	5-7	*	14.1	5.8	5.1-5.5		灰・黄色砂質土・粘質	"	"	"	片持(成り切れた部分)
7	5-7	*	14.1	6.0	4.7		灰・黄色砂質土・粘質	"	片持(成り切れた部分)	"	
8	5-8	*	14.4	5.3	4.9		灰・黄色砂質土・粘質	"	和子の瓶(胴部)	"	
9	-	*	推定: 4.2	5	5		灰・黄色砂質土・粘質	"	"	"	
10	6-2	*	土器片(14.3)	5.3	4.4		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	和子の瓶(胴部)	"	片持(成り切れた部分)
11	-	*	推定: 13.6	-	-		灰・黄色砂質土・粘質	和	和子の瓶(胴部)	和	同上層(1)
12	-	*	推定: 13.4	5	5		灰・黄色砂質土・粘質	和	"	"	同上層(1)
13	-	*	15.0	-	5.0		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	"	"	同上層(1)
14	-	*	推定: 14.5	5	5		灰・黄色砂質土・粘質	和	"	"	
15	-	*	推定: 13.3	6.4	推定: 4.7		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	和子の瓶(胴部)	和	同上層(1)
16	-	*	口縁(14.3)	底(14.3)	5.3		灰・黄色砂質土・粘質	和	和子の瓶(胴部)	"	
17	-	*	推定: 18.0	-	-		灰・黄色砂質土・粘質	"	"	"	
18	5-3	*	5	5.0	5		灰・黄色砂質土・粘質	"	和子の瓶(胴部)	"	
19	5-10	*	口縁(14.3)	底(14.3)	5.3		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	"	"	
14-1	6-1	*	口縁(14.3)	底(14.3)	5.3		灰・黄色砂質土・粘質	同層(1)	和子の瓶(胴部)	"	

注: 口縁・底縁・高さの単位はcm

石器・石材類

図版番号	写真番号	器物(素材)名	長さ	巾	厚さ	重量	材質	
14-1	6-4	砥	石	10.6*	4.7*	4.3*	326g	細粒石質凝灰岩
2	6-3	アモイ	石	3.5	2.2	0.2	2.3	燧石(頁岩)

第14図3は、かまどの火床部に支脚として転用されていた、ほぼ完形の個体である。この甕は、最大径を器高の $\frac{1}{2}$ ほどのところに最大径を有する胴張りの形状を示し、胴の上端部には、くの字状に内湾する口辺部が軽く外反した形で取りついている。器の内外両面には、ロクロ成形時の横ズレ圧痕がやや粗い凹凸となって残っている。

小型壺類 (第13図9、第6表)

P₃からは第14図9に示したような小型の壺の破片が出土している。この壺は内外両面がヘラミガキされ、黒色処理された広口の肩張りの壺である。ヘラミガキは、胴部下半では縦方向のヘラミガキが見られ、肩部から口辺部にかけては横方向のヘラミガキが見られる。

B、平安時代の石器

砥石 (第14図1、第6表、写真6-4)

この砥石は住居跡の南辺中央部から出土したものであるが、出土状況からみて、この住居跡に共伴する遺物と考えられる。この砥石は凝灰岩製で、一部四角柱状の形を呈している。砥石の研磨面は5面あって、使い減りのため、その中央部が周囲より若干凹み、各所に擦り傷が残っている。

C、縄文時代、弥生時代の遺物

土器類 埋土中に混入して出土した平安時代以外の土器片は17点であるが、大部分、弥生時代の粗製土器の細片である。

石材 (第14図2、第6表、写真6-3)

石材としては、P₃から平安時代の坏類に混ってフレーク1点が出土している。このフレークは黒色の頁岩製であるが、おそらく上記の縄文時代、ないしは弥生時代の土器類に共伴するものであろう。

〈グリッド〉 (第4図30、第2-1表、第5図5・19・20、第2-2表、写真7-2、
第7図12・13、第10図6、第5表、写真8-3、10-3)

〔遺物〕 その他、遺構は検出されなかったが、前述した包含層、住居跡を除いたB-G区のいくつかのグリッド内からは遺物が散発的に出土している。出土した遺物は土器片やフレークであるが、BG50住居跡に隣接するBH50、BH03両グリッドの平安時代の土器片を除いて、大部分、弥生時代の土器片である。しかし、中には第5図19、20の様に縄文時代の土器と思われる破片も見られる。この土器片はB区の粗掘り時に出土したが、遺物採集後の不手際から、出土地不明になっているものである。土器片の外表面には網目状捺糸文が施されており、胎土中には砂が多く混入している。粗製深鉢型土器の胴部破片と思われる個体で、時期的には縄文前期～中期に含められるものと推定される⁽¹⁾。ただし、発掘された資料が少なく、共伴関係の確実な遺物が他にないため、その所属時期については今のところ特定できない。

4. まとめ

今回の大明神遺跡の調査で知られた事実は、以上に述べてきた通りであるが、次にそれらの事実をもとに簡単に成果のまとめを行なってみたい。

〔1〕遺跡の時期と性格

今回の調査で発見された遺構や遺物から見ると、この遺跡は、縄文時代、弥生時代、平安時代の3時期に渡る複合遺跡である。

各時期に於ける遺跡の性格としては、いずれの時期とも集落跡である可能性が高い。ただ、この事は発掘範囲が遺跡全体の西辺部に限られていたため、十分な確認ができなかった。

〔2〕弥生時代の遺物集中包含区域について

(1) 性格

今回の調査で発見された弥生時代の遺物集中包含区域は、生活廃棄物の処理施設の跡と思われる。この事から、この包含区域の周辺にこれと関連した弥生時代の遺構の存在する可能性が予想される。

(2) 土器類の所属時期

弥生時代の遺物集中包含区域から出土した土器片は、精粗2種類に大別される土器類の破片であるが、器形としては浅鉢、壺、台付土器、深鉢、広口の甕などの各器形が知られる。これらの土器の口辺は、平縁ないしは波状を呈している場合が多い。特に精製土器では、波状口縁の形態にいくつかの変化が見られる。

土器の外面に施された文様を見ると、器面は無文の場合もあるが、多くの場合、沈線文、縄文、あるいはそれらの組み合わせからなる何種類かの複合文様が施されている。沈線文には平行線文、変形工字文、凡形文、山形入組み文などの種類が見られる。多くの場合、沈線は無文の地の上に施されるが、縄文が地文として施される場合もある。また、沈線区画に伴って文様帯の一部に縄文の施される例も多く見られる。縄文はほとんど単節の斜縄文である。器面に施される文様は、一般に粗製土器より精製土器の方が複雑で、縄文も細い傾向が認められる。

以上の諸特徴を有する大明神遺跡の土器群は全般的にみて、縄文時代晩期末の大洞A¹式土器の器形、文様の伝統を強く受け継いでいるように感じられる。同様の特徴を有する土器群は、一関市谷起島、草ヶ沢、江刺市沼の上、北上市野田、矢巾町清水野などの北上川流域の各地の遺跡で発見されている。

これらの土器類は様式的には谷起島式土器として扱われている。この谷起島式土器は宮城県

の大泉式土器¹⁰³、山王田層式土器¹⁰⁴、あるいは福浦島下層式土器¹⁰⁵などと呼ばれている土器類に併行しないしは、若干前後すると予想されている¹⁰⁶。その時期としては弥生時代中期前半代が想定されている。以上の事がからから類推すると、大明神遺跡の弥生時代の土器類もほぼ同時期に位置付けられる可能性が大である。

〔3〕平安時代の住居跡の時期

今回発見された平安時代の住居跡 B G 50 住居跡の年代は伴出した土師器の内黒坏が①全てロクロ成形され、回転糸切りされている事、②底部やその周辺部にヘラケズリ調整されたものが極端に少ない事、③しかし、酸化炎焼成された非内黒の坏が全く共伴していない事、④共伴する小型の甕はロクロ成形されており、底部には回転糸切り痕が見られる事などから、ヘラ切り須恵器の坏や底部および周辺部にヘラケズリのある土師器内黒坏の盛行する時期より後で、しかも、酸化炎焼成された非内黒の坏の盛行する時期より以前の時期内に入るものと予想される。

ところで、現在のところ、北上川流域で底部にヘラ切り痕の残る須恵器が多用される時期は9世紀代後半以前と推定されている。また、底部に糸切り痕の見られる小型甕類は9世紀以降の所産と考えられている。さらに底部やその周辺にヘラケズリ調整を伴う内黒坏が流行する時期はおおよそ、9世紀後半～10世紀前半代が考えられている。また酸化炎焼成された非内黒の坏類の数量が圧倒的に増大する時期は11世紀以降と予想されている¹⁰⁷。以上の事柄から総合的に考えて B G 50 住居跡出土の坏類の所産時期は内黒土師の底部および周辺部のヘラケズリ調整があまりやらなくなっていく時期、つまり10世紀前半～10世紀末頃に想定されるであろう。

ただこの場合、気になる事としては、ヘラケズリの内黒坏が比較的多く見られる江刺市落合 I 遺跡などでは、内黒坏と非内黒のロクロ成形された坏がほとんどの場合、共伴するのに対し、この住居跡ではそれが全く見られない事である。この事実は一体、何を意味するものであろうか。この住居跡だけの特殊事情によるものが、地域的特色なのか、大いに興味を持たれるところである。

また、もう一つ興味ある問題として、大明神遺跡の約1kmほど北方に位置する大曲遺跡の D E 65 住居跡との時期的な関連づけの問題があげられる。

この住居跡からは、B G 50 住居跡と技法的にはほぼ近接した時期に位置付けられる土師器の内黒坏が出土している。しかも、共伴した非内黒の土師器の坏や甕類の中に古い技法によって作られたものが多く見られる。しかし、その反面、底部とその周辺部にヘラケズリ調整のある内黒坏が全く見られない事。また、B G 50 住居跡には、見られない底部糸切りのロクロ成形された非内黒坏が、ここでは伴出している事などで示されるような新しい様相も見られる。以上の事実は一体何を意味するものであろうか。非常に興味深い事である。

このように新旧両技法の接点に位置しているように見える大曲遺跡の D E 65 住居跡と大明神

遺跡のB G 50住居跡の時期差を土器類の単純な比較から求めることは、現段階ではかなり難しい。したがってここでは、この問題についての答を保留し、今後の類似資料の増加を待って検討を加えてゆく事にしたい。なお、最後になってしまったが、今回の調査に協力くださった各位に対し、心からお礼申し上げ、報告を終わる事にしたい。

注 記

- (1) 岩手県教育委員会 1973 「岩手県埋蔵文化財地図」
- (2) 岩手県教育委員会 1975 「昭和49年度 東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報」
- (3) 図と同じ文献による
- (4) 一関市史編纂委員会 1978 「一関市史」 第一巻通史 一関市
林謙作、小野田哲恵 1977 「谷根島遺跡第一次発掘調査報告書」 一関市教育委員会
- (5) 鈴木優子氏の教示による。なお縄文時代の綱代畠に関する最近の研究成果を知る上で下記の文献が比較的参考になろう。
荒木ヨシ 1968 縄文式時代の綱代編み「物質文化」第12号
* 1970 東日本縄文時代後、晩期の綱代編みについて「物質文化」第15号
* 1971 縄文時代の綱代編み「物質文化」第17号
鈴木優子 1974 第6章竪 底部「崎山弁天遺跡」大槻町教育委員会
- (6) 石質の肉眼鑑定および産地の推定は、佐藤二郎氏の教示による。
- (7) 相原康二氏の教示による。
- (8) 1978年に一関市教育委員会により、調査されている。報告書未刊。
- (9) 伊藤鉄夫 1973 「江刺市沼ノ上遺跡調査報告書」 江刺市教育委員会
山口了紀 1978 「江刺市沼の上遺跡」 岩手県埋蔵文化財センター
- (10) 北上市 1968 「北上市史」第一巻 原始、古代Ⅱ 北上市史刊行会
- (11) 岩手県 1961 「岩手県史」第一巻 上古、上代
- (12) 水沢市史編纂委員会 1974 「水沢市史」 原始、古代 水沢市史刊行会
志間泰治 1971 「鱸沼遺跡」 東北電力株式会社宮城支店
- (13) 山王遺跡田層出土の土器内容については、相原康二氏から資料提供を受けた。
- (14) 江坂神彦 1975 縄文文化の終末とそれ以降の文化 「北奥の古代文化」 学生社
- (15) 弥生式土器の編年については主として、下記の文献などを参考にした。
草間俊一 1978 岩手県の弥生文化 「北奥古代文化」第10号 北奥古代文化研究会
中村五郎 1976 東北地方南部の弥生式土器編年 「東北考古学の諸問題」東北考古学会
伊東信雄 1960 東北北部の弥生式土器 「文化」第24巻1号
水沢市史編纂委員会 1974 「水沢市史」 原始-古代 水沢市史刊行会
- (16) 沼山源喜彦 1978 「東北北部の歴史時代の土器」 東日本に於ける歴史時代土器シンポジウム発表資料
高橋信雄 1977 岩手県のロクロ使用土器器について 「考古風土記」2号

おお 曲 遺 跡

遺 跡 記 号 : OM

所 在 地 : 石鳥谷町戸塚第 9 地割 51-8 他

調 査 期 間 : 昭和 49 年 10 月 25 日 ~ 12 月 12 日

調 査 対 象 面 積 : 1920 m²

平 面 測 量 基 準 点 : 東 京 基 点 466.830km (DA50)

基 準 高 : 海 拔 92.50 m

1. 遺跡の位置と立地（第ⅧP190、第Ⅸ図P191）

本遺跡は石鳥谷町戸塚に所在し、石鳥谷町役場より南東約 3.5kmの地点に位置する。

遺跡の所在する石鳥谷町は、東部の北上山系と西部の奥羽山系とにはさまれた北上盆地上の街道集落で、岩手県のほぼ中央部にあたる。

東北新幹線は石鳥谷町の東部を南北に縦断し、西方は北上川と東方は北上山系丘陵地帯とに近接している。路線敷にかかわる地形区分は、北上川の河岸低地、微高地状の沖積段丘、および丘陵地帯にとりつく河岸段丘等からなっている。

石鳥谷町の東部は北上山地の西縁丘陵地帯にあたり、古生層・花崗岩類・蛇紋岩・安山岩・鮮新世の砂岩・頁岩等を基盤とする山地・丘陵が入り組んで発達している。河岸低地と接続する丘陵地帯の比高は、標高で150～200mとなり起伏量が100mに満たないものが多い。佐比内丘陵・鷹巣内丘陵・高松丘陵などがそれぞれである。

北上山系に源流をもち、山地・丘陵を開析して北上川に流入する河川として稗貫川・添市川・猿ヶ石川などがある。これらの河川は、流域沿いおよび丘陵の出口に小規模な河岸段丘を形成している。また、河川沿いには沖積台地も発達しており、河川勾配は比較的緩い。

稗貫川は大迫町の内川目岳付近に源をもち、鷹巣内丘陵を二分するかたちで開析し、北上川に合流している。本遺跡は、この稗貫川が鷹巣内丘陵の出口に形成した低位の河岸段丘上に立地する。

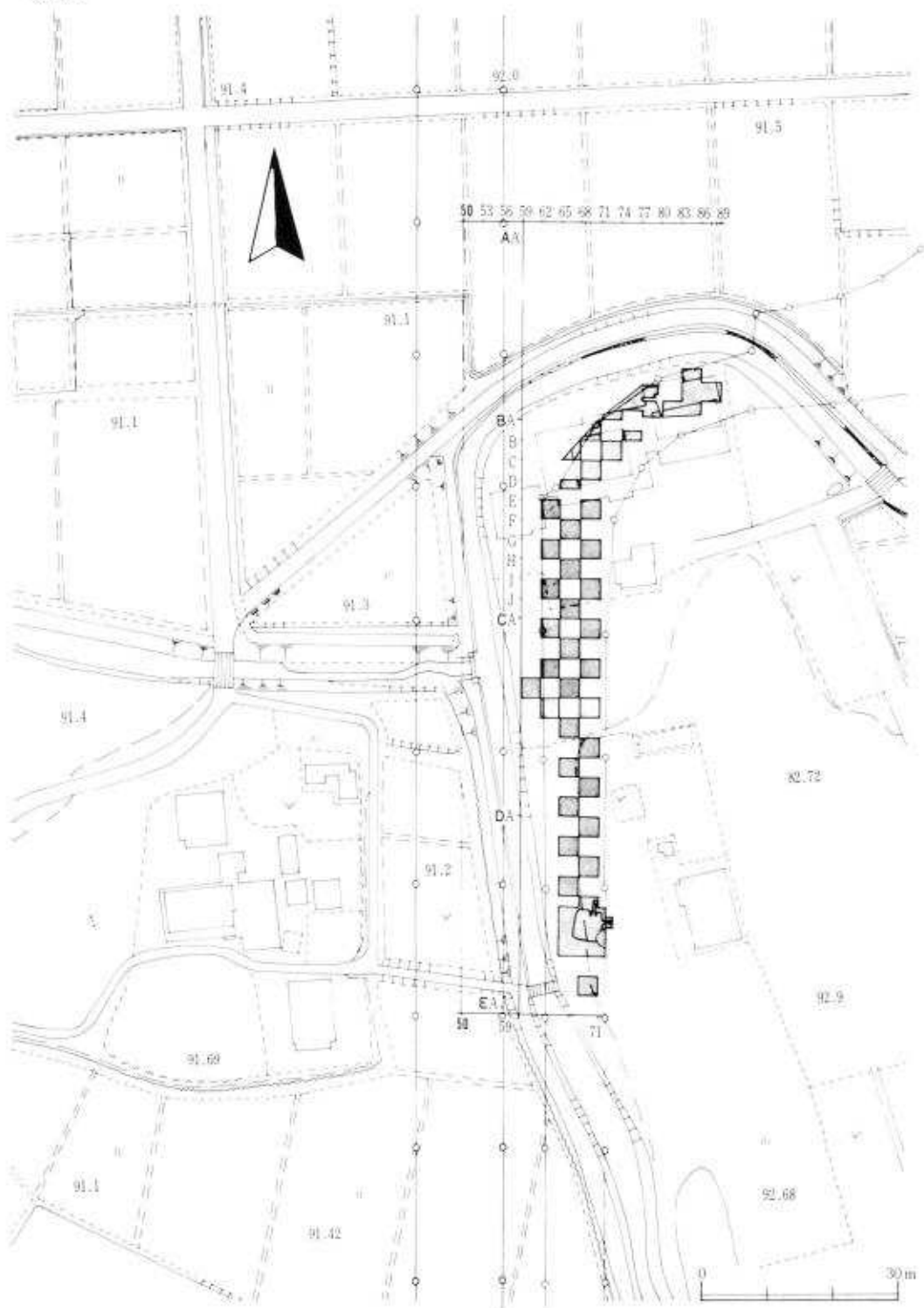
なお、本書所収の幅遺跡、大明神遺跡はともに本遺跡と同じ段丘上に立地している。

2. 調査の経過（第1図）

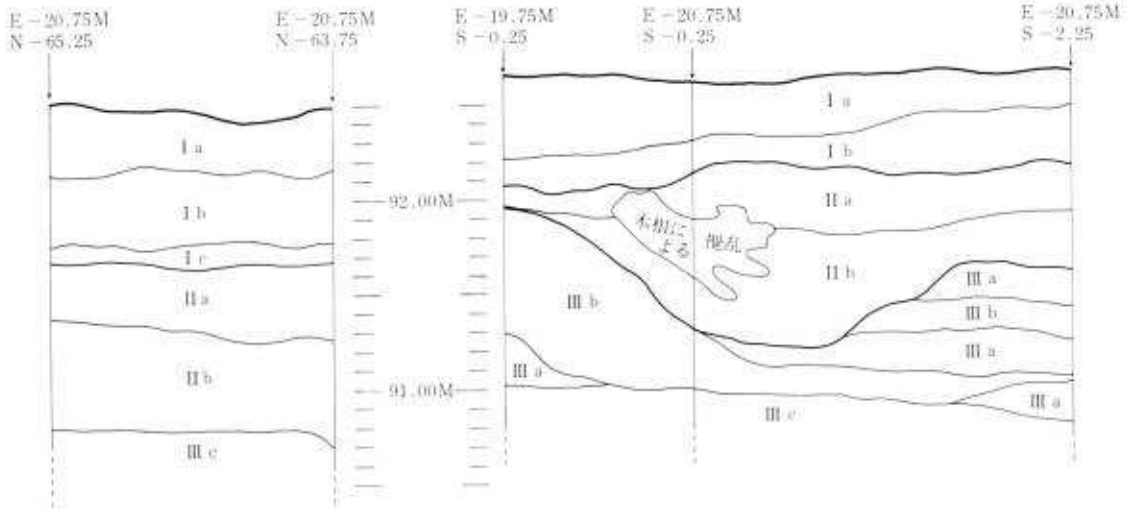
新幹線の路線敷は、遺跡の乗る段丘上を直接は通らず、近接する低位の水田面を通る。ところが、新幹線付設に伴う水路の改修工事が遺跡の範囲内に及ぶこととなり、急きょ調査対象に加えられたものである。水路は、遺跡の乗る段丘の西縁および北縁を約10mの幅で取りつけられることとなり、その全域約 1,920mを調査対象とした。

調査はまず、路線敷の2本の中心杭(456.720km、466.760km)を基準にして、調査区全体に一辺3mのグリッドを設定し、そのうち約 486mを発掘した。

発掘の結果は、調査幅が10m弱と狭いこともあって住居跡1棟の検出にとどまった。そのほか遺構外遺物として、縄文土器が少量発見されている。調査地は畑地と宅地になっているが、



(第1図) グリッド配置図



(第2図) A168西壁、D A68南壁・西壁セクション図

宅地の部分は、コンクリート、及び石等の土台がそのまま残されていたため、調査に非常な障害となった。しかし、地形等から遺構の存在が予想されていたため、最低限度グリッドを市松状に掘るという当初の計画を押し、ほぼ全域を調査した。

3. 調査の結果

(1) 基本層序(第2図)

遺跡の乗る段丘面の基本層序を明らかにするために、調査区域内の2地点で深さ約2mの深掘りを実施し、断面観察を行なった。その結果は第2図に示すとおりであるが、深掘り不能の深層の様相は北星コンサルタント株式会社の試錐調査の結果を参考にした。

I a層：黒褐色(10Y R 3/2)土。シルト質粘土。くろはくで構成され、層厚20~40cmで調査区域北部で厚く、南部でやや薄い。畑地・宅地として利用されており、上部はかなり擾乱を受けている。層中には土器片(土師器片が多い)・炭化物・焼土を包含する。

I b層：黒褐色(7.5Y R 3/2)土。シルト質粘土。I a層同様くろはくであり、層厚15~50cmで北部に厚く、南部に薄い。土の構造は非常に密であり、層中には土器片(縄文土器)、炭化物等を含む。D E65住はこの層の上面より掘り込まれている。

I c層：暗褐色(7.5Y R 3/4)土。シルト質粘土。この層以下は無遺物層である。層厚10cm±で北部にのみ確認できる。II a層の黄褐色土が少量粒状混入する。

II a層：黄褐色(10Y R 5/2)土。粘土質シルト。層厚は0~40cmで、遺跡の北部で厚く、南

部では消滅する。密度は比較的疎で、2～3cmの礫を少量含む。

II b層：黄褐色（10Y R 5/4）土。粘土質シルト。層厚は数cm～60cmで、II a層同様遺跡の北部で厚く、段丘崖にあたる西部、及び南部では消滅する。II a層に比べて密であり、粘性も若干強い。

III a層：砂層。褐色（10Y R 4/4）。比較的淘汰の良い小粒の砂。一部シルトを混える。

III b層：砂礫層。褐色（10Y R 4/4）。長径2～4cmの礫が多く、淘汰の悪い砂が充填する。礫種は、安山岩・チャート・輝緑凝灰岩等である。この層は、遺跡の南西部に部分的に認められ、DE65住の床面に一部露出している。

III c層：砂礫層。褐色（10Y R 4/4）。長径3～5cmの円礫のなかに10cm内外の大礫を多く含む。礫種は、安山岩・チャート・輝緑凝灰岩等である。充填する砂はIII b層に比べて粗く、密度もゆるい。層厚は不明である。

以上、深掘り調査をもとにした堆積層の構成は、黒褐色シルト質粘土層（I層）、黄褐色粘土質シルト層（II層）、褐色砂礫層（III層）に大別される。（K・K）北星コンサルタントの試錐結果によれば、III層の層厚は、遺跡の北部で100cm±、南部で300cm±となっている。

遺物の出土層はI a層とI b層に限られ、I a層からは主に平安時代の遺物、I b層からは縄文時代の遺物が出土している。

また、粗掘りは第一段階としてI b層のはば中間まで、第二段階としてI c層の中間まで掘り下げて行なった。

（2）発見遺構とその出土遺物

DE65住居跡（第3～5図）

〔遺構確認面〕 表土にあたる黒褐色土層（I a層）を掘り下げ、さらに縄文土器の出土層であるI b層を若干掘り下げたところ、焼土・土師器が出土し、遺構の存在を確認した。なお、畦畔断面より、遺構の掘込面はI b層上面であることが認められた。

〔保存状況〕 南東部のコーナー付近の一部を後世の井戸跡によって破壊されているほかは、保存状況は良好といえる。

〔平面形・長軸方向〕 南北にやや長い長方形となり、長軸方向はN-6°30'-Eである。

〔規模〕 大きさは、長（南北）軸4 m60cm・短（東西）軸4 m25cmで、床面積は約18.29m²である。

〔堆積土〕 遺構内の堆積土は基本的に以下の3層に大別される。

第1層（黒褐色土層）：黒褐色の粘土質シルト層で、I a層と極めて近似している。最も厚く堆積しており、分布も広く、住居の全域に及んでいる。焼土・土器片を少量含む。



(第3図) DE 65住居跡 (I)

第2層（暗赤褐色土層）：焼土や木炭を多量に含むため色調は一定しないが、全体として暗赤褐色シルト層として包括される。焼土は大小の粒状混入で層全体にみられ、所々に大きなブロック状のかたまりとして含まれる。木炭は小破片に限らず、柱状のものも多く見られ、床面に横倒しの状態で数本検出されている。土器はこの層の下部より出土するものが多い。

第3層（暗褐色土層）：暗褐色の粘土質シルト層で少量の炭化物・焼土のほか、地山の黄褐色土を斑状に含む。土器の出土は見られない。

以上3層に大別された層相互の関係をみると、1・2・3の各層は以下のような関係に位置づけることができる。第1層は住居廃絶後の自然堆積層と見られ、このことは、住居掘込面上層の土とほぼ同質であることからもうなずける。第2層は住居が火災によって焼失した際、屋根が焼け落ちたために形成されたものと推定される。層中に焼土や木炭（炭化材を含む）、そして土器を多量に包含すること、さらに、ほぼ一定の厚さで住居全体に水平に堆積していることを併せ考えれば、火災による事故的堆積層と判断される。第3層は床面の上に直接乗り、礫が露出している個所に比較的薄く、その他の個所に厚く堆積しており、結果的に層の上面はほぼ水平になる。また、層中には少量の焼土・炭化物が混入する以外、土器等の遺物は含まない。このことから、床面構築にかかわる掘り方埋土とも考えられるが、土は粉～小粒状堆積で、すべてのピットがこの層の下部より掘り込まれている。したがって、貼り床を意識したものとは考えられず、住居を使用する過程で自然に堆積した生活層と推定される。

【壁】 壁は床面より緩く立ちあがる。住居の検出面は掘り込み面より4～5cm下っているが、現存している壁の高さは、東壁で24cm、西壁が15cm、南壁13cm、北壁32cmとなる。

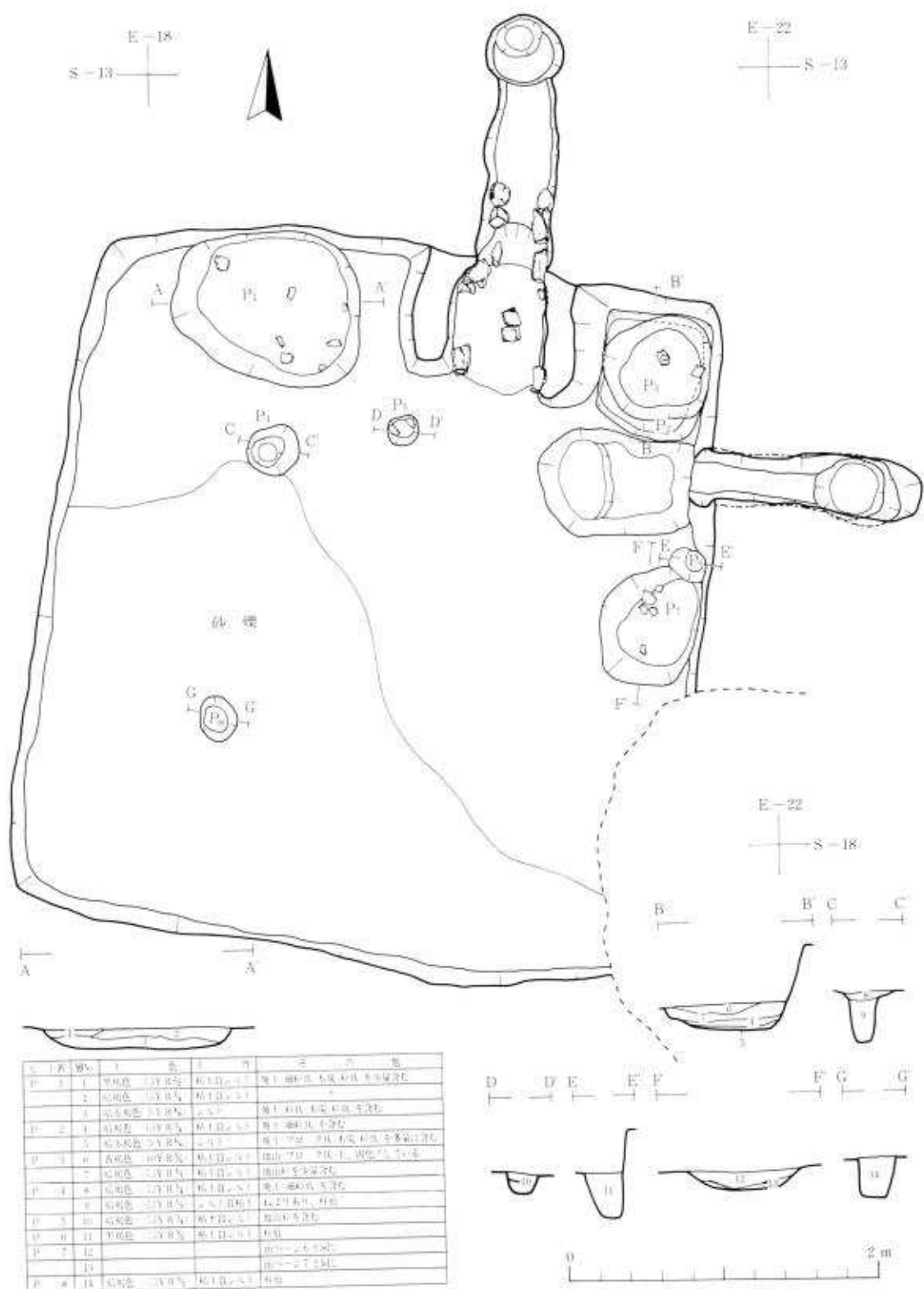
【床面】 床面の南西部には約5%の割合で礫層が露出しており、その部分は凹凸して若干高くなっている。北壁のやや東寄りと東壁の北寄りの部分にカマドを持ち、それぞれのカマドの焚口部分にあたる床面の中央やや北東付近は非常に固い面をなしている。

掘り方の有無の確認のため床面を部分的に掘り下げたがその形跡は認められなかった。

【柱穴】 住居跡の内部より発見されたピットは合計8個である。これらのピットのなかで大型の貯蔵穴状のもの（P₁・P₂・P₃・P₄）は除かれる。残る4個のピットのうち、P₅は深さが13cmしかなく、柱穴とはならず、深さ・配列の規則性などからも、P₁・P₆・P₈が柱穴と考えられる。竪穴内には4本の柱が立っていたと思われるが、残りの1本は井戸による擾乱を受けている場所に求められるものである。

【カマド】 北壁中央やや東寄りの位置、及び東壁北寄りの位置の2個所に設置されており、前者が新しい。以下、北壁のものをⅡ期、東壁のものをⅠ期として説明を加える。

Ⅰ期のは煙道部・煙出部は残存するが、カマド部は取り壊されており、燃焼部の一部を残すのみである。燃焼部は95×98cmの範囲で浅く掘り込まれており、焚口部分と思われる個



層	土	色	質	備
P-1	1	黄褐色	砂质土	灰土層(IV)及砂土層(V)之底
P-1	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-1	3	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-2	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-2	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-3	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-3	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-4	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-4	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-5	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-5	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-7	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-7	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底
P-8	1	灰褐色	砂质土	灰土層(V)
P-8	2	灰褐色	砂质土	灰土層(V)及砂土層(V)之底

(第4图) D E 65住居跡 (II)

所はさらに一段落ち込んでいる。焼土は燃焼部全域に分布しているが、焚口部分を除いてあまり良く焼けていない。支脚と思われるものは残っていない。

煙道は燃焼部底面から6cm程度上の奥壁を掘りこんで、ほぼ水平に煙出しへと接続する。煙道の深さは検出面より35cm強となり比較的深い。煙出しは煙道端より7cm程掘りこんで作られており、底径で約30cmの円形を示す。煙道及び煙出しは全体的に火熱を受けた痕跡が観察される。遺物は埋土に限られる。長さは煙道部・煙出部を合わせて146cmとなる。

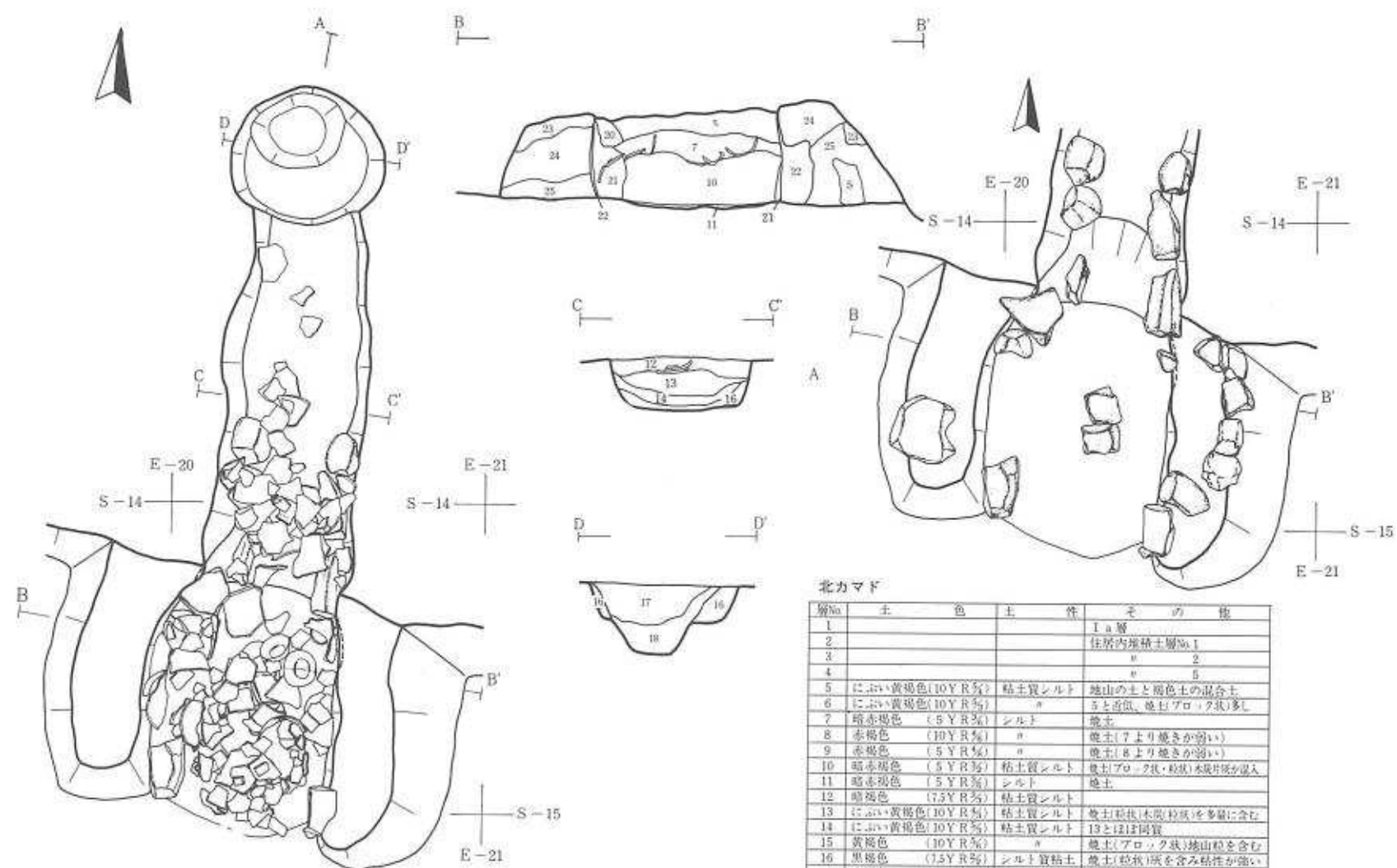
II期のカマドの燃焼部は80×57cmの範囲での浅い皿状の落ち込みとなっている。左袖の側壁は若干崩れており、実際の幅はやや狭まる。燃焼部中央には支脚に使用したと思われる石が2個立っており、露出部の高さはそれぞれ11cm、16cmとなっている。石の回りに掘り方は検出されていない。焼土は燃焼部に広く分布し、焚口と支脚の間が良く焼けている。

袖は左右袖の中央と側壁の部分に角礫（安山岩）を素材にして骨組し、地山の黄褐色粘土質シルトおよび地山と黒褐色土の混合土を交互に積み重ねたかたちで作られている。また、側壁の部分には土師器片を芯材として使用している。天井部は崩壊しているが、多量の土師器片が出土していることから、袖の側壁と同様に土器を芯材として使っていたものと思われる。遺存する袖幅は焚口付近で117cm、煙道部口で131cmであり、高さは34cmとなる。

煙道部は掘り込み方式で作られており、燃焼部より緩く立ち上がり22cmの比高をもつ。煙出部に向かってほぼ水平に進み、中央で一旦立ち上がり、そのまま緩く下って煙出部とつながる。断面形は幅の広いじ字形を示す。燃焼部とつながる付近ではカマド部の覆いと同様に、側壁には石と土師器片を、天井部には土師器片を使って骨材としている。長さは115cmを計り、深さは深い個所で17cm、浅い個所で7cmとなる。

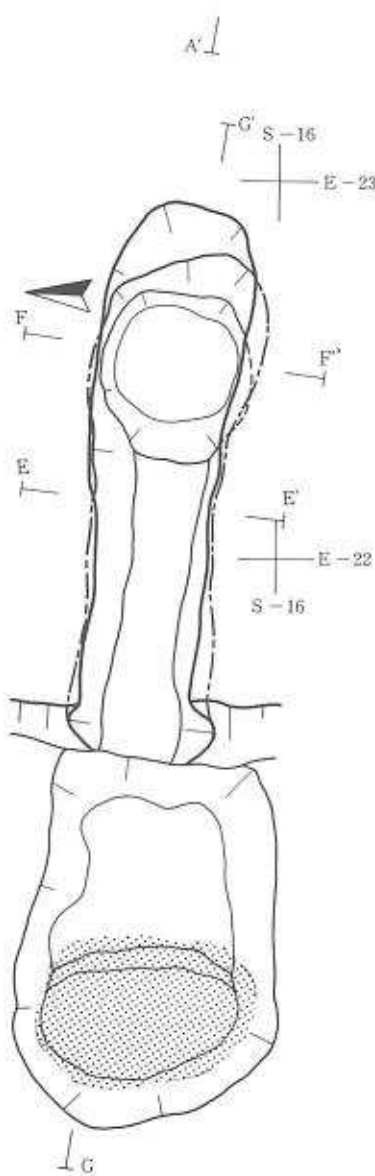
煙出部は二重の掘り込みとなっている。浅いピットは直径約25cmの円形を呈し、煙道端との比高は4cm程にすぎない。深い方のピットは、本来の煙出し口としての機能をもつものと思われる。浅いピットからさらに10cm掘り下げられている。直径15cmの円形で構築面からの比高は24cmとなっている。I期のカマドの主軸方向は住居跡の短軸方向と、II期のカマドのそれは長軸方向と一致する。

【貯蔵穴】 貯蔵穴と思われるピットとしては、P₁・P₂・P₃・P₄がある。P₁は住居の北壁西寄りであり、楕円形を呈し、大きさは122×98cm、深さは13cmである。内部の埋土は住居と堆積土とはほぼ同質であり、廃絶直前まで使用されていたことを示している。P₂とP₃は重複して北東コーナーから検出されており、P₂の方が新しい。P₂はやや歪んだ隅丸長方形で、大きさは70×79cmで深さは12cmとなる。埋土は2層に分けられるが下層は焼土を多量に含むことから、焼失以前は使用されていた可能性が高い。P₃は円形を呈し大きさは70×69cm、深さは17cmである。埋土は一部しか残存しないが、上部には埋め戻された痕跡を残している。P₄は東壁中央部にあ



北カマド

層No	土色	土性	その他
1			I a層
2			住居内埋積土層No.1
3			" 2
4			" 3
5	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	地山の土と褐色土の混合土
6	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	"	5と近似、礫石(アロク)多し
7	暗赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
8	赤褐色(10Y R 5%)	"	焼土(7より焼きが弱い)
9	赤褐色(5Y R 3%)	"	焼土(8より焼きが弱い)
10	暗赤褐色(5Y R 3%)	粘土質シルト	焼土(アロク)礫石(木炭)灰が混入
11	暗赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
12	暗褐色(7.5Y R 3%)	粘土質シルト	
13	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	焼土(礫石)木炭(灰)を多量に含む
14	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	13とほぼ同質
15	黄褐色(10Y R 5%)	"	焼土(アロク)礫石(地山)を含む
16	黒褐色(7.5Y R 3%)	シルト質粘土	焼土(礫石)灰を含む粘性が強い
17	赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
18	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	焼土(礫石)木炭(灰)を含む
19	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	地山粒を含む
20	明褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土、粘の埋積土
21	赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土、粘の埋積土
22	赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
23		粘土質シルト	地山の土と黒褐色土の混合土
24		"	3より地山の土が多、礫石が混入
25	黄褐色(10Y R 5%)	"	地山(アロク)礫石土



東カマド

層No	土色	土性	その他
1			I a層
2	にぶい黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	焼土(礫石)を含む
3	褐色(7.5Y R 3%)	"	焼土(細粒)を含む
4	暗赤褐色(5Y R 3%)	"	焼土(礫石)木炭(灰)を多量に含む
5	暗赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
6	暗赤褐色(5Y R 3%)	粘土質シルト	焼土(アロク)礫石と地山の土の混合土
7	褐色(7.5Y R 3%)	"	地山粒を少量含む
8	暗赤褐色(7.5Y R 3%)	シルト	焼土、5とほぼ同質
9	黒褐色(7.5Y R 3%)	シルト質粘土	焼土(礫石)灰を含む粘性がある
10	黄褐色(10Y R 5%)	粘土質シルト	黄褐色土が少量混入
11	赤褐色(5Y R 3%)	シルト	焼土
12	暗赤褐色(7.5Y R 3%)	シルト	焼土



(第5図) D E 65住居跡(Ⅲ)

り、P₃と重複している。新田関係は不明である。大きさは77×63cmで、深さは11cmとなる。埋土は2層に分けられ、下層は黒褐色を呈し、土器片を包含する。上層は地山の黄褐色土をブロック状に含んでおり、人為的堆積層の様相を呈している。

以上、4個のピットの相互関係をまとめると次のようになる。P₁とP₂は埋土の観察によれば火災による住居廃絶の直前までは使用されており、II期のカマドの使用時期と相関関係をもつものであろう。P₃とP₄は住居使用の途上で人為的に埋め戻されている。双方のピットともI期のカマドの両脇に設置されていること、およびI期のカマドは取り壊されていることとを併せ考えれば、埋め戻した時期はI期のカマドの廃絶の段階に比定されうる可能性が強い。

〔出土遺物〕住居のほぼ全域から出土している。そのなかで特に、北カマドの内部より多量に出土している。また、P₃の上部よりも比較的多く出土するが、これは北カマドの崩壊土と思われる。層位的には、住居内堆積土第2層に集中する。器種には土・甕・鉢がある。

環（第6図） 環には製作にロクロを使用していないものと、使用しているものがある。後者は器面調整上の特徴から二分され、以下のように類別される。

A類—ロクロを使用せず、底部にムシロ痕を残すもの。

B類—ロクロを使用し、外面はロクロ調整で、内面はヘラミガキ調整を施し、黒色処理を加えて仕上げているもの。底部には右回転糸切り痕を残す。

C類—ロクロを使用し、内外面ともロクロ調整のみで、ヘラミガキや黒色処理などが行なわれていないもの。底部に右回転糸切り痕を残す。

B類およびC類はさらに器形の特徴からいくつかに分けられる。

〈環A類〉（第6図1～4）

体部から口縁部まで大きく外傾するもので、形態等において若干の違いは認められるが、細かな分類は行なわなかった。

A類の器面調整—ほぼ共通している。外面はヘラケズリによる調整で、第6図3にのみ口縁部に前段階としての横ナデ痕がみられる。内面は体部下半をヘラナデ、上半を粗いナデによって仕上げている。底部の切り離しはムシロ状のわら製品を敷く手法で行ない、部分的にヘラケズリを施している。第6図4は底部の破損部分に粘土の貼り付けがみられる。

〈環B類〉（第6図5～10）

体部の器形により、さらにB₁類からB₃類までに細分される。

B₁類（第6図5・6） 体部から口縁部まで直線的に外傾するものである。体部は直線的に大きく開き、ほとんどふくらみをもたない。相対的に口径が大きく大形となる。

B₂類（第6図7～9） 体部から口縁部までややふくらみをもって立ち上がるものである。

B₁類と器高はほぼ同じであるが、口径が小さい。第6図8には体部中央に倒立した形で「山」の刻書がある。

B₂類(第6図10) B₂類に高台を付けたもの。高台の部分は破損のため残っていない。

B類の器面調整—ほぼ共通している。外面は体部から口縁部に至る全面に明瞭なロクロナデ痕を残し、ヘラケズリ等の再調整は加えていない。内面は体部から口縁部まで横方向のヘラミガキを施し、底部より体部下端にかけては、第6図9を除き、放射状のヘラミガキを施している。さらに内面はすべて黒色処理されている。全個体とも底部は平底で、第6図10を除き、右回転糸切り痕をそのまま残している。第6図10の底部切り離し手法は高台を取り付けたときの調整(ナデツケ?)のため不明である。

〈坏C類〉(第6図11~17)

体部から口縁部に至る器形上の特徴により、C₁類からC₄類まで細分される。

C₁類(第6図11) 体部から口縁部までやや丸味をもって外傾するもの。相対的に口径が大きく器高が小さい。内外面にロクロナデによる明瞭な稜をもつ。

C₂類(第6図12~14) 体部から口縁部までややふくらみをもって立ち上がるもの。B₂類と極めて近似した器形である。第6図12は底部に小孔をもつが、それが破損によるものか、意図的なものかは摩滅のため判別できない。

C₃類(第6図15・16) 体部から口縁部までかなり丸味をもって外傾するもの。底径が小さく全体的に小形になる。

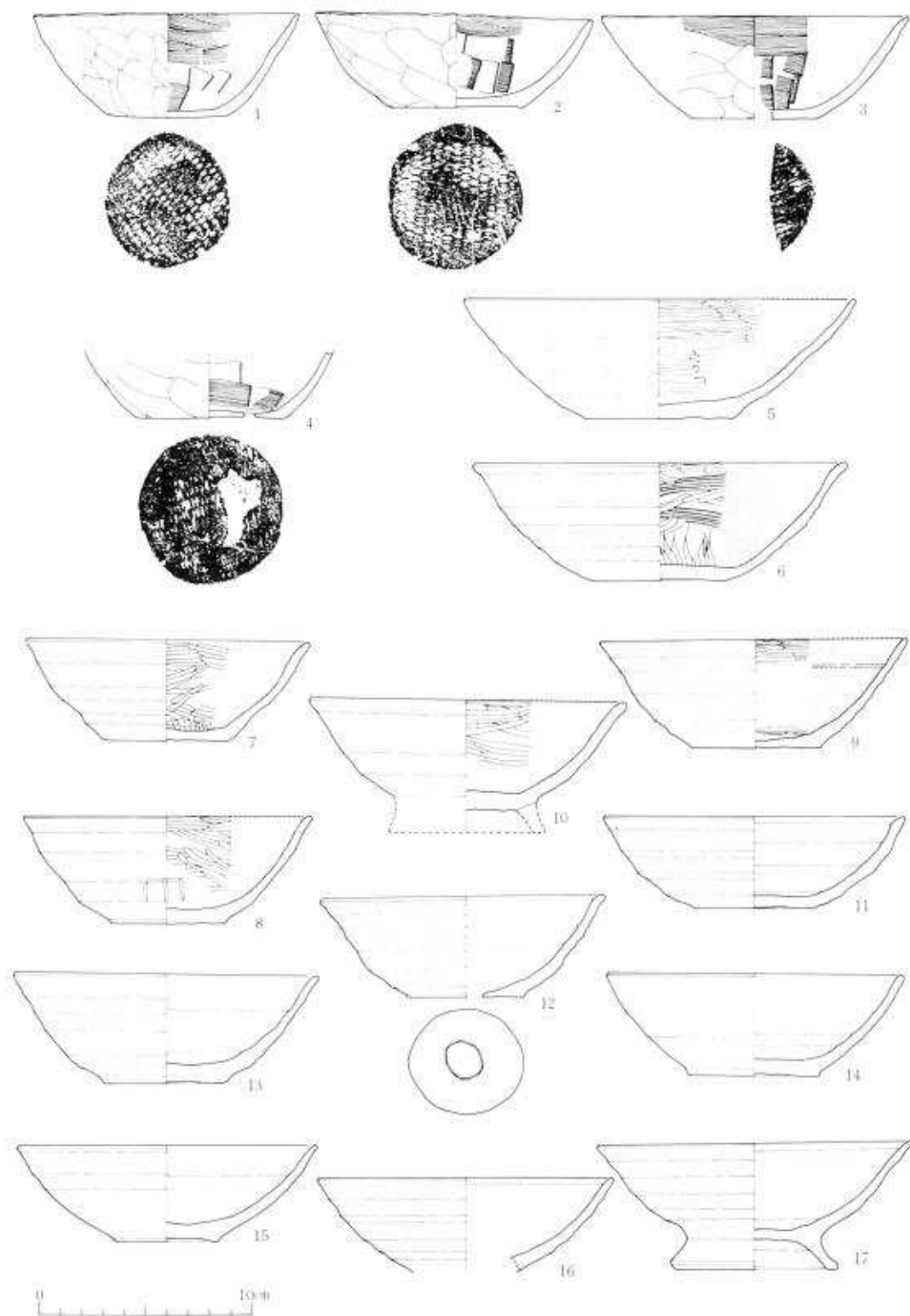
C₄類(第6図17) C₂類に高台を付けたもの。

C類の器面調整—内外面とも体部より口縁部に至るまで全体的にロクロ調整痕がみられ、何らの再調整も加えていない。底部は平底で、第6図17を除き、右回転糸切り痕をそのまま残している。第6図17は高台取り付けによるロクロナデのため底部切り離し手法は不明である。

以上の分類基準を表にしたのが第1表であり、細部の観察項目を記したのが第4表となる。

(第1表) 坏分類基準表

	ロクロ			底 部 形 態	体部から口縁部までの形態
A	不使用			平 底 (ムシロ痕)	
B	使用	内	ヘラミガキ 後黒色処理	平 底 (右回転糸切痕)	1.直線的に外傾する 2.ややふくらみをもって立ちあがる 3.2に高台の付くもの
		外	ロクロナデ		
C	使用	内	ロクロナデ	平 底 (右回転糸切痕)	1.やや丸味をもって外傾する 2.ややふくらみをもって外傾する 3.かなり丸味をもって外傾する 4.2に高台の付くもの
		外	ロクロナデ		



(第6図) D E 65住 出土土器 (1)

甕（第7図～第10図） 甕においても製作に際し、ロクロを使用しないものと使用したものがある。それらは口径と器高の比率および最大径の位置によって以下のように類別される。

A類—ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が口縁部にあるもの。

B類—ロクロを使用しないもので、口径より器高が大きく最大径の位置が体部にあるもの。

C類—ロクロを使用しないもので、口径より器高が小さく最大径の位置が口縁部にあるもの。

D類—ロクロを使用しないもので、口径より器高が小さく最大径の位置が体部にあるもの。

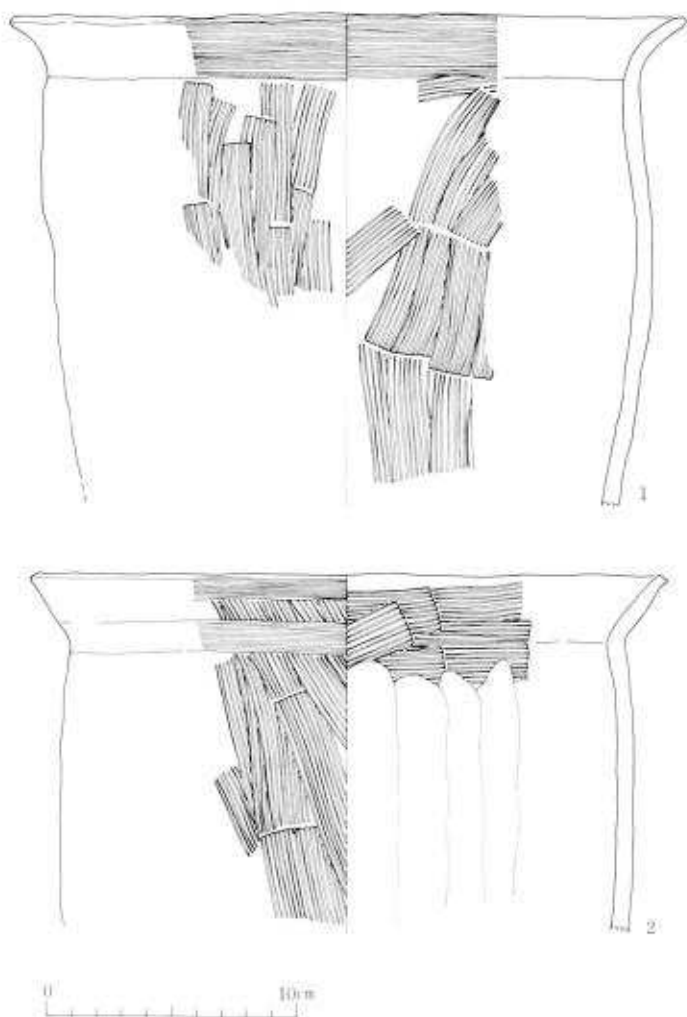
E類—ロクロを使用しているもので、口径より器高が大きいもの。

〈甕A類〉（第7図・第8図）

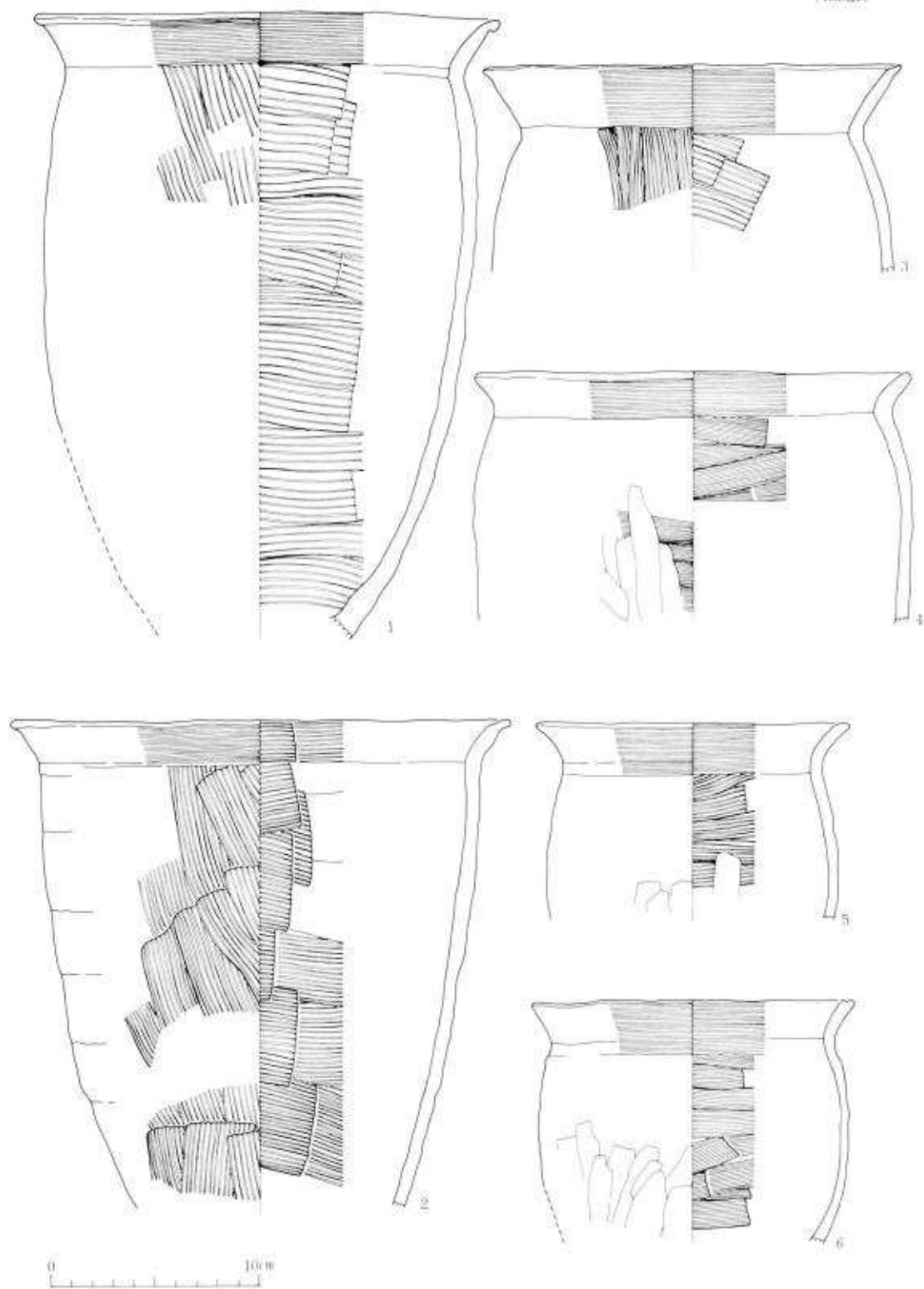
口径より器高が大きく、口縁部に最大径をもつものである。大きさは3種類あり、大形（AⅠ類）、中形（AⅡ類）と小形（AⅢ類）のものに細分される。

AⅠ類・AⅡ類では、さらに体部の最大径を体部上端付近にもつもの(1)と、体部の中央付近にもつもの(2)に分けられる。

AⅠ類（第7図1・2、第8図1・2）大形のものであるが、完形品はなく、推定可能のもので器高が30cm前後となる。形態的には長胴形の甕といわれるものに該当する。



（第7図）D E 65住 出土土器（Ⅱ）



(第8圖) DE65住 出土土器(Ⅲ)

出土数は最も多く、4個体出土している。体部が直線的で、体部最大径を上端付近にもつもの（第7図1、第8図2）と、体部がやや丸味をもち、体部最大径を中央付近にもつもの（第7図2、第8図1）とがある。4個体とも口縁部は比較的短く外反し、頸部に段は認められない。口唇部の形態には若干の違いが認められ、丸味をつけて下方へ弱くつまみだすもの（第8図1・2）と、変化をつけず単純に引きだすもの（第7図1・2）とに分かれる。

A I類の器面調整—A I類の器面調整はほぼ共通しており、刷毛目調整が主体となる。4個体とも外面は縦方向の刷毛目で調整し、口縁部は二次的に横ナデを加えている。第7図2は意識的に口縁部の中央に刷毛目痕を残している。内面調整も刷毛目であるが、横方向のもの（第7図2、第8図1・2）と、縦方向のもの（第7図1）とに分けられ、第7図2は指ナデによって体部の刷毛目痕を消している。第7図2と第8図2とは口縁部に横ナデの二次調整を加えていない。

A II類（第8図3・4） A I類ほど大きくはならないが、完形品はなく、器高は不明である。2個体出土しており、器形的にはかなり異なり、斉性は認められない。

第8図4は体部最大径を上端付近にもち、口縁部は単純に短く外反する。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はナデとヘラケズリ、内面はヘラナデとなる。

第8図3は体部最大径を中央付近にもつ。口縁部は単純に長く外反するが、口唇部はすばませて、内側に稜をつくっている。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目で仕上げている。

A III類（第8図5・6） 器高は推定復元で15cm前後となり、2個体出土している。

第8図5は体部最大径が中央付近にあり、口縁部は単純に長く外反する。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は横方向の刷毛目となる。

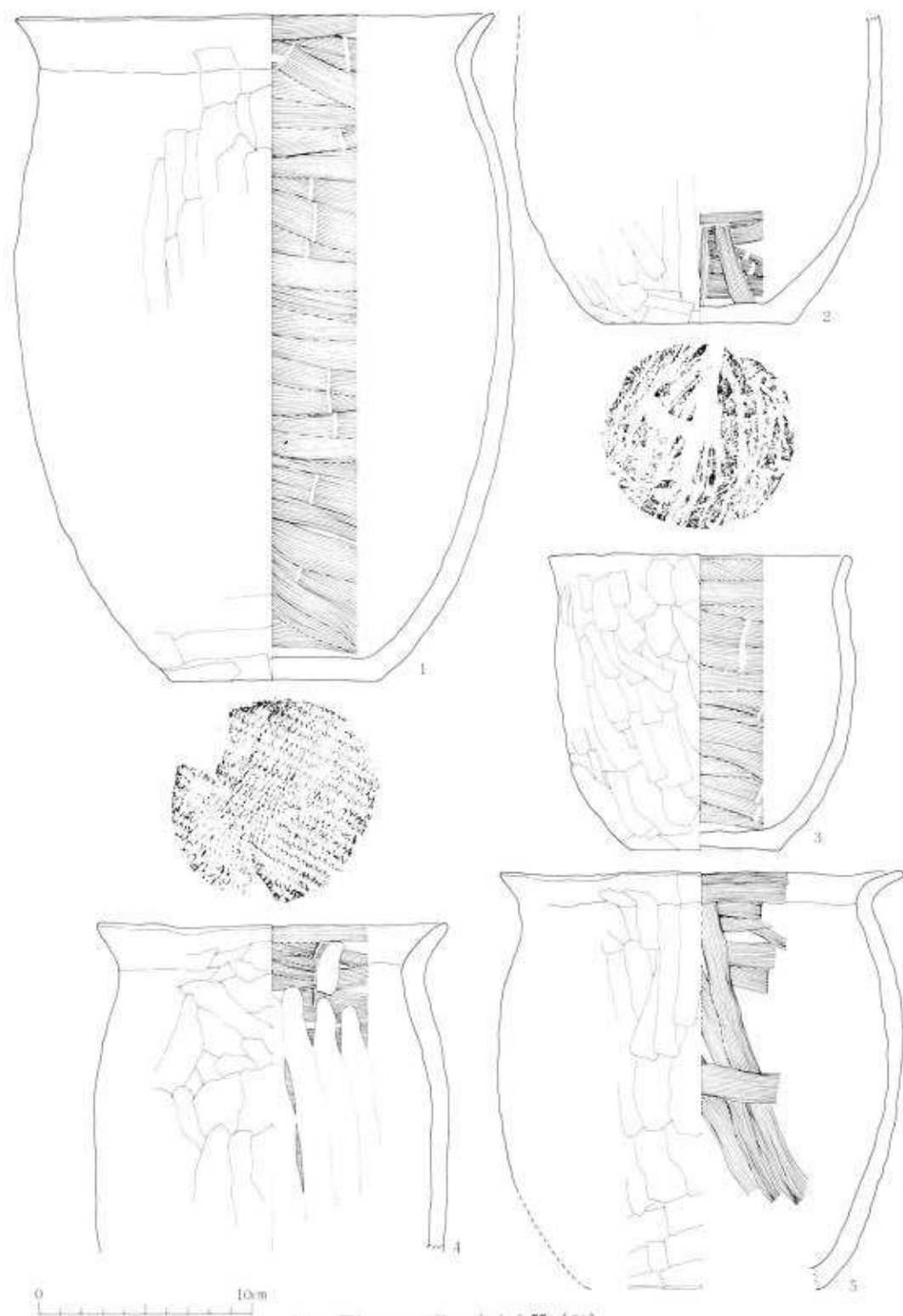
第8図6は同じく体部最大径を中央付近にもつ。口縁部は単純に長く外反し、口唇部の中央に浅い凹みをもつ。これは沈線とは異なり、内外面より器肉を引きだすことによって生じており、意図的なものかは不明である。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデによって仕上げている。

〈甕B類〉（第9図）

口径より器高が大きく、体部に最大径をもつものである。大きさはA類と同様に、大・中・小の3つ（B I類・B II類・B III類）に細分される。

B類の甕はすべて体部の最大径を中央付近にもつ。

B I類（第9図1） 大形のもので器高30cmをこえる。口縁部は、単純に短く外反し、調整等による口縁部と体部との区別もなく、体部へとなだらかに移行する。器面調整は、外面はナデに近い軽いケズリ、内面はヘラナデで統一されている。底部外面は無調整で、ムシロ痕をそ



(第9图) DE 65住 出土土器 (IV)

のまま残している。

B II類（第9図4・5） B I類よりは器高が小さく20cm前後となる。2個体出土しており、それぞれ器形的にはやや異なる。

第9図5は体部の丸味が強く、口縁部は強めに短く外反する。器面調整は、口縁部と体部の区別なく、外面はナデに近い軽いヘラケズリ、内面はヘラナデとなる。

第9図4は体部がやや直線的になり、口縁部は単純に外反する。器面調整は、外面が口縁部体部とも粗いヘラケズリ、内面がヘラナデの後、ナデツケで調整されている。

B III類（第9図3） 小形のもので、器高は14cmである。口縁部はほぼ直立し、体部へとただらかに移行する。器形的には鉢に近い。器面調整は、外面が極端に粗いヘラケズリ、内面が粗いヘラナデとなる。底部は、刷毛目の調整のため、切り離し手法が不明であるが、木の葉底の可能性が高い。他のものに比べ調整が粗雑な点に特色がある。

〈甕C類〉（第10図4・5）

口径より器高が小さく、最大径の位置が口縁部にあるものである。小形のもの、極端に小形のもの2個体出土している。体部の最大径は中央付近にある。

第10図4は器高が12.9cmで比較的小形である。口縁部は単純に短く外反する。器面調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、体部外面がナデ、内面が刷毛目となる。底部にはムシロ痕をそのまま残している。調整は非常に丁寧である。

第10図5は器高が7.4cmで極めて小さい。口縁部は短く外反し、口唇部はすばませて内側に稜をつくっている。器面調整は、口縁部は内外面とも横ナデ、体部外面は軽いケズリ、内面はヘラナデで仕上げている。底部は無調整でムシロ痕をそのまま残している。

〈甕D類〉（第10図6）

口径より器高が小さく、最大径の位置が体部にあるものである。

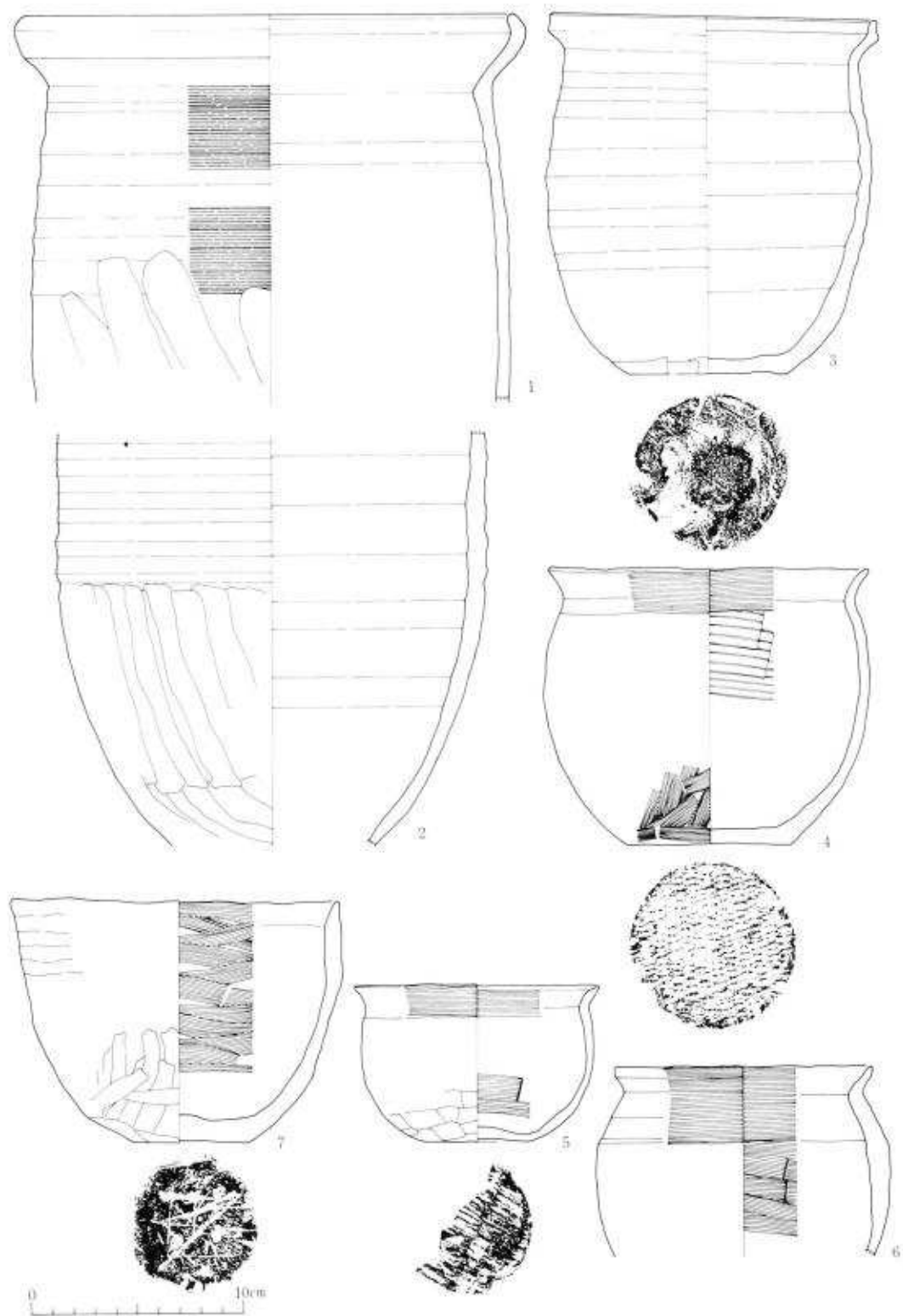
第10図6の土器は、器高が不明ではあるが、この類に分属した。体部はほぼ球胴形を呈し、体部中央付近に最大径をもつ。口縁部は短く外反し、口唇部は上方につまみだしている。器面調整は、口縁部から体部上半は内外面とも横ナデ、体部下半の内面はヘラナデとなる。

〈甕E類〉（第10図1-3）

ロクロを使用し、口径より器高が大きいものである。3個体出土しており、大形のもの、小形のものがある。口縁部を欠くものもあるが、最大径の位置は口縁部にもつものと思われる。

E I類（第10図1・2） 大形のもので長胴形を呈する。2個体出土している。

第10図1は体部の下半を欠く。口縁部は長く外反し、口唇部を内湾ぎみに強く上方へつまみだしている。体部最大径は中央付近にもつ。外面調整は、口縁部がロクロナデ、体部上半が刷毛目状ロクロナデ、下半がヘラケズリとなる。内面調整は全面ロクロナデで仕上げている。



(第10図) D E 65住 出土土器 (V)

第10図2は口縁部を欠くため、全体の器形は推定できない。第10図1より器高は大きくならず、やや直線的な体部をもつ。器面調整は、外面体部上半はロクロナデのみで山形の明瞭な稜をもつ。体部下半はへラケズリを加えている。内面は全面ロクロナデとなる。

EⅢ類(第10図3) 小形のもので器高が16.8cmとなる。口縁部は長く外反し、口唇部は上方へつまみだしている。体部最大径は中央付近にある。器面調整は、内外面ともロクロナデであり、体部下端から底部全面にへラケズリを施している。

図示遺物のなかで以上の分類に含まれなかったものとして、第9図2がある。この甕は、口縁部から体部上半にかけて、欠損しているため正確な分類とはならないが、BⅡ類に含まれる可能性が強い。器面調整は、体部外面が軽いへラケズリ、内面がナデとなっており、底部には木葉痕をそのまま残している。調整は極めて粗い。

なお、分類基準は第2表に、細部の観察項目は第5・6表に記してある。

鉢(第10図7)

1個体出土している。ロクロは使っておらず、粘土巻き上げで成形している。口径より器高が小さい。器面調整は粗く、外面はナデに近いへラケズリ、内面はへラナデとなっている。底部には木葉痕をそのまま残している。

(第2表) 甕分類基準表

ロクロ	口径と器高	最大径の位置	器高	体部最大径の位置
不使用	口径≤器高	A 口縁部	I. 30cm前後のもの II. 20cm前後のもの III. 15cm前後のもの IV. 10cm前後のもの	1. 体部上端付近
		B 体部		
	口径>器高	C 口縁部		
		D 体部		
使用	口径≤器高	E 口縁部		



(第11図) D E 56住 出土遺物(VI)

なお、当住居の埋土上層より、縄文土器が13片出土している。すべて同一個体の破片であり、甕として分類される。内外面とも文様、

地文がみられず、横方向の粗いへラミガキが施されている。頸部には浅い一条の沈線が回る。時期は縄文晩期に属するものと思われるがそれ以上のことは不明である。

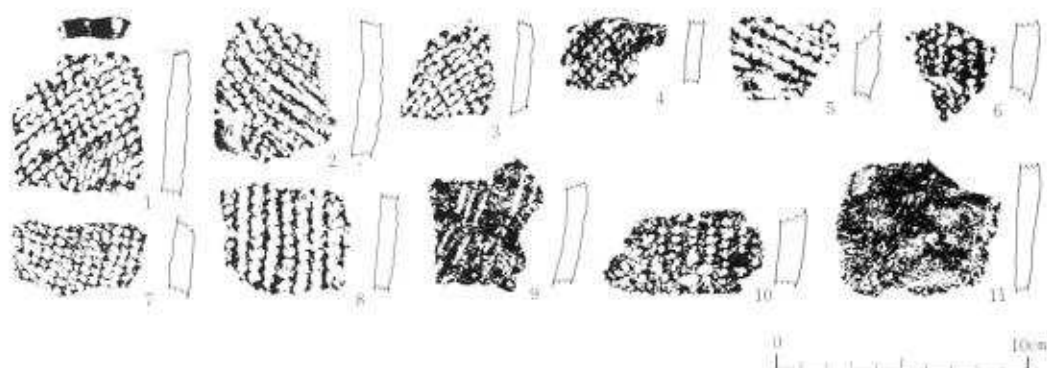
(3) 遺構に伴わない出土遺物

遺構に伴わない遺物として少量の縄文土器と土師器が出土している。

土師器は坏の破片5、甕の破片13となるがすべて少片のため図示できない。その内容はDE65住出土遺物と共通しており、坏ではA類が1片で残りの4片がB類となる。甕はすべてロクロを使用しないもので、口縁部片2、体部片11となる。口縁部の破片は内外に横ナデ痕がみられ、A類に属するものと思われる。体部片は外面に刷毛目痕を残すものとヘラケズリ痕を残すものとに分かれるが、小片のため全体の器形等は不明である。

縄文土器は、A区、D区を中心に合計80片、個体数で34個体分が出土している。出土層位はIa～Ib層であり、主にIb層から出土する。所属時期は早期に属するものと晩期に属するものに分けられる。体部の破片がそのほとんどを占めるため、特徴的なものが認められず、時期の細分はできない。ただ、晩期に属するもののなかには文様の特徴から大洞A式に比定されうるものも含まれている。早期に属するものが9個体、晩期に属するものが23個体、不明2個体となるが、それぞれの出土層位は峻別できなかった。

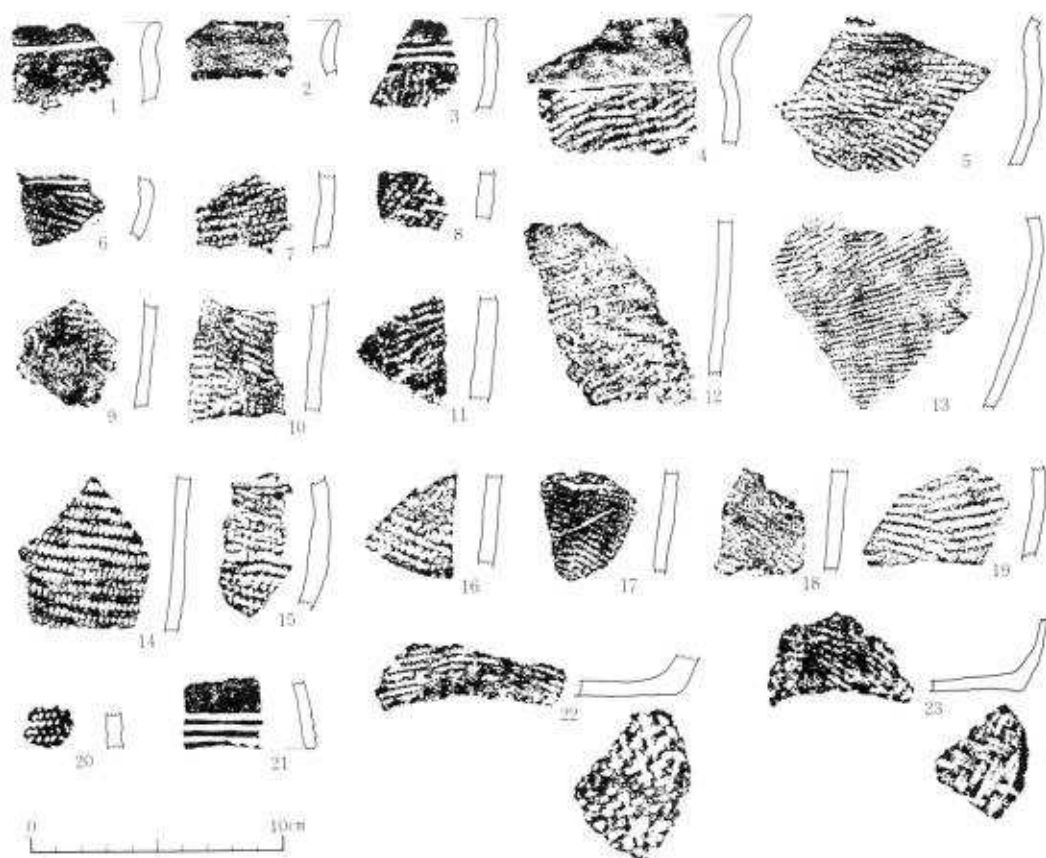
以下、拓影図と観察表を掲げる。



(第12図) 遺構外出土遺物拓影図 (I)

観察表

番号	時期	出土地点	器種	残存部位	地文	その他	破片数
1	早期	C C 68-1 b	深鉢	口縁部	L, R L (複筋?)	縦線多量混入。口縁に圧痕文	1
2	"	D F 71-1 b	"	体部	R L R (")	"	1
3	"	A H 83-1 b	"	"	" (")	"	4
4	"	A I 83-1 b	"	"	" (")	縄文器体が近似丸底か?	12
5	"	D E 71-1 b	天底深鉢	"	" (")	"	2
6	"	D F 71-1 b	"	"	不明	"	1
7	"	A I 83-1 b	"	"	L, R L (複筋)	"	1
8	"	D F 65-1 a b	"	"	R L R (")	"	3
9	"	A I 83-1 b	天底深鉢	体部下	口縁複線文	縦線極小 (ほとんど無)	1
10	不明	D F 65-1 a b	深鉢	体部	R L R (複筋)	縦線ほとんど無	2
11	不明	A I 83-1 b	"	"	不明	縦線ほとんど無	1



(第13図) 遺構外出土遺物拓影図(II)

観察表

番号	時期	出土地点	器種	残存部位	地	文	その他	破片数
1	晩期	DE71-1b	小型深鉢	口縁-体部	不	明	頸部に沈線	1
2	"	AJ77-1b	深鉢	口縁部	"	"	"	1
3	大曲	AH83-1a・b	"	"	"	"	"	2
4	晩期	DE71-1b	"	口縁-体部	L	R	"	1
5	"	AJ77-1a・b	"	体部	"	"	"	4
6	"	DE68-1b	小型深鉢(?)	"	R	L (?)	"	1
7	"	A183-1b	深鉢	"	L	R	"	1
8	"	AJ77-1b	"	"	"	R L (?) (残片)	"	1
9	"	AJ77-1b	"	"	"	L; R (?) (残片)	"	1
10	"	CC68-1b	"	"	L	R	"	3
11	"	CH65-1b	"	"	"	"	"	2
12	"	A183-1b	"	"	"	"	"	5
13	"	DE71-1a・b	"	"	"	"	(単節)	3
14	"	A183-1b	"	"	"	"	"	1
15	"	DE71-1b	"	"	"	"	"	1
16	"	DE71-1a	"	"	"	"	頸部に沈線	2
17	"	AJ77-1b	"	"	"	"	"	1
18	"	AJ77-1b	"	"	不	明	"	1
19	"	DF71-1a・b	"	"	L	R	"	9
20	"	AH83-1b	"	"	"	"	"	1
21	大曲	DE68-1b	台付土器	台部	無	文	"	1
22	晩期	AJ77-1b	深鉢	底	L	R	底部刷代底(一本超え2本着り1本送り)	1
23	"	AJ77-1b	小型深鉢	"	"	"	(編み方不明)	1

(4) DE65住に関する問題点

〔遺構〕

検出遺構は竪穴住居跡1棟のみで、当然のことながら遺構相互間の関係にまで言及することはできない。したがって、前項の説明で足りるものではあるが、本地方の他遺跡の住居跡と比べて留意すべき点を若干指摘しておきたい。

当住居の構造を概観すると次のようになる。支柱穴は4本(3本しか確認されていないが、残りの1本は攪乱部分にあったものと想定する)で、その配置形はほぼ方形であるが、住居の方形プランの対角線上からずれて、東壁際に配置されている。カマドは時期を違えて二基検出されており、東壁に付設されたものから北壁のものへと移行する。ともに、竪穴壁辺の中央付近ではなく、北東コーナー寄りの部分に構築されている。

本地方においては、ロクロ未使用土器のみを出土する竪穴住居跡の場合、支柱穴は住居の対角線上に乗るように配置され、カマドは壁辺の中央付近に付設されるのが一般的である。それに対し、上記のような当住居と共通する構造をもつ住居跡は類例も多く、そのほとんどが土器製作にロクロ技術が定着した段階のものである。

個別の具体的な特徴としては、II期のカマドにみられるやや特異な構築法があげられる。主体部は石と粘土とを併用しており、最初に石で骨組し、次に土質の異なる土を交互に積みあげる方法がとられている。さらに、袖の側壁および天井部の内壁には多量の土器片を芯材として利用しており、この土器は当住居の出土土器の大多数を占めている。また、山形の傾斜をもつ煙道部や二重のピットをもつ煙出部にも特徴が認められる。

〔出土遺物〕

まず、遺物の出土した住居が焼失家屋であり、ほとんどの遺物が焼失時に堆積した土層の下、あるいはその中より出土している点に注目したい。このことから、前項において図示した遺物はこの住居跡の焼失時のあり方と密接に関連しているものと思われ、何らかのかたちで共用関係にあったことを示している。

坯はA類からC類まで類別されている。A類とB類は土師器の種別に一括され、C類は一般的に赤焼き土器と呼ばれているものに包括される。赤焼き土器の歴史的 성격に関しては、今の段階では明確にされているとは言い難く、結果的に、土師器・須恵器を含めたなかでの赤焼き土器の認定方法に多様性があることは否めない。本報告では個々の土器にあらわれた整形技法—調整技法—のみをとりあげて分類基準(第1表)としている。

甕はA類からE類まで分類され、種別はすべて土師器として認定される。ロクロを使用しないA～D類が圧倒的多数を占め、ロクロを使用するE類は3個体を数えるにすぎない。

長胴形の甕が量的には主体を占めているが、それ以外にも各種の器形がみられ、さらには法

量上の違いにおいても区分が可能である。その内容はかなり多様であり、生活用具として使用されていた段階では、それぞれの用途に応じてかなり分化が進んでいたことを窺わせている。

本遺跡の出土土器にみられる顕著な特徴として、坏A類、甕A・B・C類(ともに土師器)の底部に有するムシロ状の痕跡があげられる。これは、底部の切り離し手法に用いられる木の葉、網代などと同じ効果をもつものであるが、岩手県における報告例はみあたらない。おそらく、地域、年代とも本遺跡に限定されるものであろう。

〔住居における土器のあり方〕

先にもふれたように、図示した遺物は住居廃絶の直前には共用関係にある。ただ、その使われ方には違いがみられ、坏の一部と甕の大部分が北カマドの崩壊土より出土している。このことは、厳密な意味では、住居床面上から出土し、生活用具として使われた他の土器とは若干の時期差が生じていることを示している。カマドの芯材として使われた土器を除外し、生活用具として使用されていた可能性の強い土器を抽出すると以下ようになる。

坏—第6図5・10・12・16・17 甕—第7図6、第9図4、第10図2・5

坏はB類全部とC類の一部で、ロクロを使用しないA類は除かれる。甕ではA・B・C・E類の各一点ずつとなり、ロクロ使用のものと不使用のものが混在する。このことから、住居の廃絶時における生活用具としての土器組成の内容を段階的にみれば、坏ではロクロ技術が普及し、定着し終えた段階、甕ではロクロ技術の導入が進行し、ロクロ不使用土器が終末期をむかえつつある段階に比定されよう。

しかし、上記の段階的位置づけはおおよその見通しであり、流動的な要素をも留めている。たとえば、北カマドおよび北カマド崩壊土のなかには坏C類、甕E I類もすでに含まれている。また、破片ではあるが、床面および廃絶当時の生活面上に坏A類、甕A・B・C類の土器が出土していることも見逃せない。これらの二点は前述の段階区分と大きく矛盾するものではないが、前者は時期を引き下げる要因に、後者は引き上げる要因となりえるものである。

土師器製作にロクロ技術を導入する転換期の傾向として、坏形土器への受け入れが先行し、甕形土器への浸透は稀薄であるのが一般的である。当住居においても、このことは是認されうるものであり、加えて、北カマド内からロクロ使用の甕を出土し、生活面上からはロクロ未使用の甕を出土するという一種の逆転現象もみられる。

以上のような伴出状態は、器形による製作技法の変遷過程が一律ではないことを示すとどまらず、消費の場である個々の住居においては土器の組成内容を画一的に変換しえないことを示しているものであろう。

〔年代〕

最後に、当住居の年代に若干ふれておきたい。まず、北カマド内の出土土器のなかに甕E III

類のみならず、ⅡE類もすでに含まれていることに注目したい。前述のように、北カマドの芯材として使用された土器は、住居の廃絶時の生活面上から出土した土器とは微妙な時期差をもつものと考えられる。また、生活面上から出土した坏の内容を概観すると、坏B類は、形態および内面調整手法からみて、ロクロ技術採用後の時間に大きく巾をもてるものではないとしても、糸切りの切りっぱなしで、ヘラケズリの二次調整は施されていない。坏C類（赤焼土器）では、坏全体に占める割合がかなりの高率で、過半数を超えている（第6表）。こうした事実は、製作技法の変遷のみを問題とすれば、ロクロ成形坏、ロクロ成形小形甕、ロクロ整形長胴甕という土師器の基本的器種のすべてにロクロが普及した段階をすでに経過していることを示唆しているものであろう。当住居の年代を考えると、その上限はこの時期的段階を測りえないことは明白である。

ところで、北上川中流域において、土師器製作にロクロ技術が普及した時期をどのように考えるかについて、近年二つの注目すべき論考（伊藤：1976、沼山：1977）がある。伊藤氏は、本地方におけるロクロ土師器の出現は、須恵器生産の影響をうけたというより他地域からのロクロ土師器の系譜をもった技術として成立したものとし、その時期をだいたい8世紀末から9世紀の初め頃とみなしている。これに対して沼山氏は、ロクロ未使用土器は在地生産の須恵器を伴って9世紀の前半代までは残存したとし、ロクロ土師器の普及と定着を9世紀の中葉と考えるものである。この二つの見解は、今までのロクロ土師器の出現と普及に関する模倣とした通念に見直しを与えるもので、きわめて傾聴に値する見解といえる。

本地方において、ロクロ土師器が出現する時期を9世紀の前半代、それも初頭に近い時期におくことは、胆沢城跡および太田方八丁遺跡からの出土遺物の内容からみて^(注5)ほぼ妥当な想定と思われる。ただ、一般遺跡におけるその転換は、官衛遺跡にみられるような急激な様相を呈するものとは考えられない。このことの傍証として、ロクロ使用坏と不使用坏とを共伴する竪穴住居跡がまとまりをもって確実に存在すること、さらには同一遺跡内において、それらの共伴比率の変化を段階的にたどれる住居跡群が確認されうること、などがあげられよう。

したがって、ロクロ未使用の土器が9世紀の前半代までは完全には消滅しないという想定はきわめて可能性が強いものといえる。ここでは、一般集落において、土師器の全器形にロクロ技術が浸透する時期を9世紀の中葉を前後する時期に考えておきたい。

ごく大まかではあるが、以上の遺物の検討とこれまでの研究結果によって、当住居の営まれていた年代を9世紀の後半代、それも中葉に近い時期に属するものと理解しておく。

注5) 江釣子村鎌谷地遺跡・金ヶ崎町西根遺跡・同土師田遺跡などがある。

若手昭教育委員会「鎌谷地遺跡現地説明会資料」1974

草間茂一「金ヶ崎町西根遺跡」金ヶ崎町教育委員会 1959

岩手県教育委員会「上新田遺跡現地説明会資料」1975

注2) 水沢市真城ヶ丘団地遺跡・北上市相去遺跡などがある。

水沢市教育委員会「土野団地遺跡緊急調査現地説明会資料」1972

岩手県教育委員会・北上市教育委員会「相去遺跡現地説明会資料」1974

注3) 沼山源喜治ほか「尻引遺跡調査報告書」北上市教育委員会 1977

沼山氏は、彌谷地遺跡や尻引遺跡の出土土器を検討し、北上川中流域においては、須恵器生産開始の影響を受けている可能性を示唆しながら、ロクロ製土師器長胴甕がロクロ土師器皿と同時に出現するものとしている。出現の時期はさておき、製作技法の共存関係という観点に限定するならば、ロクロ未使用の長胴甕も現実には共存しており、奥にまで完全に転換しているものとは言えない。また、氏も述べられているように、北上川上流域に眼をうつせば、ロクロ技術の導入は環中心になる傾向がより顕著なものとなる。

注4) 伊藤博幸「岩手県の古代土器生産について—須恵器とロクロ土器の素描」『岩手史学研究』第64号1976

注5) 前掲注3と同じ

注6) 伊藤博幸「肥前城・志波城創建段階の土器様相」シンポジウム「太田方六丁の性格について」1979

注7) 高橋信雄「岩手県のロクロ使用土器について」『考古風土器』第2号、1977

注8) 江刺市宮地遺跡などにみられる。

岩手県教育委員会「東北新幹線関係埋蔵文化財発掘調査略報1」——関・江刺・北上地区 1976

この遺跡では、ロクロ未使用環と使用環との共存比率の段階的变化に対応して、住居の構造そのものも変化している。

4. まとめ

1、今回の調査によって発見された遺構は、住居跡一棟に限られる。これは、平安時代の初めに属するものと思われる。

2、発見遺構は焼失家屋であり、多量の土器が発見されている。その内容は、ロクロ導入期の一つの様相を表わしている。

他に少量ではあるが縄文土器（早期、晩期）も出土しており、発掘範囲外に同時期の遺構の存在も予想される。

3、今回の調査は遺跡の乗る河岸段丘上の西縁の一部であり、遺跡の範囲は東側にのびる。その面積は約 5,900m²となり、保存状況は良好である。

幅遺跡

遺跡記号：HB

所在地：石鳥谷町新堀第52地割17-5他

調査期間：昭和49年11月18日～11月29日

調査対象面積：2400㎡

平面測量基準点：東京基点 867.570km (CA50)

基準高：海拔 91.50 m

1. 遺跡の位置と環境 (第Ⅷ図P190、 第Ⅸ図P191)

幅道跡は、裨貫郡石鳥谷町新堀地内に所在し、石鳥谷駅東南約3kmの地点である。この付近は北上川河岸段丘岸が見られ、河川の流路変遷の過程を示している。また、遺跡は標高221.6mの戸塚森の西麓部に位置し、ゆるやかな傾斜地を畑地、宅地、水田等に利用している。したがって水田は、段差のあるものが多く、調査対象範囲の中では1m30の段差が見られる水田もある。遺跡の現状は水田が大部分を占め、畑地、草地、宅地跡などである。

2. 調査の方法と経過

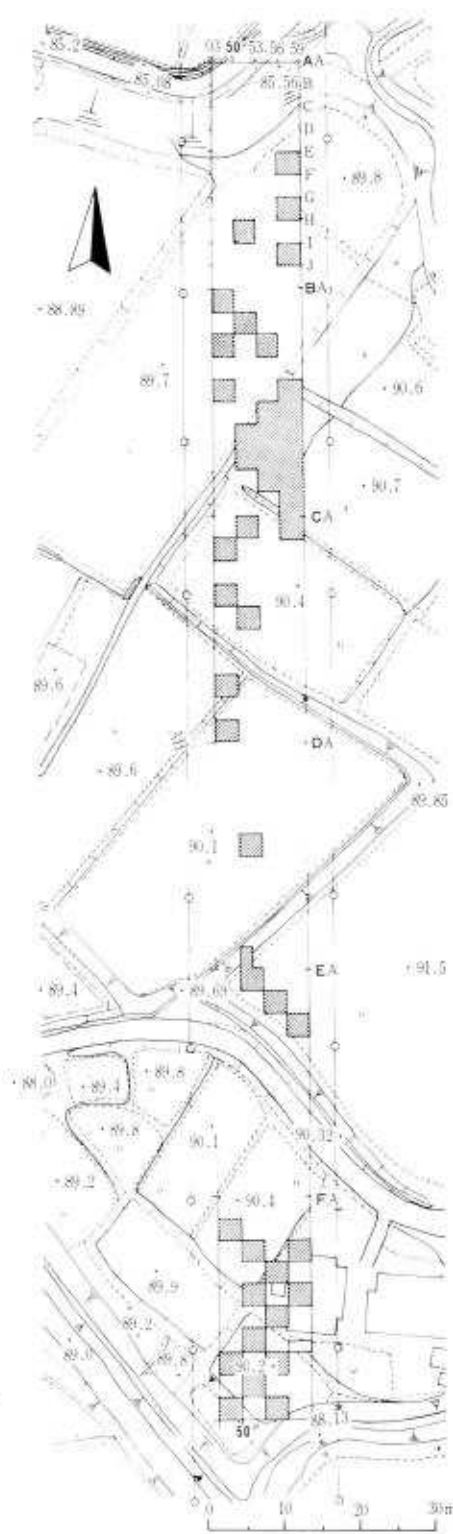
昭和47年の東北新幹線建設事業の施行に伴うルート内の遺跡分布調査の際に若干の土師器片を採集したことから発掘調査を実施した。

調査は、路線敷内の遺跡全体を対象に約2400mを3m×3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去し、遺構の有無、遺物散布の有無の状況を調査した。中心軸、基準線の位置については、別記のとおりである。

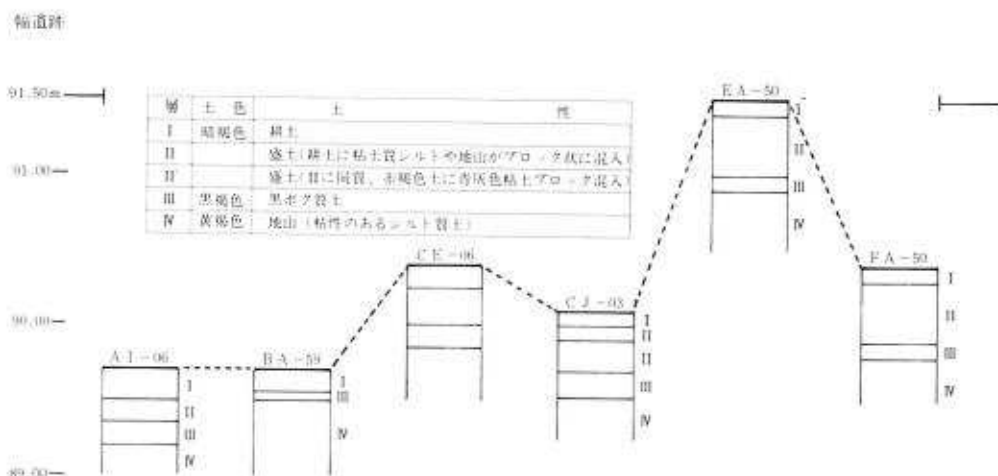
3. 調査の結果

(1) 遺跡の基本層位 (第2図)

遺跡の基本的層位は、地形に変化があることからそれぞれの地形に合わせて観察した。その結果、全ての地点の土層にわたって、撓乱土(盛土)があり地山にのっていることが認められた。A・Bブロック水田面の土層は第2図のようである。即ち、表土

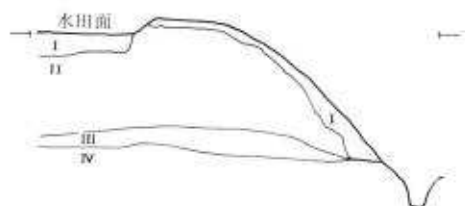


(第1図) 幅道跡グリッド配置図



(第2図) 各ブロック土層模式図

(耕土)は13~18cmで、その下層に攪乱土がある。攪乱土は15~25cmであり、耕土にシルト質土(粘性大)や、地山の黄褐色シルト質土がブロック状に混合し、固くしまっている。地山は地表から約40cmである。Cブロックは約1mの段差のある水田があるが、粘土質シルトであり、遺構、遺物は存在しなかった。DブロックはAB地区以外では最も低い面(標高90.1m)であり、水田として利用されている。



(第3図) E A 50土層断面図

盛土の下に黒褐色土が約10cmみられる。遺構、遺物の検出はない。Eブロックは最も高い面(91.5m)である。このEブロック水田面の土層をみると、かなり厚い盛土になっている。(第3図)ガラス、磁器片の出土があった。全体の調査の結果、遺構、遺物の検出、発見はなかった。

4. まとめ

調査区全体の地形は、当初、高位水田面には遺物包含層があると思われ調査したが、前述のように盛土であり、しかもその盛土は地区全体にわたってあり、これは、戸塚森から西へのびる緩斜面を黄褐色土の地山を削平し、盛土により整地し、水田にしたものと確認された。したがって分布調査時点での遺物採集は、近接地点からの遺物の流れ込みによるものと考えられる。ちなみに、幅道跡の南西500mの段丘崖附近から土師器片が表面採集され、遺跡が確認される(昭和53年11月、県教委調査)などしていることから十分考えられる。

版 圖



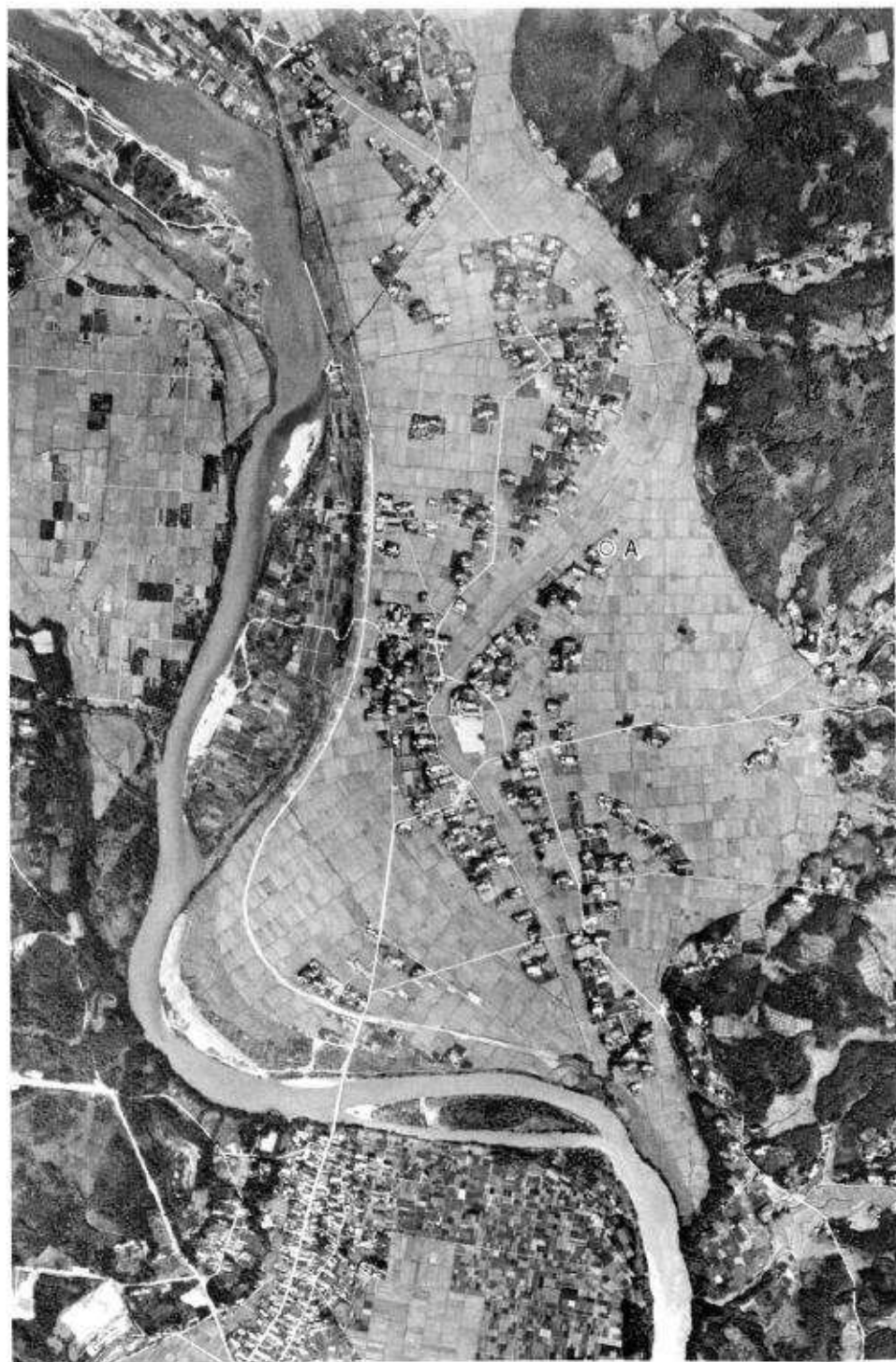
A 鬼柳遺跡 B 南館遺跡 C 西野遺跡 D 松ノ木遺跡 E 八木畑遺跡

図版 I 北上南部地区空中写真



A 野田II遺跡 B 野田I遺跡

図版2 北上北部地区空中写真(その1)



A 堀ノ内遺跡

図版 3 北上北部地区空中写真(その 2)



A 八幡遺跡 B 高松遺跡

図版 4 花巻地区空中写真



A 幅遺跡 B 大曲遺跡 C 大明神遺跡

図版 5 石鳥谷地区空中写真

八木畑遺跡



1



2

図版 1 | 1: 遺跡附近全景 (東南より撮影) | 2: 発掘風景 (南より撮影)



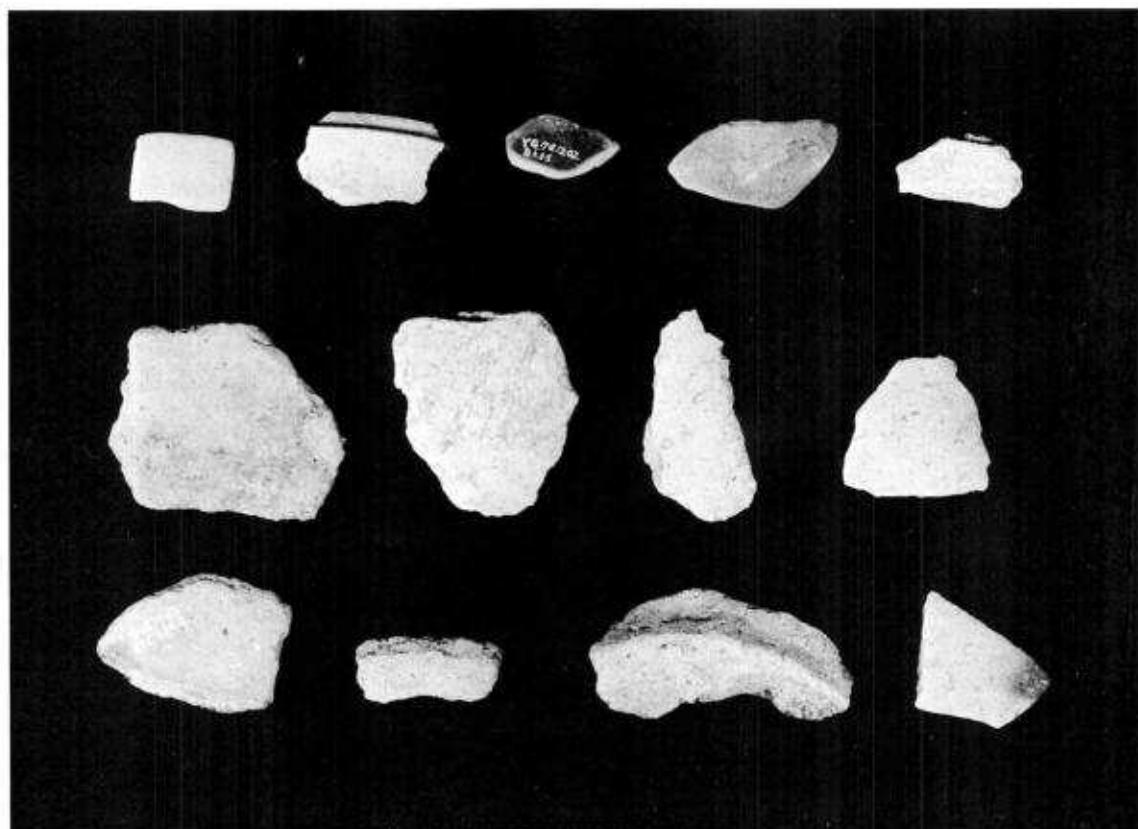
1 : 発掘調査前の
遺跡状況
(南より撮影)



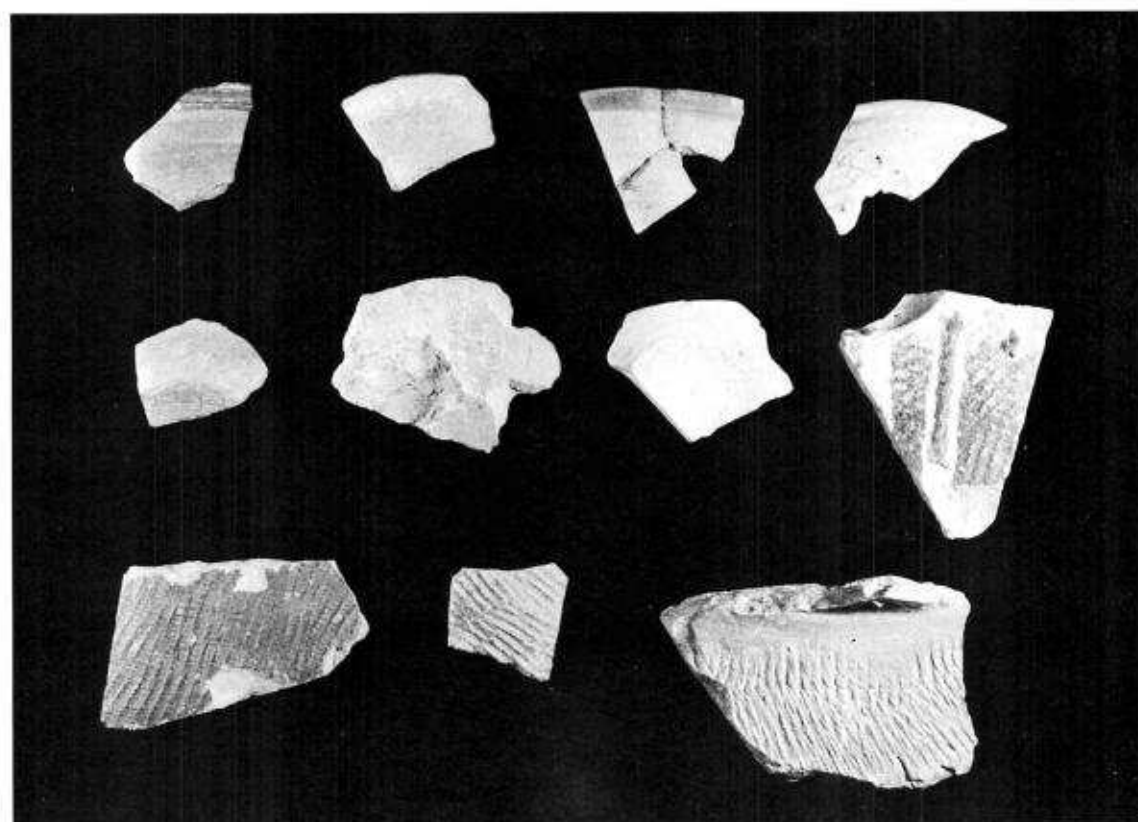
2 : 発掘(検出)状況
(南より撮影)



3 : BF-03グリッド
東壁面土層断面

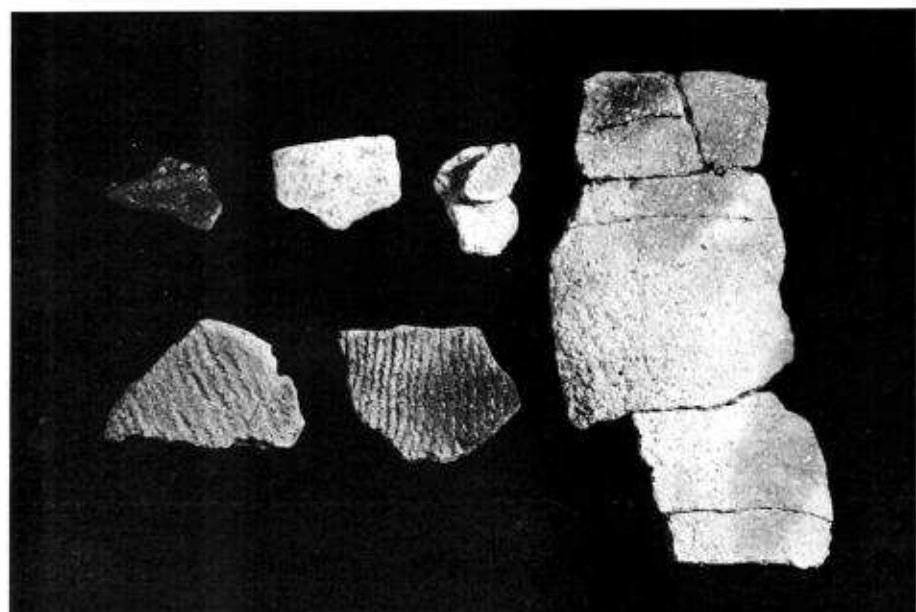


1



2

図版3 出土遺物 1：土師器片（約 $\frac{1}{2}$ ） 2：須恵器片（約 $\frac{1}{2}$ ）



1



2



3



4

1 : 縄文土器片 (約 $\frac{1}{3}$)

2 : 須恵器蓋 (約 $\frac{2}{3}$)

3 : 鉄滓 (約 $\frac{1}{2}$)

4 : 石器片 (約 $\frac{1}{3}$)

松ノ木遺跡

1 : 発掘調査風景

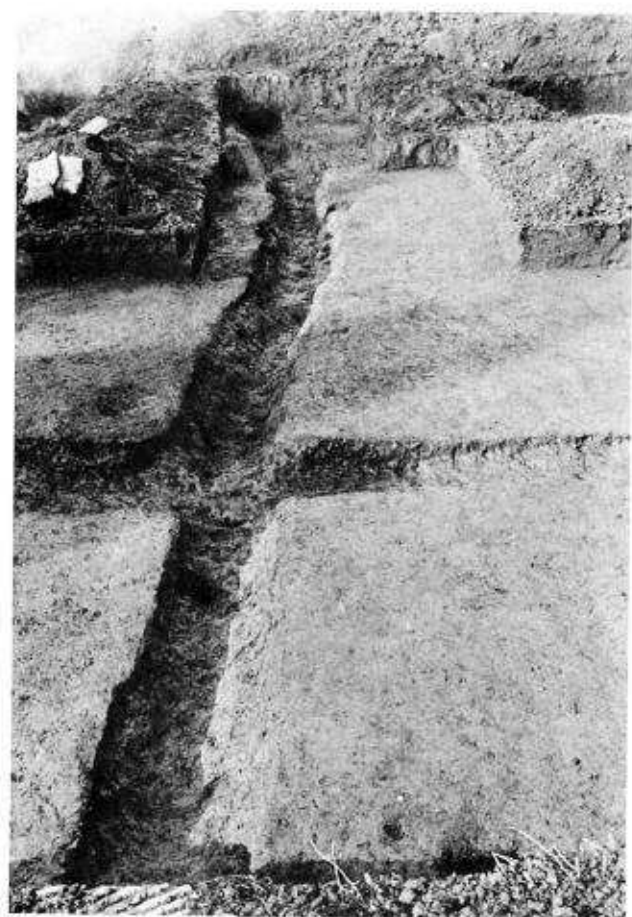


2 : 同上



3 : BA 501溝検出状況
(北側より)





1 : 溝検出状況
(南側より)

2 : BD061溝
(東側より)

2

図版 2

西野遺跡

1：遺跡全景
(南から)



2：粗掘作業風景



3：BG 53住居跡





4 : CI 50住居跡

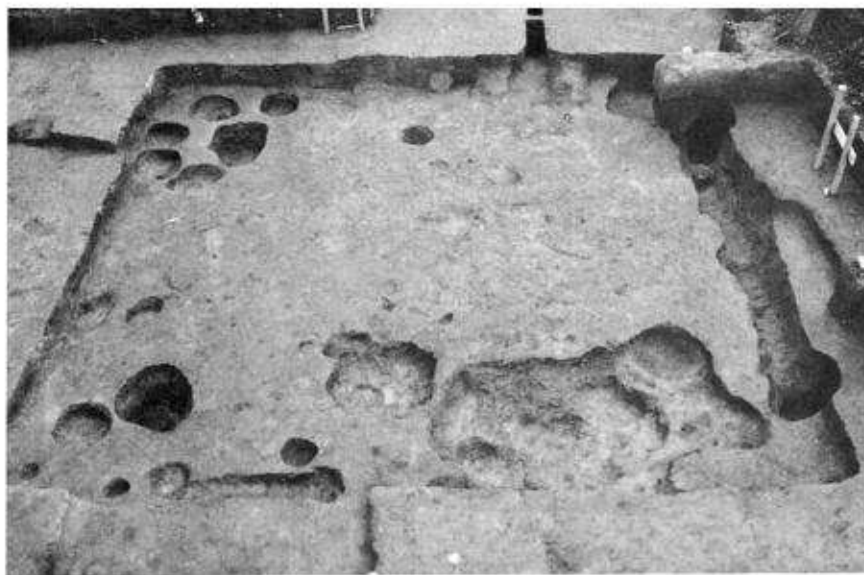


5 : 遺物出土状況



6 : 馬具(轡)
出土状況

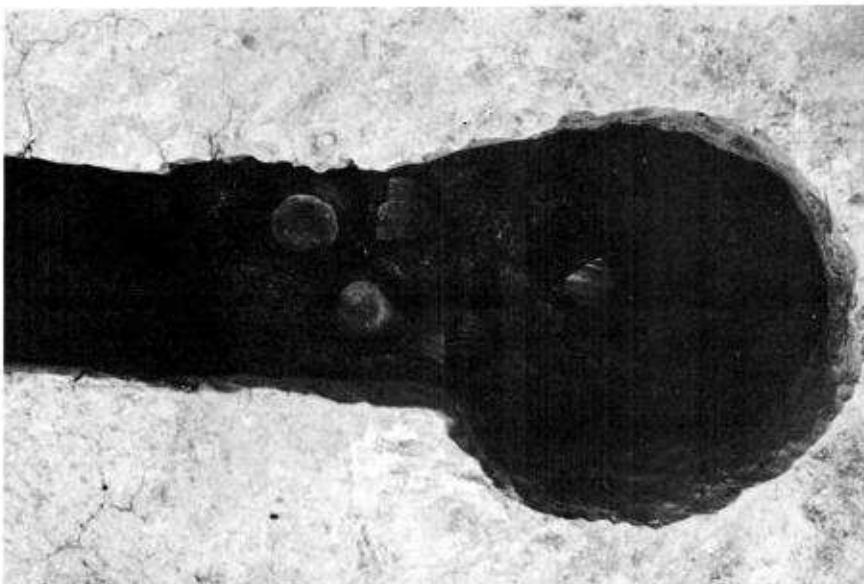
7 : CE 36住居跡



8 : CE 36住居跡
降下火山灰
検出状況



9 : CE 36住居跡
煙道部土器出
土状況

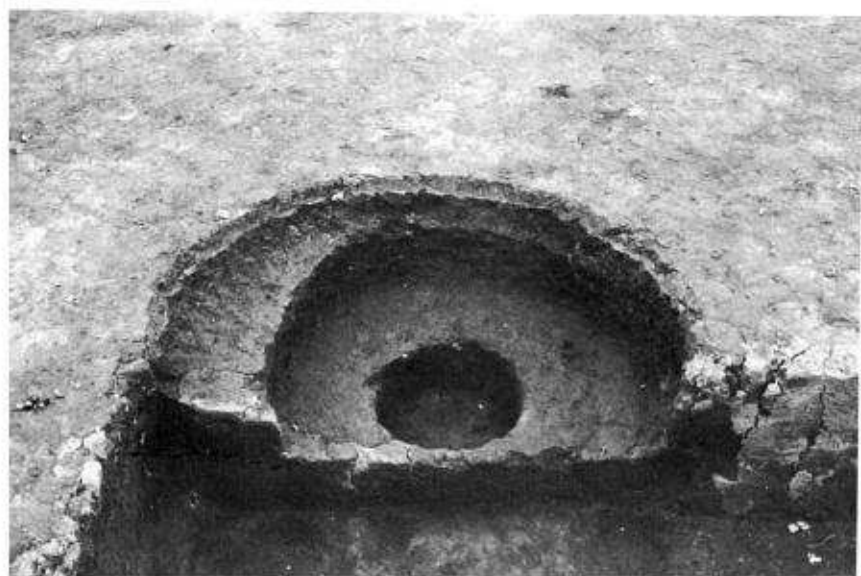




10：掘立柱建物遺構
検出状況



11：掘立柱建物遺構



12：掘立柱建物遺構
掘方



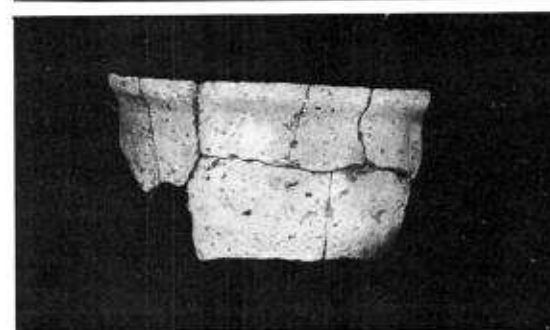
1



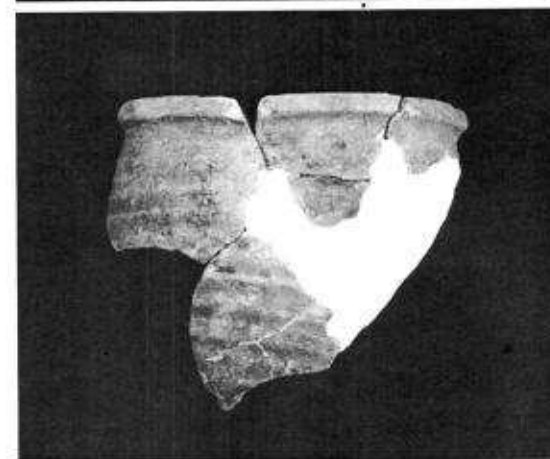
2



3



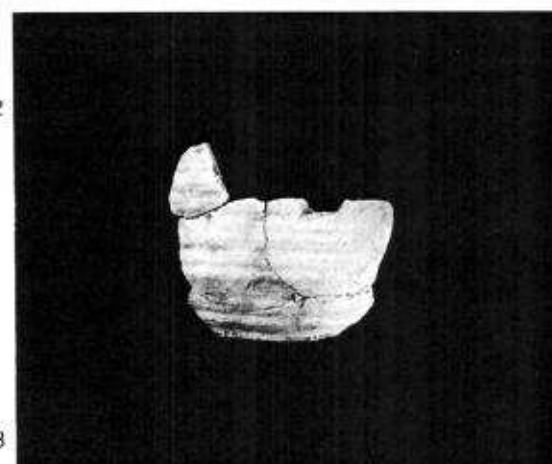
4



5



6



7



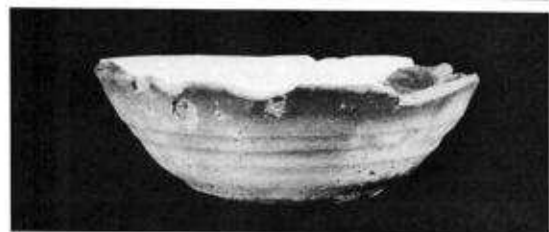
8

- 1 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{3}$)
2 ~ 6 : 土師器甕 (約 $\frac{1}{4}$)
7 ~ 8 : 土師器甕底部 (約 $\frac{1}{4}$)

図版 5 BG 53住居跡出土土器



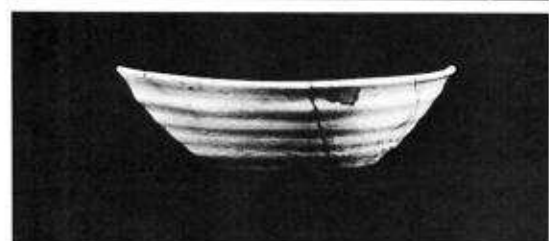
1



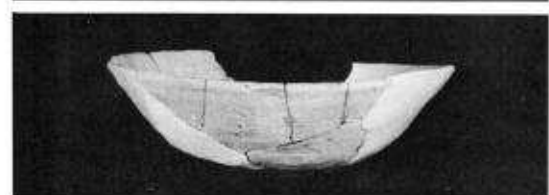
2



3



4



5



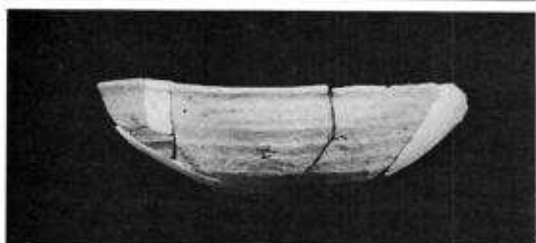
6



7



8



9



10



11



12

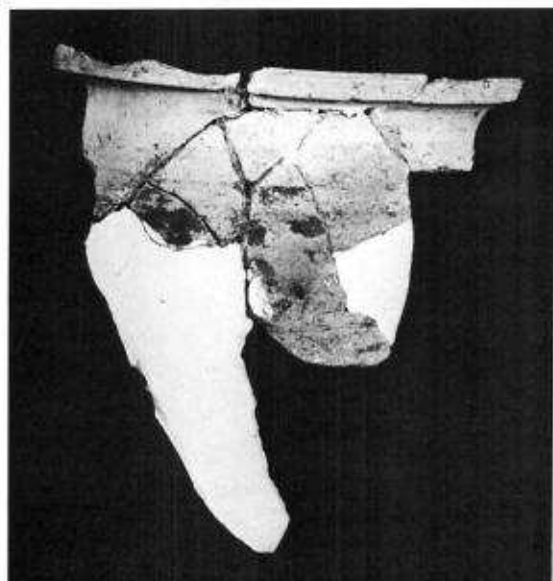
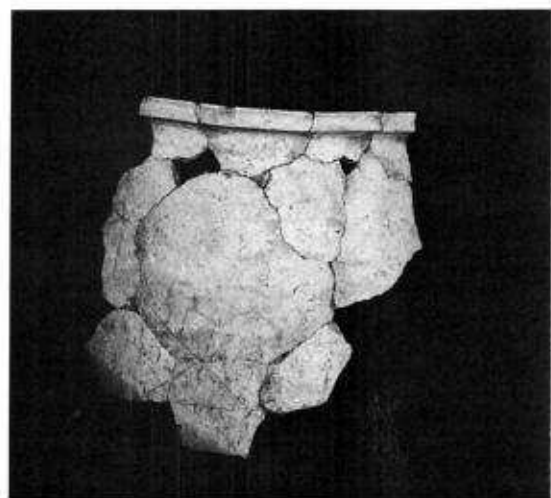


13

1～3：土師器坏（約 $\frac{1}{4}$ ）

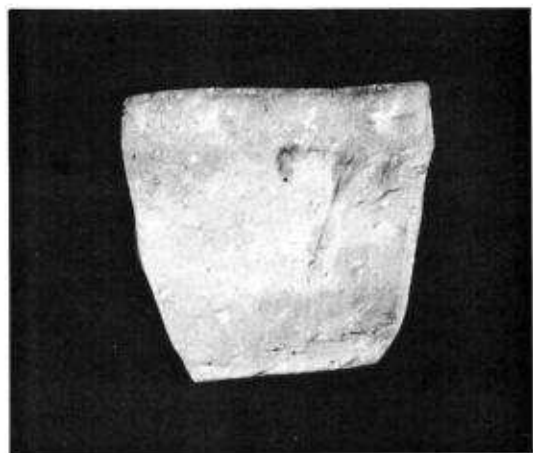
4～13：その他の土器坏（約 $\frac{1}{4}$ ）

図版6 CI 50住居跡出土土器



1～6：土師器甕（約 $\frac{1}{4}$ ）

7：須惠器小型壺（約 $\frac{1}{4}$ ）



1



2



3



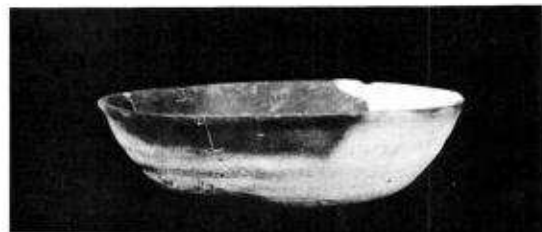
4



5



6



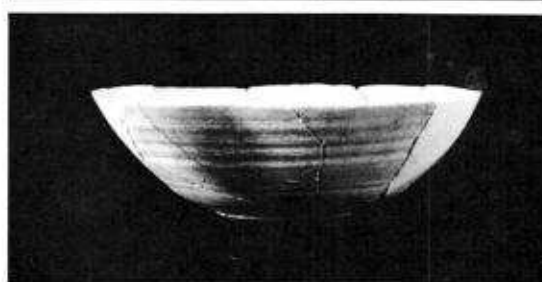
7



8



9



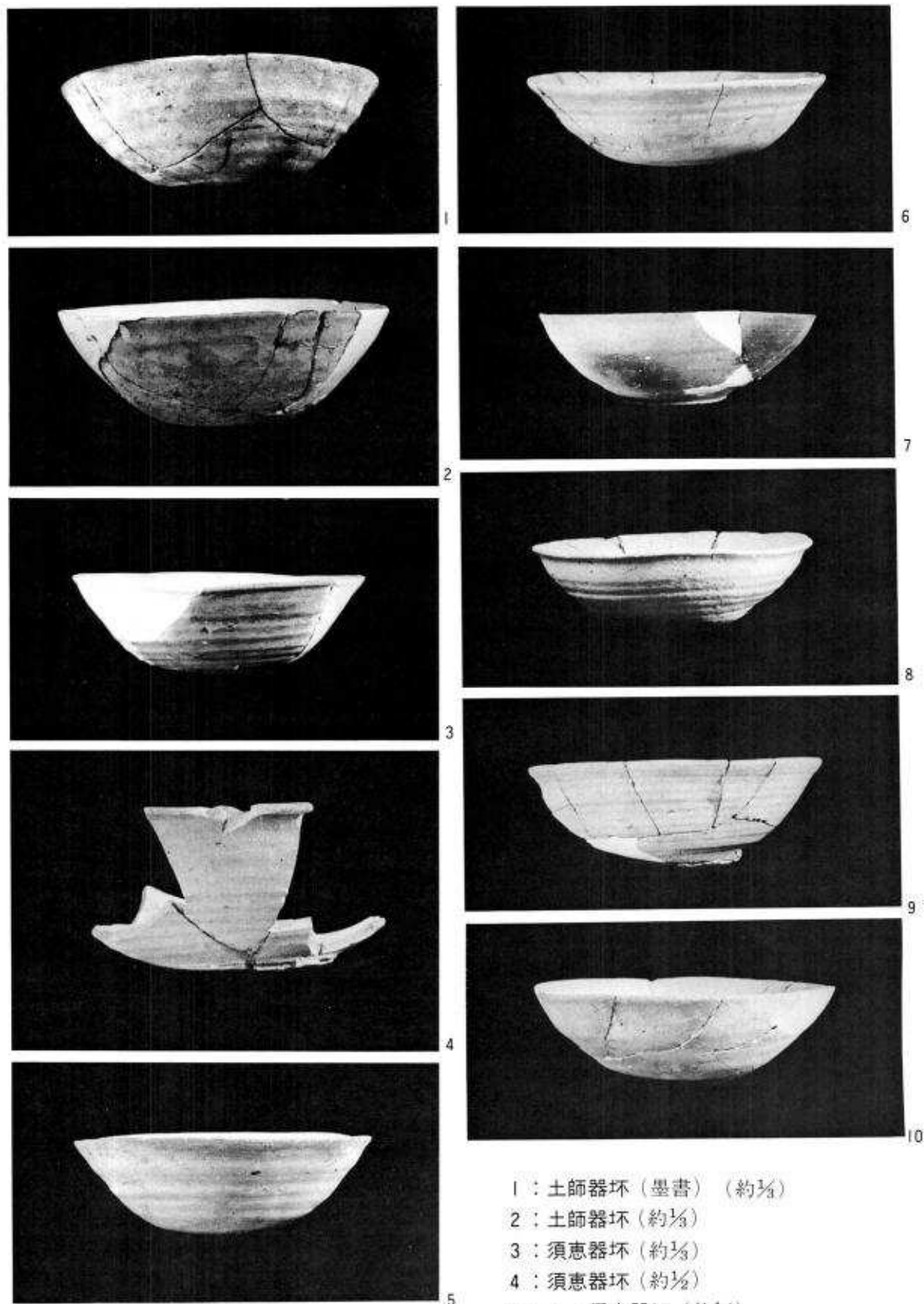
10



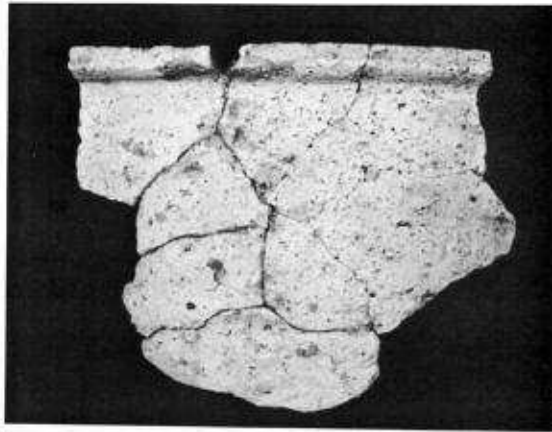
11

- 1 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{3}$)
 2 - 8 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{3}$)
 9 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{2}$)
 10 · 11 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{3}$)

図版 8 CE 36住居跡出土土器



- 1 : 土師器坏 (墨書) (約 $\frac{1}{4}$)
 2 : 土師器坏 (約 $\frac{1}{4}$)
 3 : 須恵器坏 (約 $\frac{1}{4}$)
 4 : 須恵器坏 (約 $\frac{1}{4}$)
 5・6 : 須恵器坏 (約 $\frac{1}{4}$)
 7-10 : その他の土器坏 (約 $\frac{1}{4}$)



1



5



2



6



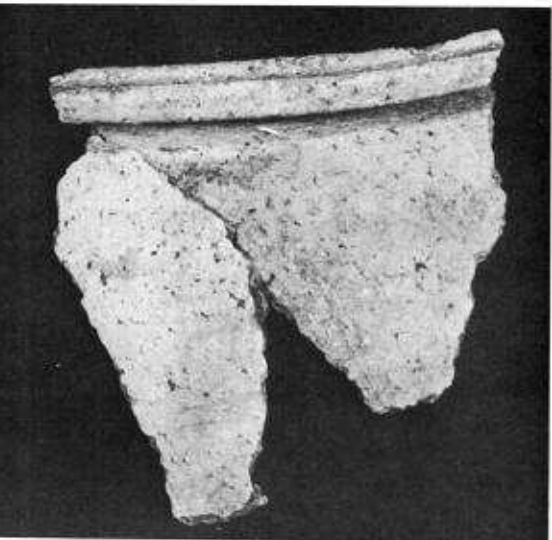
3



7



8



4

1~8 : 土師器甕 (約 $\frac{1}{4}$)

図版10 CE 36住居跡出土土器



1



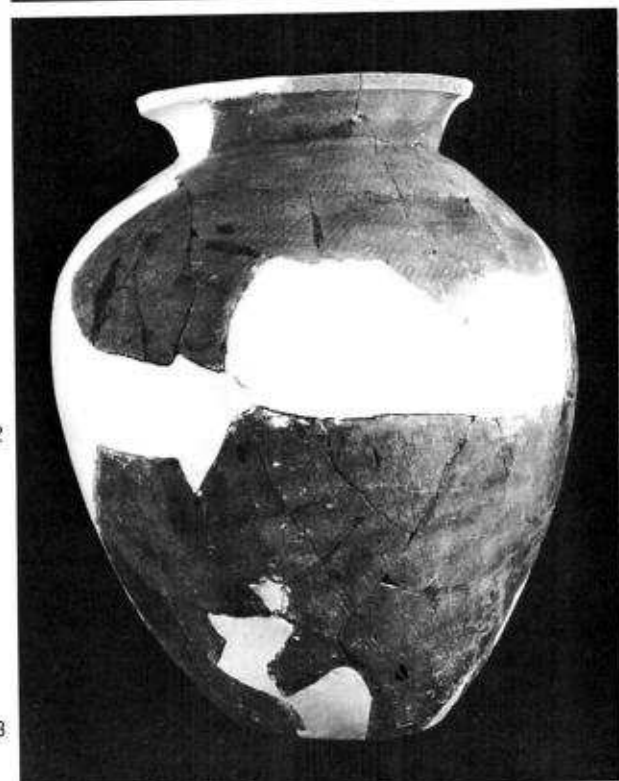
2



3

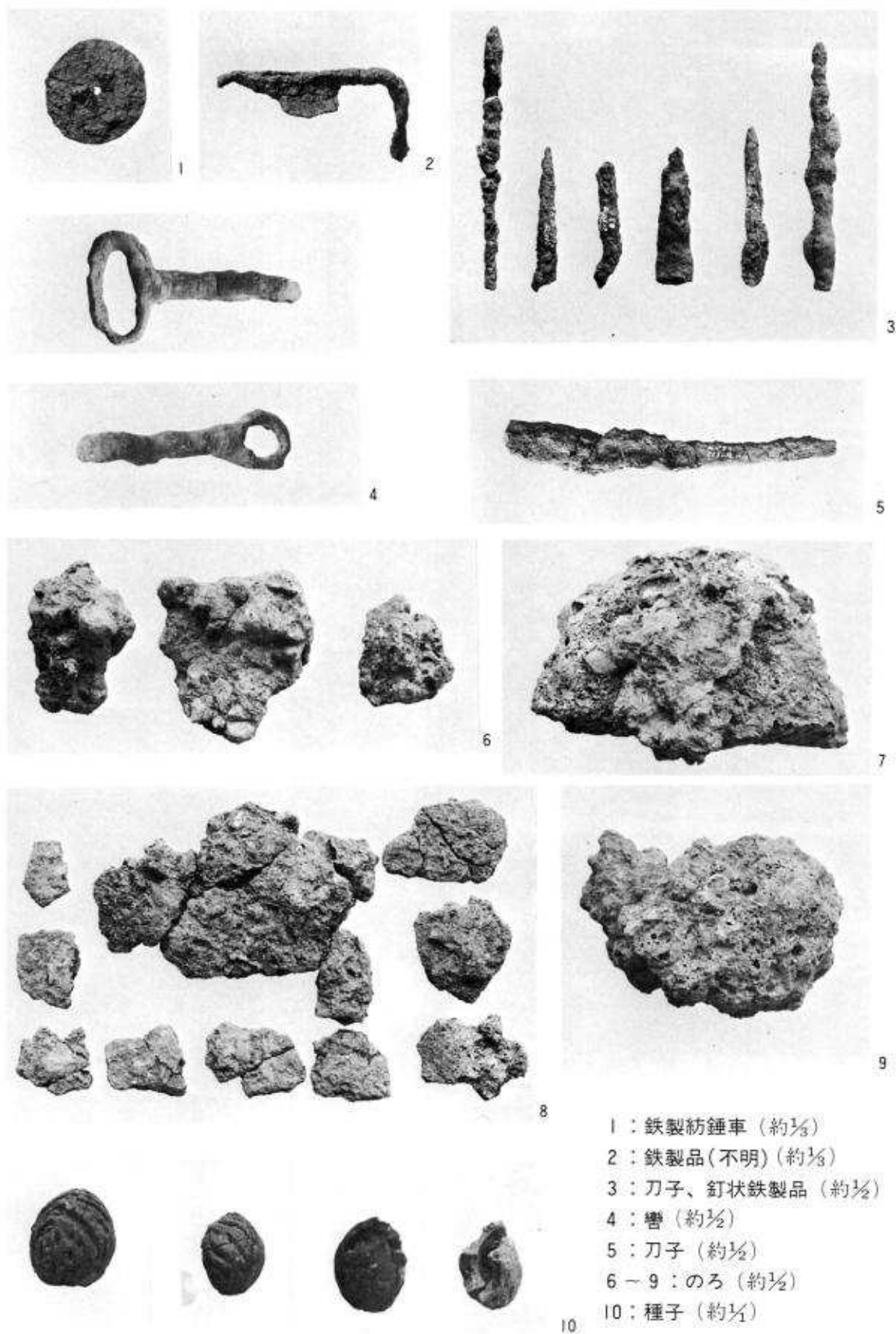


4

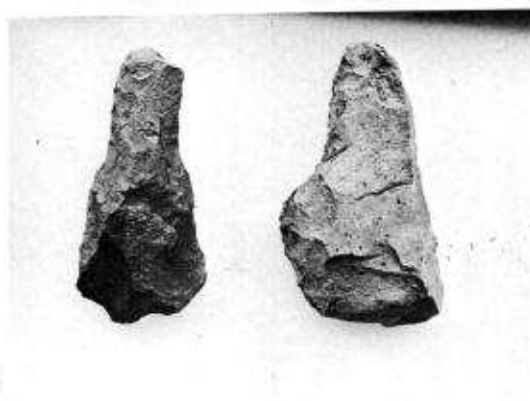
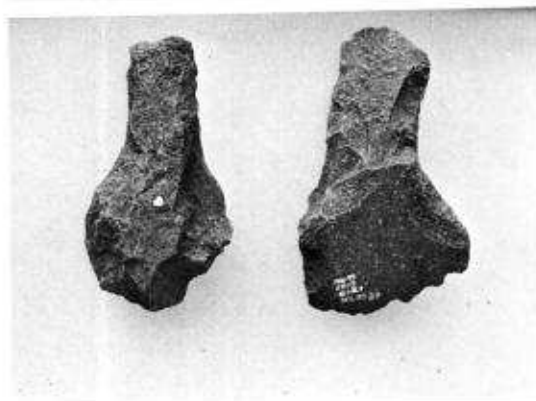


5

- 1・2：土師器甕（約 $\frac{1}{4}$ ）
 3：須恵器長頸瓶（約 $\frac{1}{2}$ ）
 4：須恵器長頸瓶（約 $\frac{1}{4}$ ）
 5：須恵器甕（約 $\frac{1}{4}$ ）



図版12 C I 50住居跡出土遺物



- 1 : 石器未製品 (約 $\frac{1}{8}$)
 2 : 磨製石斧 (約 $\frac{1}{8}$)
 3・4 : 打製石斧 (約 $\frac{1}{4}$)
 5 : 凹石 (約 $\frac{1}{4}$)
 6 : 砥石 (約 $\frac{1}{8}$)

図版13 盛土内出土石器

野田 I 遺跡

1 : 遺跡遠景
(北側より)



2 : 遺跡近景
(北東より)

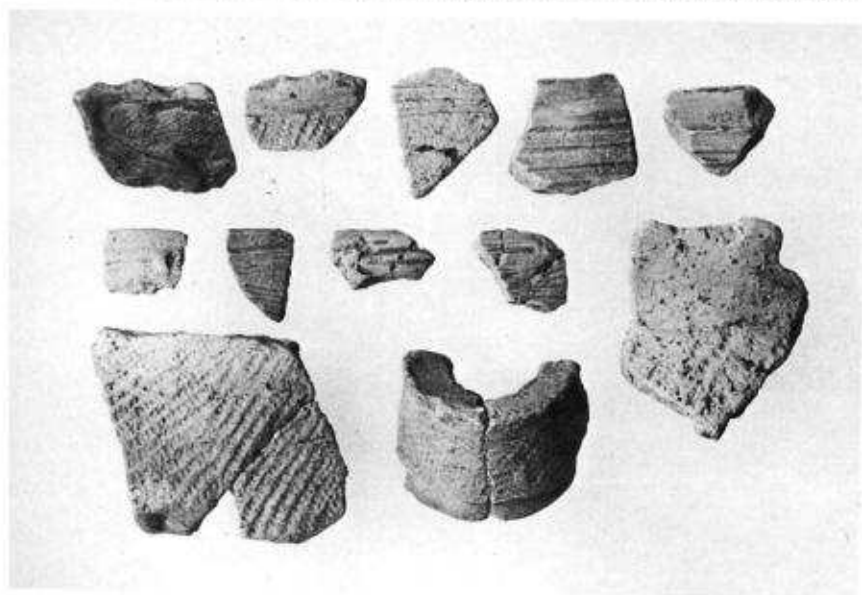


3 : 大堰川改修工事の
際土器の出土をみた
場所付近

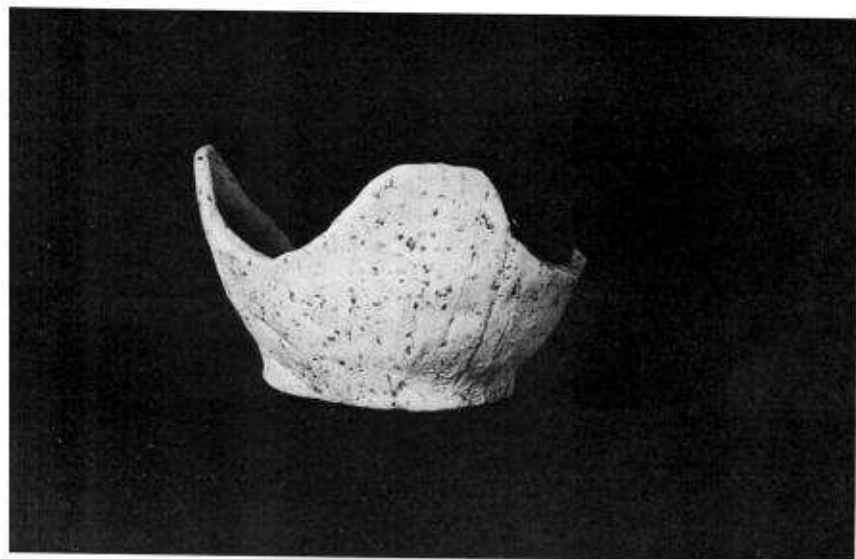




1 : 調査風景
(南側より)



2 : 縄文土器片
(約 $\frac{1}{2}$)



3 : 土師器
(約 $\frac{1}{2}$)

野田 II 遺跡

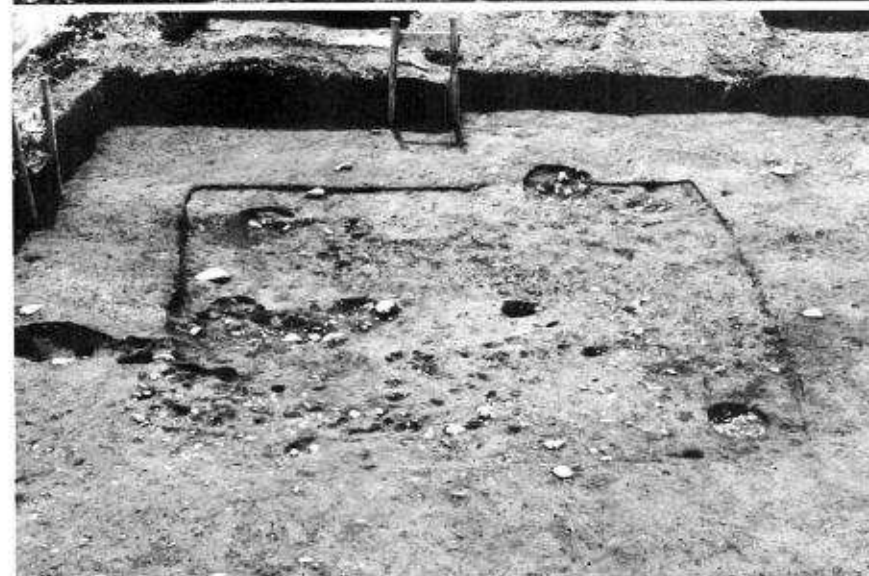
1 : 遺跡近景
(北側より)



2 : 発掘調査終了全景
(北側より)



3 : BG 50住居跡
(北側より)





1 : BG 50住居跡
ピット 4



2 : BG 50住居跡
煙道煙出部



1



4



2



5



3

BG 50住居跡出土土器

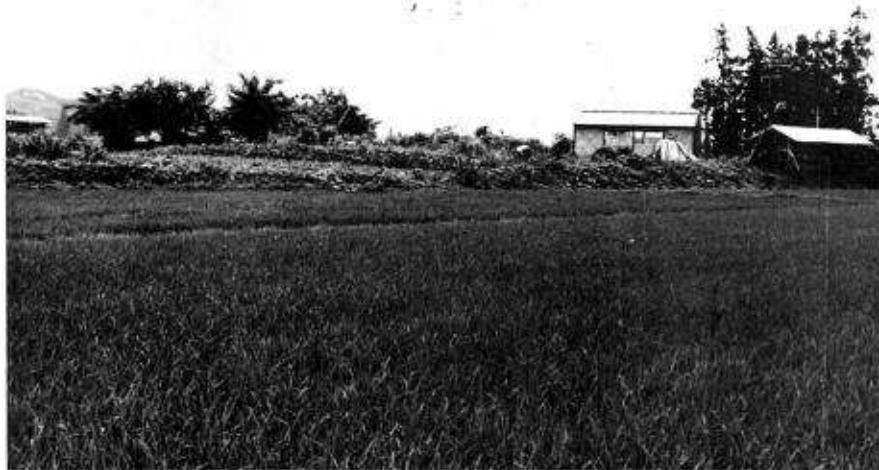
1 ~ 4 坏 (約 $\frac{1}{2}$)

— 294 — 5 壺 (任意)

図版 2

堀ノ内遺跡

1：遺跡全景
(北西より)

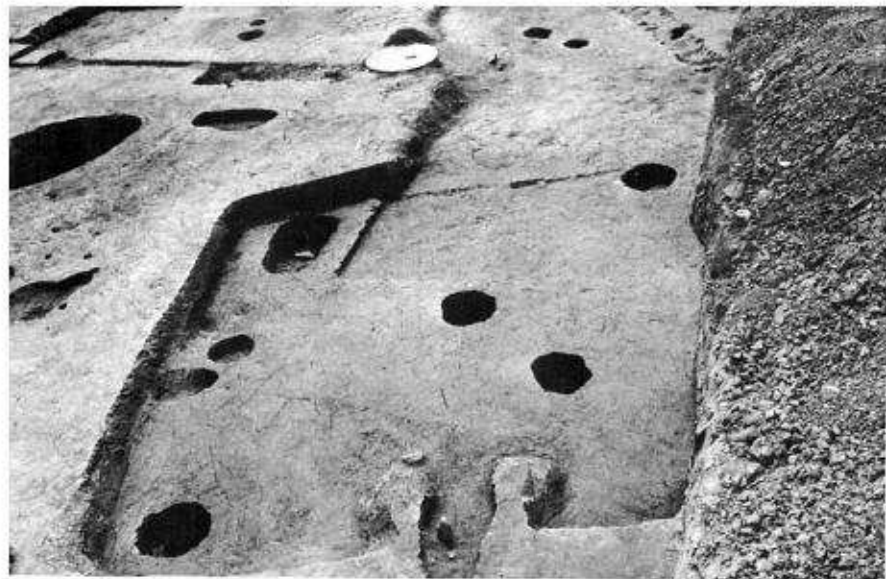


2：発掘作業風景
(北側より)



3：検出遺構
(C区南半～D区北半)

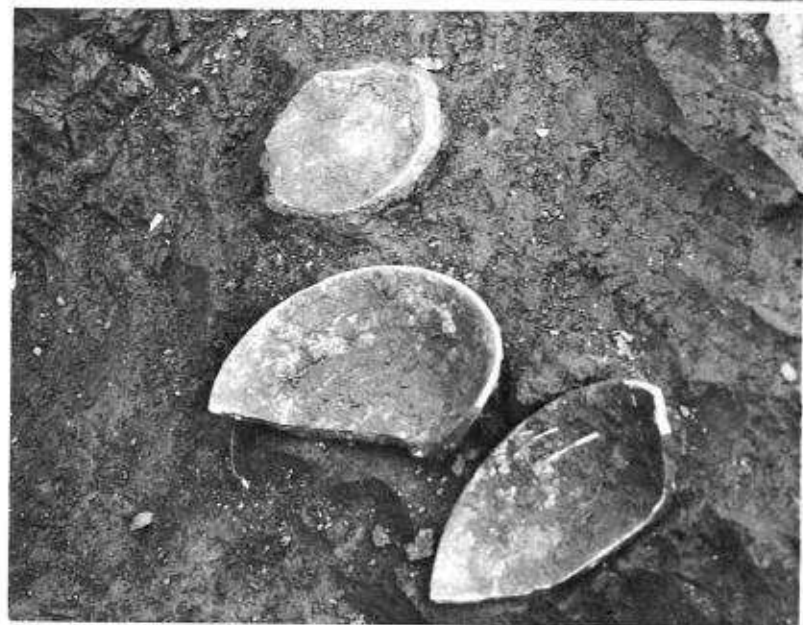




1 : CG 06住居跡
(北側より)



2 : CG 06住居跡
カマド及び煙道
(南側より)



3 : CG 06住居跡
土器出土状況

1 : CB53土坑
セクション及び
土器出土状況

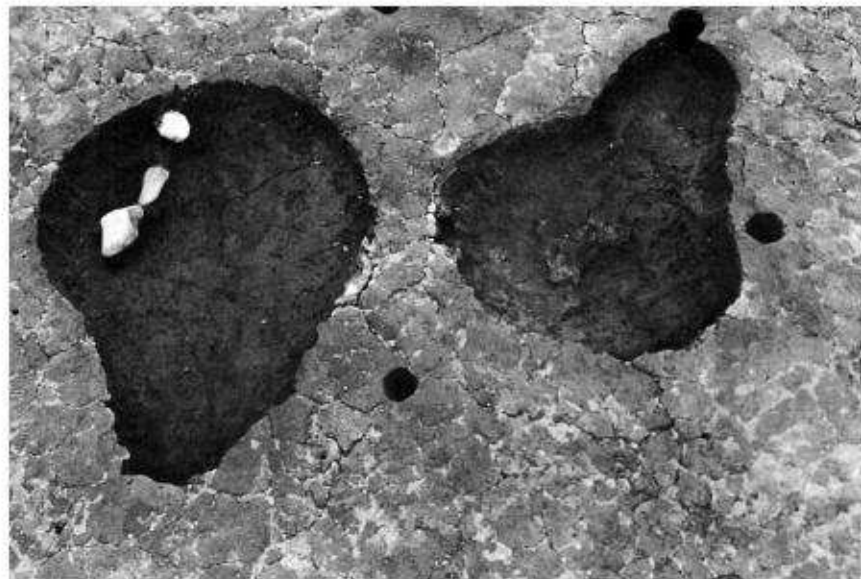


2 : CB53土坑
(南側より)

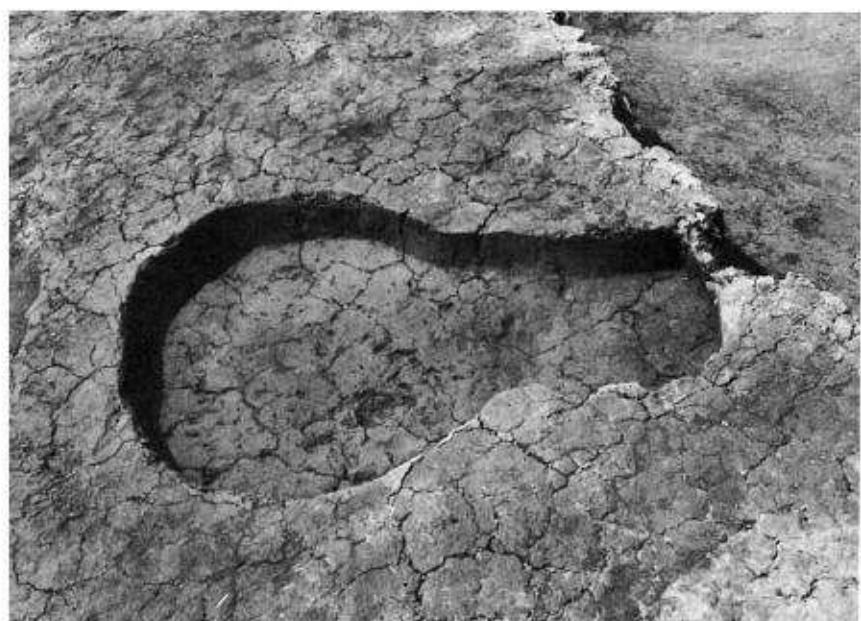


3 : 溝及び柱穴状ビット
(北西より)





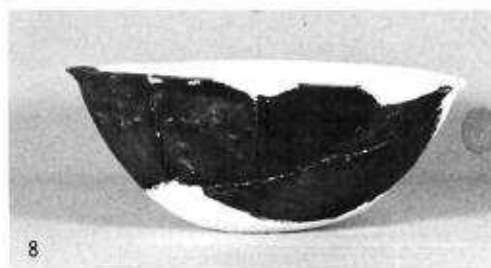
1 : 左 CH032 焼土ピット
右 CH031 焼土ピット
(北側より)



2 : DA531 焼土ピット
(北側より)



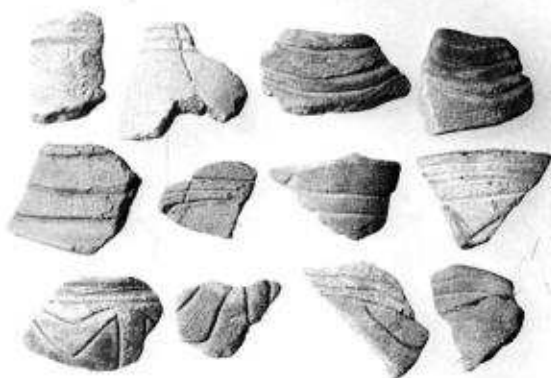
3 : CH50 土壇



1・2 : CG 06住居跡出土土器
 坏(約 $\frac{1}{2}$) カメ(約 $\frac{1}{4}$)
 3～9 : CB 53土坑出土土器
 坏(約 $\frac{1}{2}$)
 10 : CG 06グリッド出土土器
 カメ(約 $\frac{1}{4}$)



1：縄文土器片および
弥生式土器片（約 $\frac{1}{3}$ ）



2：同上



3：同上
下段右は土製紡錘車

高松遺跡

1：高松遺跡遠景
(東より)



2：調査区遠景
(北々東より)



3：CI 50グリッド内
土層堆積状況
(東より)





1 : F区遺物包含区域
調査風景
(北より)

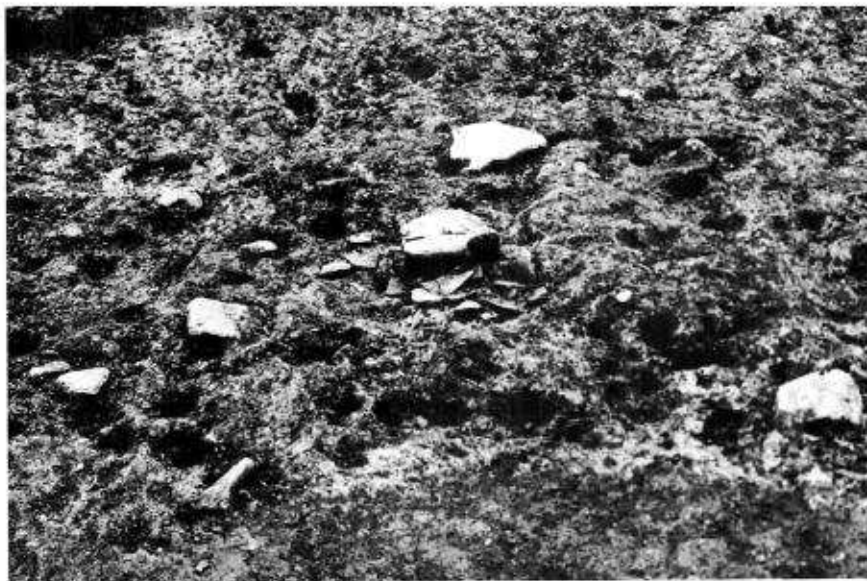


2 : F区遺物包含区域
遺物出土状況
(南西より)



3 : 同上
(北東より)

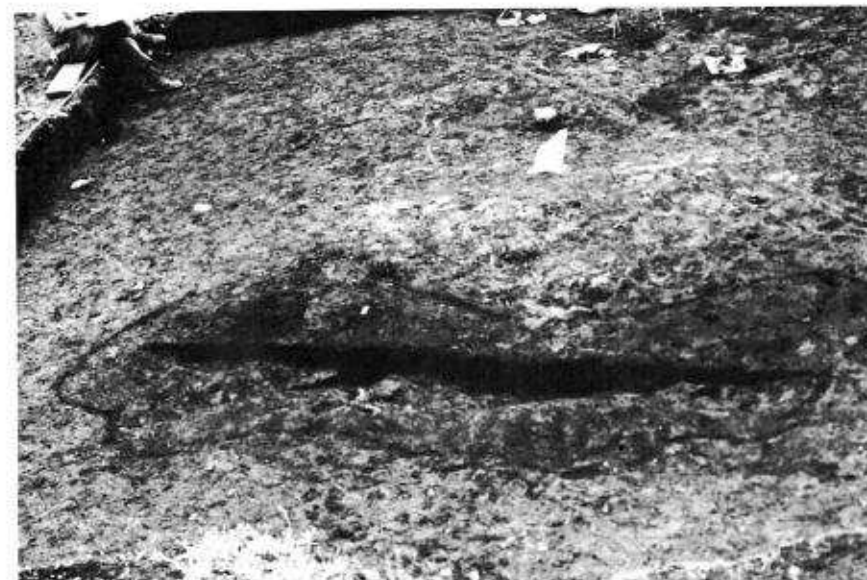
1 : F区遺物包含区域
P₂の遺物出土状況
(南より)

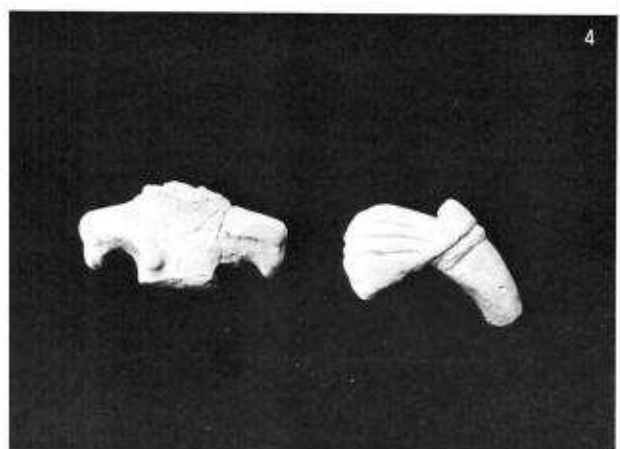
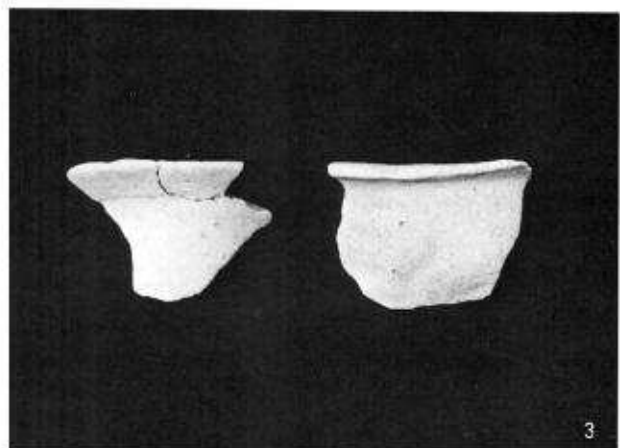
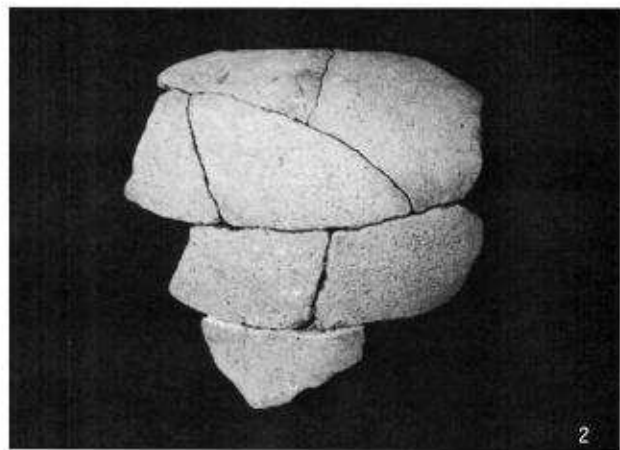
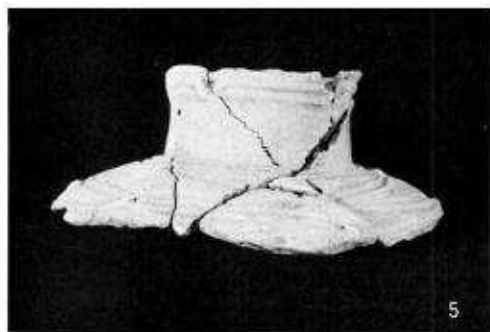
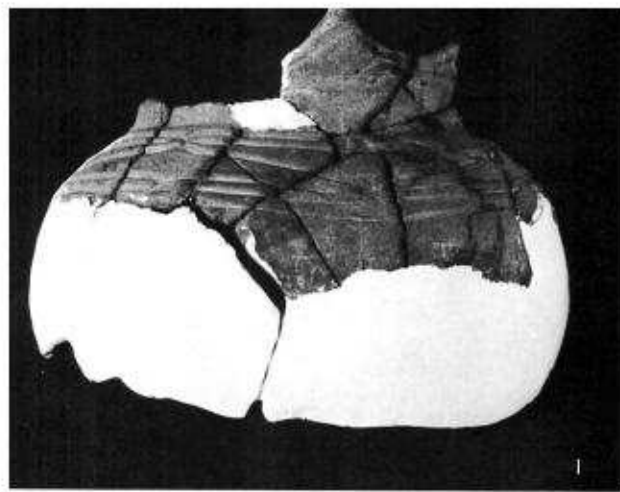


2 : F区遺物包含区域
土偶出土状況
(東より)



3 : F区遺物包含区域
西方の風倒木の根
穴状の凹地
(西より)





1・2・5・6・8：壺の破片
（縄文時代晩期）

3：土師器

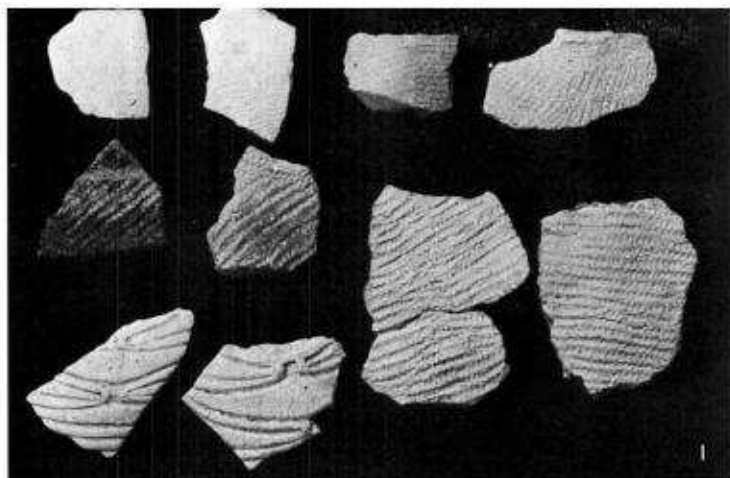
4：土偶破片（縄文時代晩期）

7：台付土器脚部破片

1～6・8：F区遺物包含
区域より出土

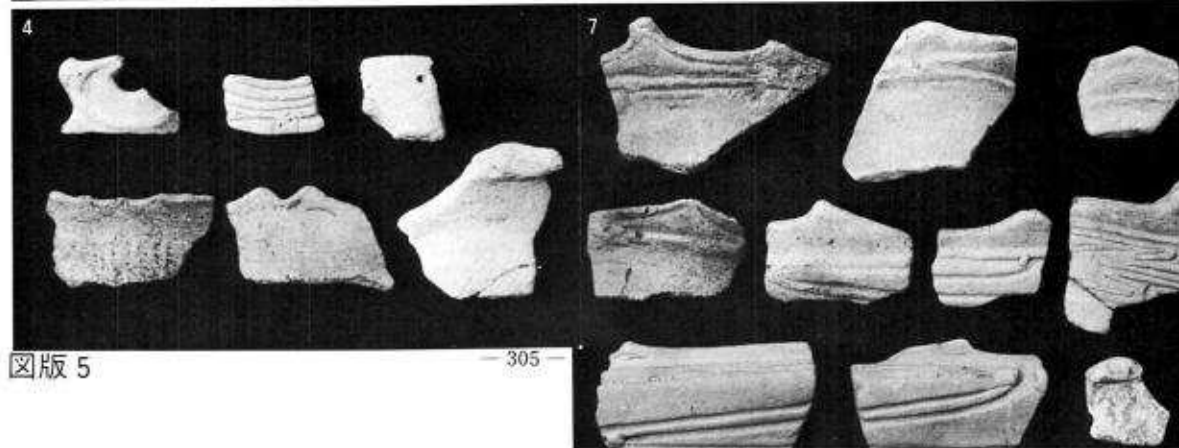
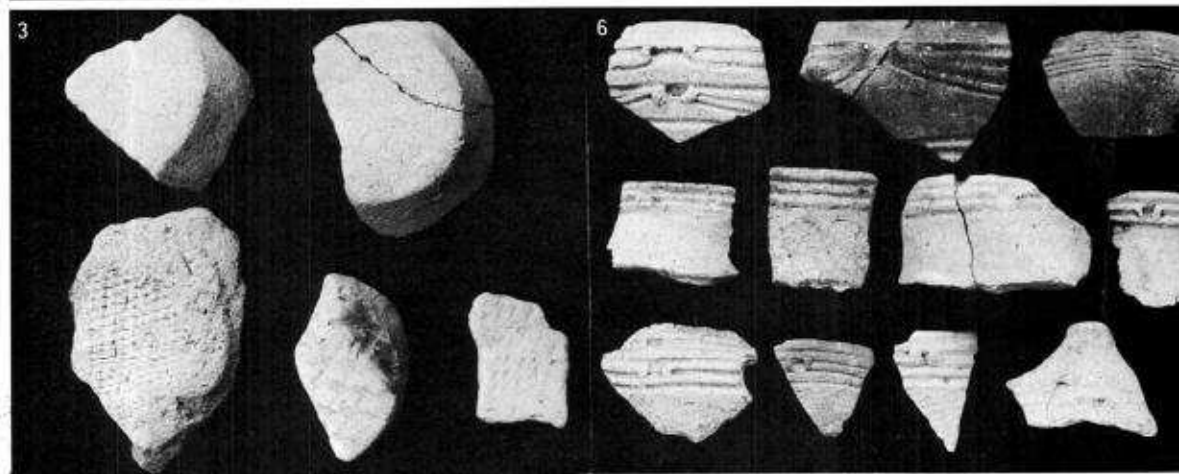
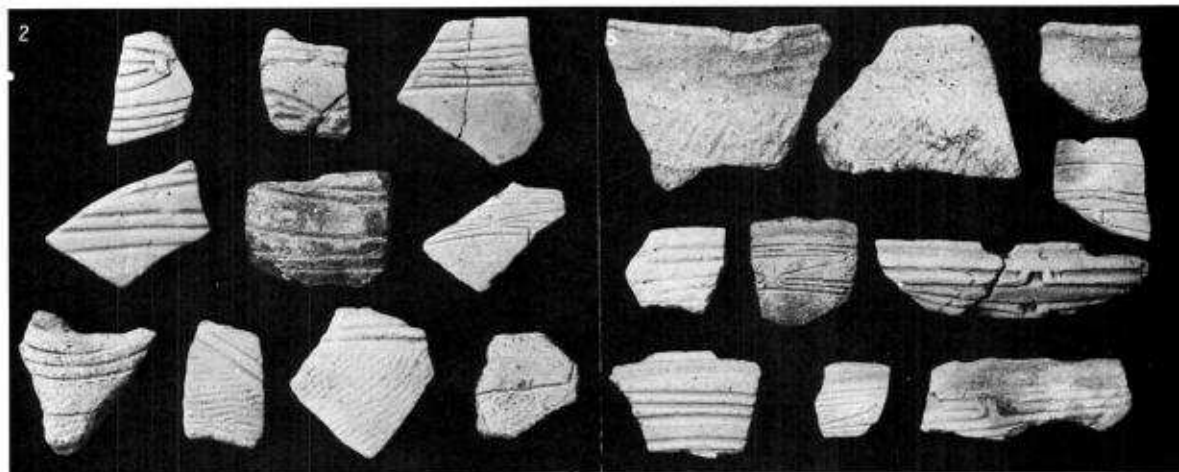
7：C区より出土

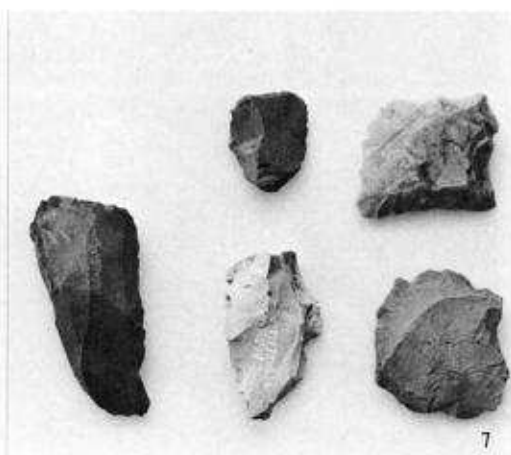
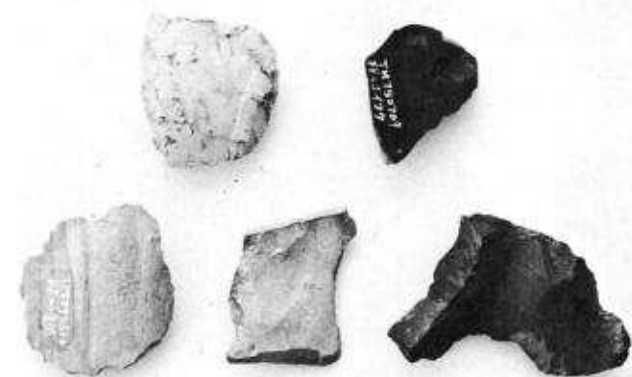
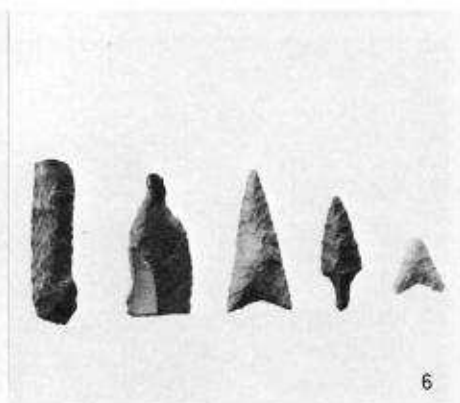
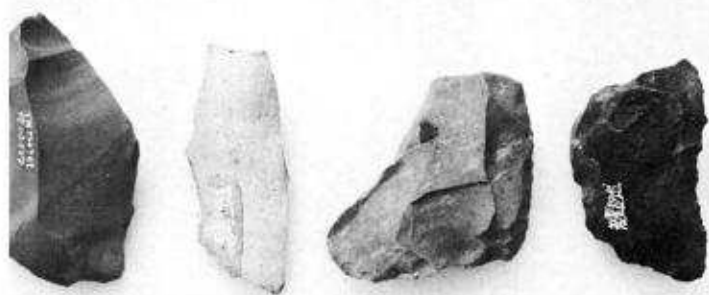
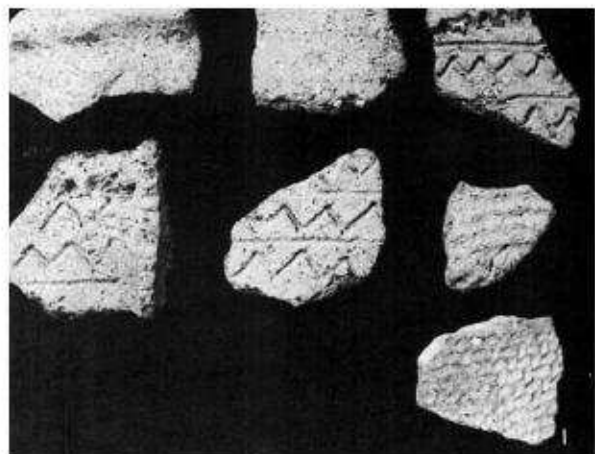
（1～3、5～7約 $\frac{1}{2}$ 、4約 $\frac{1}{3}$ ）



1・2 : 胴部破片
 3 : 底部破片
 4～7 : 口辺部破片

1～7 : 全てF区遺物包含
 区域より出土(約1/3)



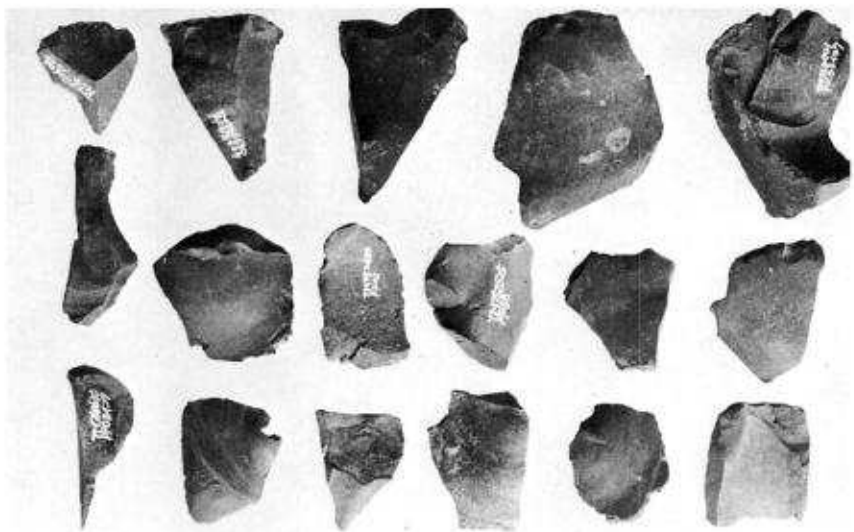


1～2：土器口辺部および胴部
3～7：石器類

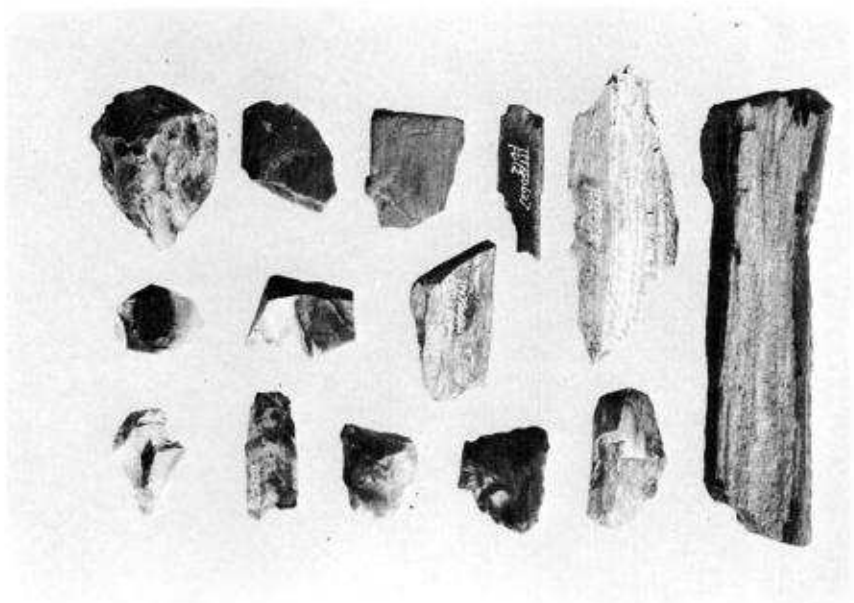
1～7：調査区内各所より出土
(1～2約½、3～7約½)

図版 6

1 : 頁岩類

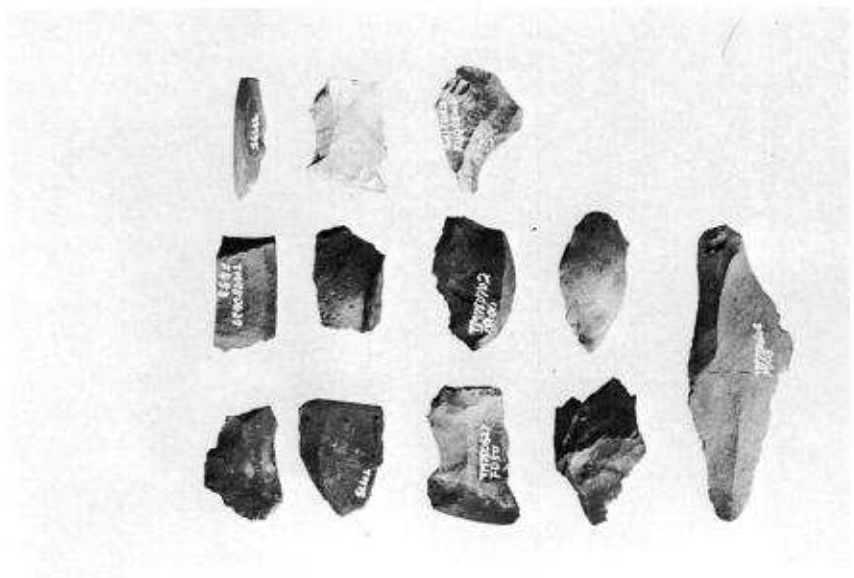


2 : 珪化木

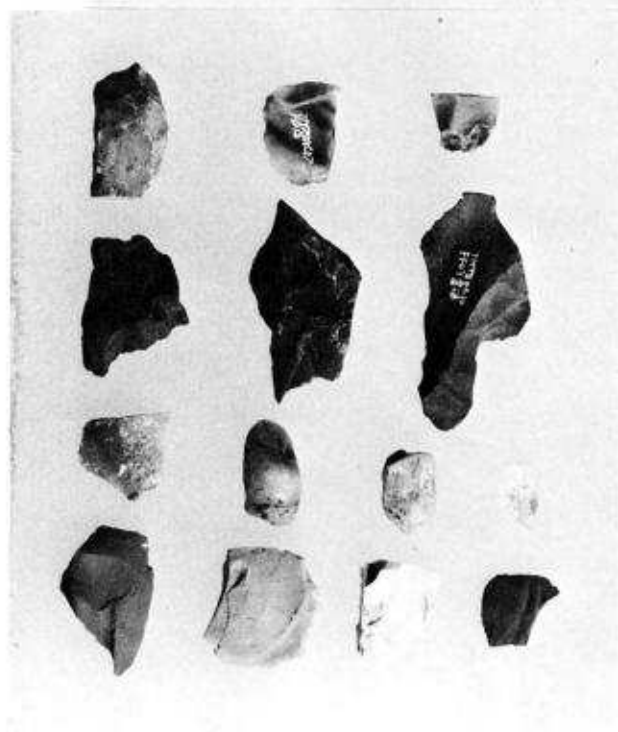
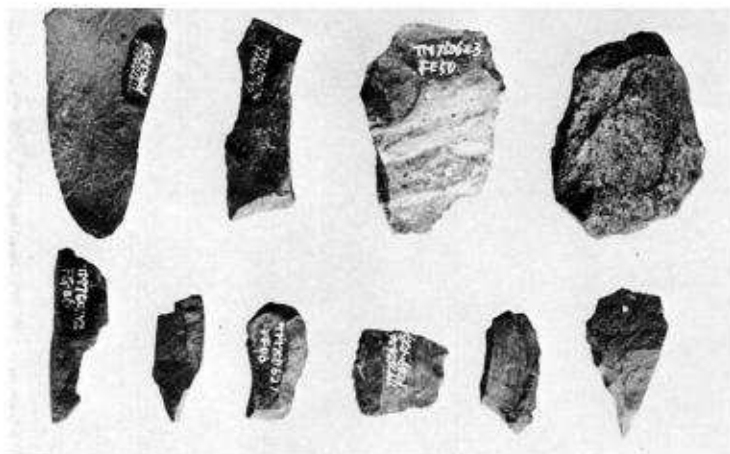


3 : 頁岩～凝灰岩類

1-3 : 高松遺跡出土
フレーク類(2)
(約 $\frac{1}{2}$)



1：流紋岩など



2：チャート・めのう
石英など



3：蛋白石・鉄石英・黒曜石



4：ホルンフェルス

1～4：高松遺跡出土
のフレーク類(1)
(いずれも約 $\frac{1}{2}$)

図版 8

八 幡 遺 跡

1 : 遺跡全景
(北側より)

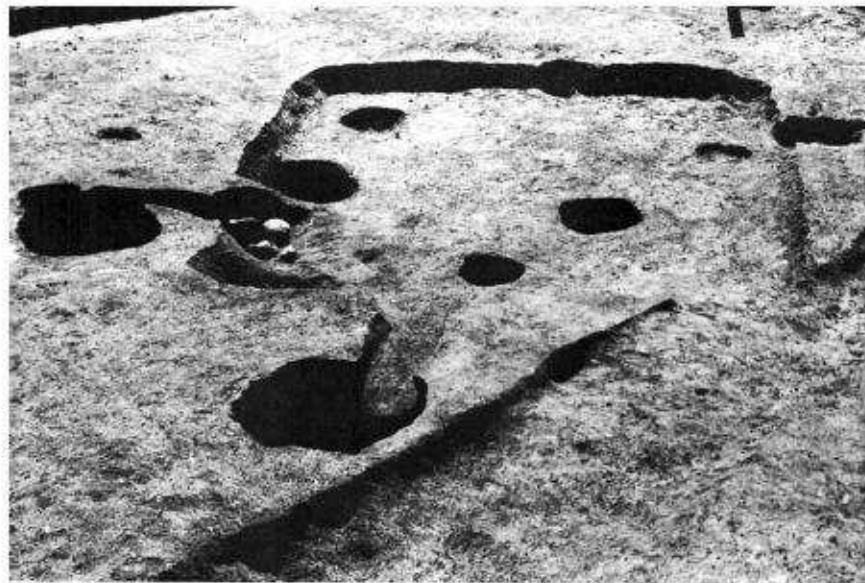


2 : 遺跡近景
(北側より)

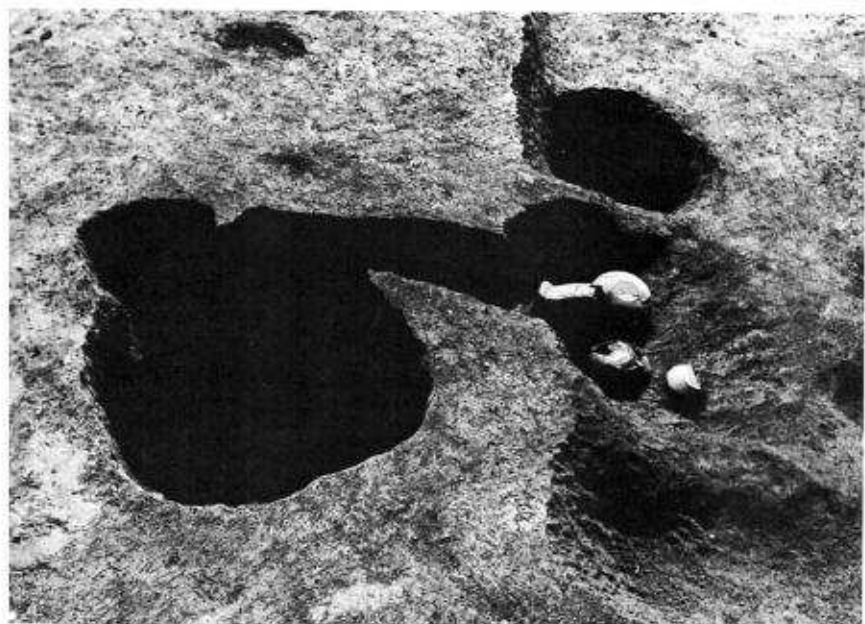


3 : 発掘作業風景





1 : CG 09住居跡
(北側より)



2 : CG 09住居跡
東カマド及び煙道
(北側より)



3 : CI 50住居跡
(北側より)

1 : CG 09住居跡と
柱立柱建物跡群
(南側より)



2 : 柱立柱建物跡群
(北側より)

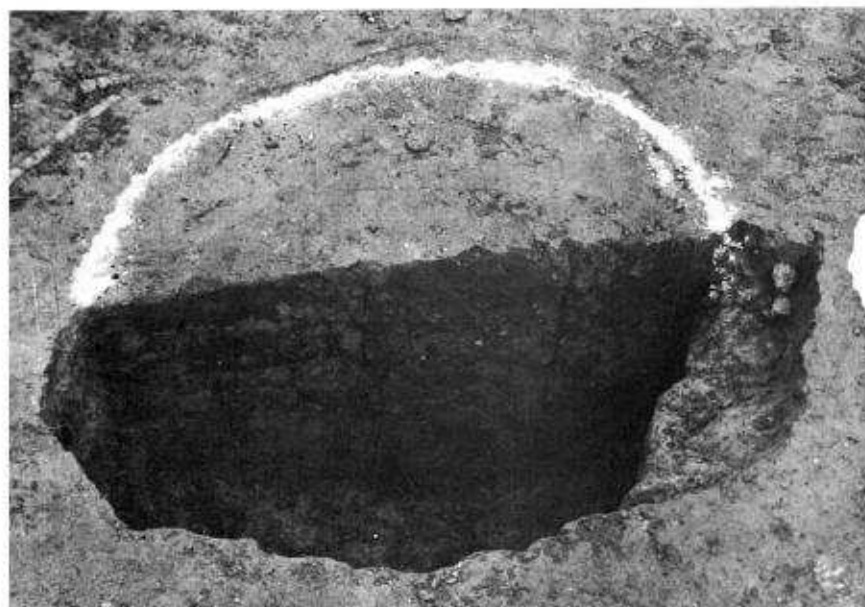


3 : CB 53掘立柱建物
跡(北側より)

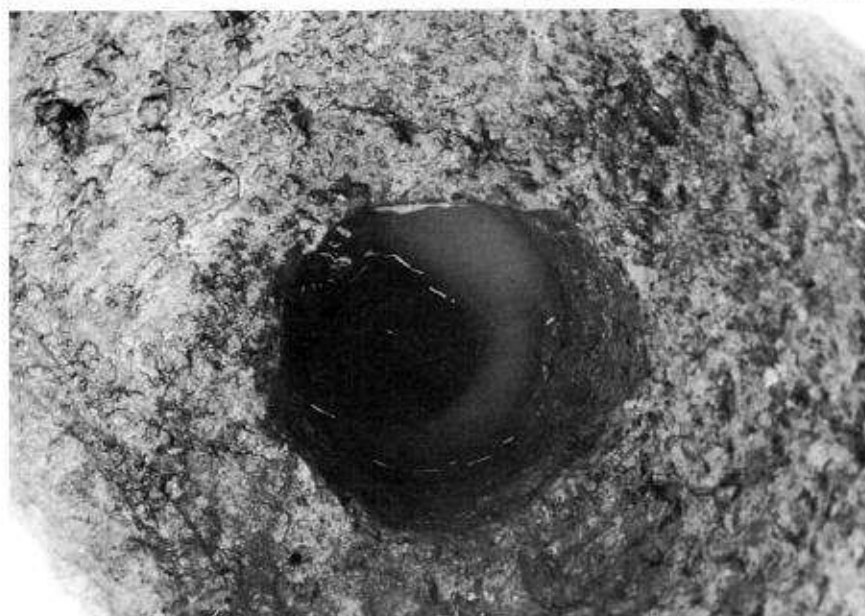




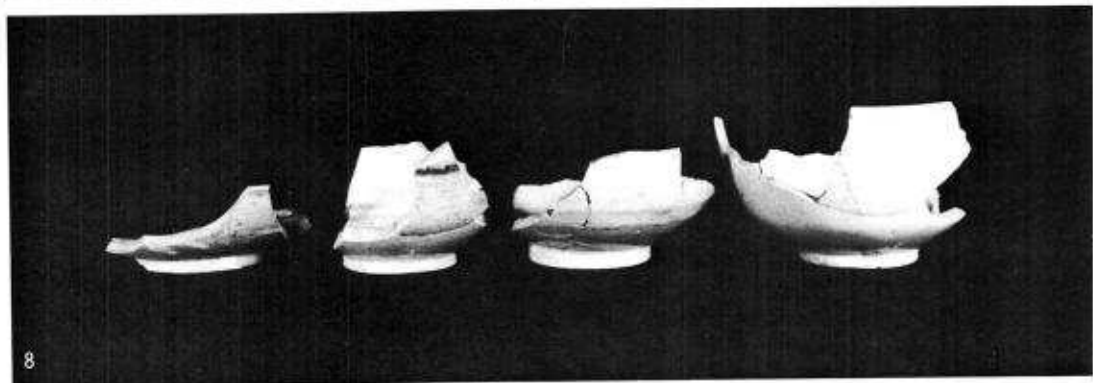
1 : 掘立柱建物跡
掘り方セクション



2 : 同上



3 : CB 50掘立柱建物跡
柱根残存部検出状況
(掘り方No23)



1～4：CG 09住居跡出土（約 $\frac{1}{8}$ ）

6：CI 06住居跡出土（約 $\frac{1}{8}$ ）

8：BH 03グリット（攪乱）出土陶器（約 $\frac{1}{8}$ ）

5：CI 50住居跡出土（約 $\frac{1}{8}$ ）

7：CI 06住居跡出土（約 $\frac{1}{4}$ ）

図版 5



1 : CB 50掘立柱建物跡
出土古銭
(掘り方No.33出土)
上 : 古寛永
下 : 新寛永 (左は高津銭)
(約1/2)

2 : 同上 (背面)
下の左には「元」の背文がみえる
(約1/2)



3 : 石器および石片 (約1/2)

上段左、右端と右3番目はCG 09住居跡出土
以下表土出土

大明神遺跡

1：調査区全景
(北より)

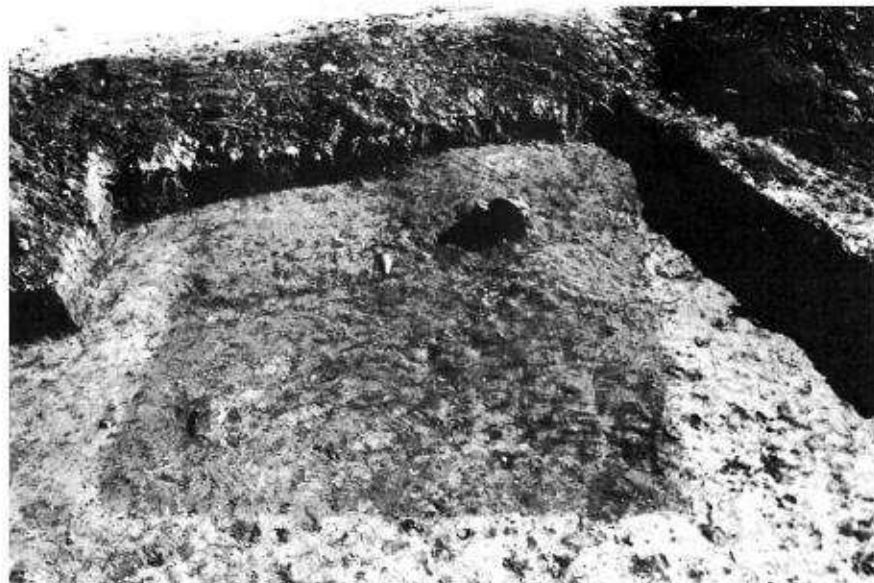


2：弥生時代遺物
出土状況(北より)



3：弥生時代台付
土器出土状況
(D.C 06グリッド、

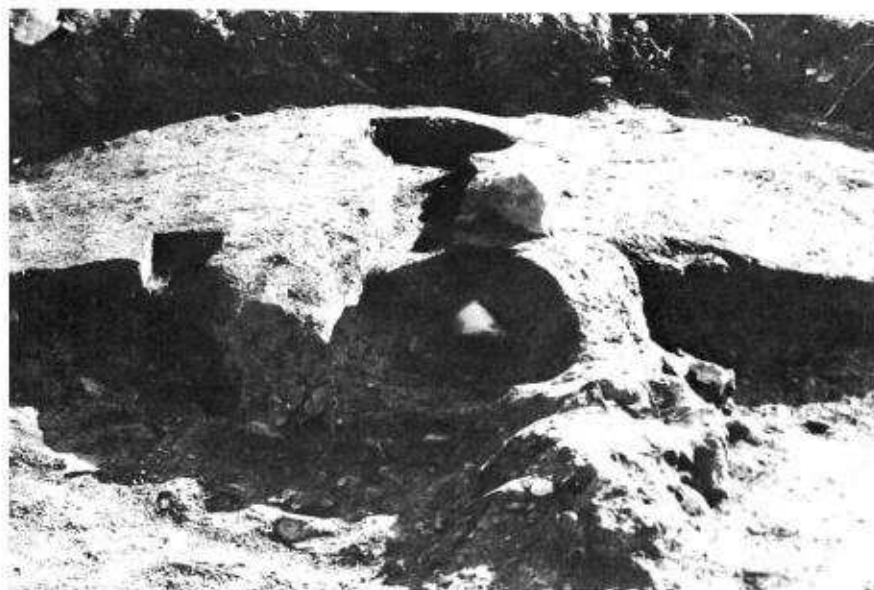




1 : BG 50住居跡
検出状況(北西より)



2 : BG 50住居跡
全景(北西より)



3 : BG 50住居跡
かまど部全景

1 : BG 50住居跡
かまど南裾部分
遺物出土状況(南より)

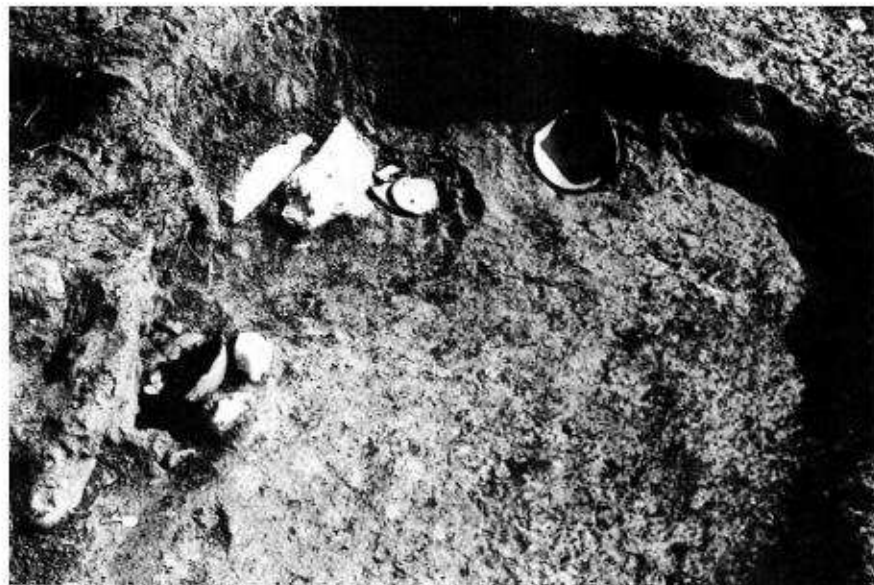


2 : BG 50住居跡
かまど部断面
(北東より)



3 : BG 50住居跡
かまど部支脚出土
状況(北東より)

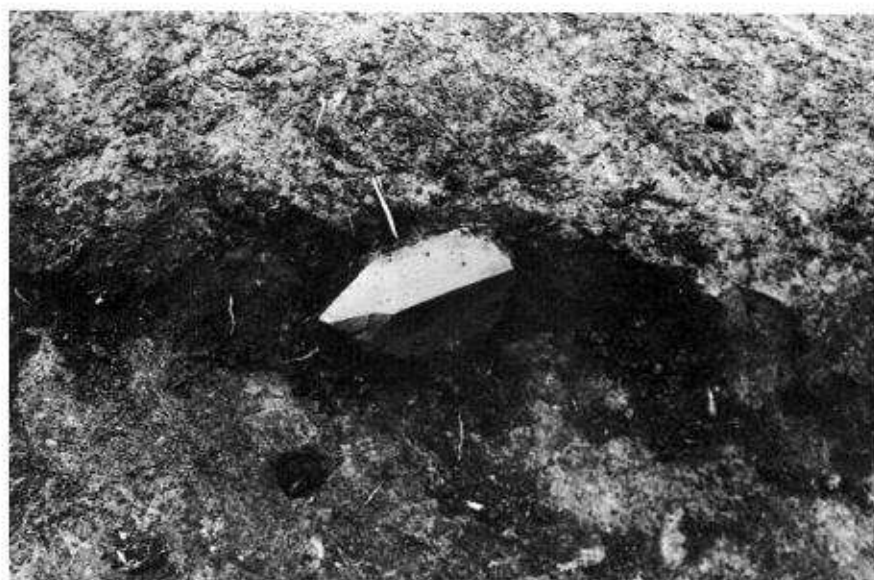




1 : BG 50住居跡
かまど部南側ピット内
遺物出土状況(北西より)



2 : 同上
さらに埋土を除いた
状況(北西より)



3 : BG 50住居跡
南西壁際
砥石出土状況(北より)